

ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースィー著『被造物の驚異と万物の珍奇』(4)

守川 知子\* 監訳

ペルシア語百科全書研究会\*\* 訳注

〔第3部 大地と水と海の驚異について〕

〔第1章 水の驚異について〕

至高なるアッラーのいわく、「われは雲から豊かに雨を降らせ、(中略) [様々な園を] 茂らせる」[Q78: 14-16]、[すなわちペルシア語では] 至高なる神は、「われは雲から水(雨)を降らせ、それによって植物を芽吹かせ、庭園を育み、果実をもたらす」とおっしゃっている。

知れ。水(ab)の気高さは、まさに次のことにある。『クルアーン』において「玉座が水の上にあったとき」[Q11: 7]と言われ、また別の箇所でも「そして水から一切の生きものを創ったのである」[Q21: 30]、すなわち [ペルシア語では] 「われはすべての存在の生命を水のうちにおいた」と [神がみずから] おっしゃっていることに。

知れ。世界を支えているものは4つあり、1つは水、2つ目は土、3つ目は風、4つ目は火である。この4つは誰にでも惜しみなく授けられた。王であれ、貧者であれ、象であれ、蚊であれ、すべてひとしなみに与えられた。これについてはみな平等であり、それこそが造物主の公正さである。

ある者に人々が尋ねた。「存在するものの中で最も尊いものは何か？」

[その人物は] 答えた。「水である。」

「では最も卑しいものは何か？」

いわく、「水である。」

つまり、水は豊富にあるときには何の価値もないが、少なくなると、ひと口分が1000ディーナール金貨にも値する。シュラーア (Šurā'a) は言った。「水は生命であり、私はそれを犬やロバと分かちもつ<sup>1)</sup>。」

水は栄養分を各部に届け、養い育てる。良い水は顔を美しくし、体を健康に保つ。(p.88) [イブン・] アル=アウラービー ([Ibn] al-A'rābī<sup>2)</sup>) は言う。「おお神よ。私に悪しき水を下されますな。私が悪しきものとなってしまいますがゆえに。」

最も良い水は東のほうからくる水である。すぐに冷え、すぐに温まる。また、最も悪い水は雪や氷の [溶けた] 水であり、冷たさがその繊細さを奪い去り、濃い部分が残ってしまっている。泉の水は濃く、とりわけ金や銀、黒玉、硫黄の鉱床にある泉はそうである。そのような水は濃厚なために、排尿困難 ('usr al-bawl) を引き起こす。[ちなみに] これらの鉱物は、湿気と冷たさから生じる。

\* 北海道大学大学院文学研究科准教授

\*\* 本研究会については、『イスラーム世界研究』第2巻2号(198-204頁)の監訳者による「解題」を参照のこと。

1) 同じ問答が、イスファハーニー(967年没)著『歌の書 (Kitāb al-āghānī)』に現れる [Abū al-Faraj al-Isfahānī, Kitāb al-āghānī, Dār al-Kutub, repr. Mu'assasa Jammār, Beirut, [n.d.], vol. 7, p. 49]。

2) クーフアで活動した文法学者ムハンマド・ブン・ズィヤード(846年没)のこと [EI<sup>2</sup>: Ibn al-A'rābī]。

冷たい水は、脳や神経、歯に害がある。というのも、これらの部位はそもそも冷たい場所だからである。一方、塩辛い水というのは、太陽がその良い部分を奪い去ってしまったもので、良い部分は体の各部に行き、不要な部分だけが残った尿のようなものである。

美味な水は軽く、浸透力がある。蠟で口のない中空の壺をつくり、塩辛い水の中につけ、一昼夜経ってから引き上げると、壺の中には美味な水がたまっている。なぜなら甘い水には浸透力があるが、塩辛い水にはないからである。

### [水について]

知れ。水は4元素の1つであり、貴いものである。生命のもとであり、清浄さの源である。その中には味わいと色が創造されている。たとえば荒野や、種子や穀粒が1つもない燃えつきた灰の上に雨が降ると、そこから、それぞれに色やかたちや匂いのあるさまざまな植物が生長する。同様に、水が庭園の中を流れると、青いリンゴや赤いザクロ、白や黒のブドウ、香り高きユリや悪臭を放つニンニクが育つ。これらすべてのことが水の中に定められており、空気や土を介してこれらの実が結ばれる。

知れ。最初、創造主は水を白い珠(jawhar)からお創りになった。その珠をご覧になると、畏怖ゆえに珠は割れ、半分は溶けて水となった。もう半分は、[創造主が]そこから天球をお創りになった<sup>3)</sup>。今ではその水は、世界の向こう側にあり、「深海(Baḥr al-‘amīq)」および「周海(Baḥr al-muḥīṭ)」と呼ばれている<sup>4)</sup>。またルームでは、「タルテッソスの海(Baḥr-i Ṭartāws)」<sup>5)</sup>と(p.89)呼ばれている。すべての水の戻るところは「大地の真ん中(wasaṭ al-ard)」にある。それは大地の中心である。

太陽は自身の力で地球の6方向から水を引き寄せ、上に引き上げる。すると、驚くべき英知により、[それは]雨となり、世界に降りそそぐ。世界中の賢人たちの努力をもってしても、100ギャズ<sup>6)</sup>四方の地面さえ湿らすことはできず、水を雨として降らせる術を知ることはない。だが創造主は東から西まで[の大地]を雨で湿らせる。もし、水が一度に降りそそぐようなことがあれば、破壊をもたらし、根元からなぎ倒されてしまうだろう。しかし、[神の]深遠なる英知により、[それは]滴となる。定めにしたがい、1粒の滴が他よりも多くも少なくもならず均一に。それぞれの滴は石ころ1つ分より重くなることはない。雨が降ると、[水は]大地の各部に行きわたり、大地はそこから[水の]貯えを得る。そして余った分は大水となり、荒れ地に流れ出る。

知れ。太陽が大地から離れると、そこには湿気(ruṭūbat)によって海(baḥr)が現れる。ミスル(エジプト)の地は、最初は海であったが、その後ミスルとなった。ギリシアの地は、何度か海となり、何度か陸になった。今見えているこの雲は、もし西からきたのであれば、ハザルの海(カスピ海)とルームの海(地中海)の水蒸気からその水をもたらす。もし[雲が]東方から現れて雨が降るならば、その水はハルカンドの海(Baḥr-i Harkand)<sup>7)</sup>からもたらされる。ゆえに、知るがよい。

3) 神が最初に創造した「白い珠」については、本書第1部(本訳注(1)、403-404頁)を参照のこと。

4) 古代ギリシアで「オケアノス」と呼ばれた、大地を環状に取り囲む海。

5) ヘロドトスが伝えるイベリア半島の古王国の名に由来する。ただし、先行するアラビア語地理書ではこのようには言及されていない。

6) 長さの単位。1ギャズはおよそ95センチメートル。

7) 次章の「ハー(al-hā’)」の項目中に現れる。

世界の諸事に無意味なものではなく、それを動かすお方があり、それをつくり出す完全なる全能者がおられるのである。いわく、「水は魂の要素であり、息の精髓、身体の柱である」と。「水から一切の生き物を〔創ったのである〕」[Q21: 30] と至高なるお方のお言葉にあるように。

水の色は、水がある場所の色である。緑の盃に水を入れると緑色に見え、赤の場合は赤く見える。底が深ければそれは黒く見える。

さて、海の驚異に関する章を記そう。至高なるアッラーが望みたもうならば。

## 第2章 海の驚異について——アルファベットの順に従って——

至高なるアッラーのいわく、「[かれこそは] 海洋を（人間に）使役させられる方で、それによってあなたがたは鮮魚を食べ、また服飾に用いられるものを（p. 90）それから採り、その中に波を切って進む船を見る」[Q16: 14]。すなわち[ペルシア語では]「われはおまえたちのために海を従わせた。その結果、そこから食するための新鮮な魚がもたらされ、装飾のための真珠がもたらされる。またその中で船はラクダのように進み、おまえたちの荷を運ぶ。これこそは創造主のお慈悲である。」

知れ。大きな海の1つに「緑の海（Baḥr al-aḥḍar）」がある。その長さや幅は神のみがご存じであり、それは、エチオピア（Ḥabaša）の境域からブリタニア（Buriṭīna）の町の境域まで船がその中を進んでいくほどである。この海には「永遠の島々（カナリア諸島）（Jazāyir-i ḥālidāt）」がある<sup>8)</sup>。どの島も荒地地で[人が住んでいない]。

こちらの海は「南の海（Baḥr-i janūbī）」と呼ばれる<sup>9)</sup>。そのうち人の住んでいるところはスインドとヒンドである。それは600の町からなる。また北側には4200の町がある。この海の長さは、船がその中を1000ミール<sup>10)</sup>も進めるほどであり、幅は2000ミールである。[この海の] 一方にはファールスの海（ペルシア湾）（Baḥr-i Fārs）がある。ファールスの海には1300の島々があり、そこからは紅いルビーがもたらされる。

### 〔世界中の海、湖、大河について〕

<アリフ（al-alif）の項<sup>11)</sup>>

「ダイヤモンドの海（Baḥr-i almās）」は非常に大きな海である。一方は周海に接し、そこにある島ではダイヤモンドが採れる。その[島]へは狭くて危険な1本の道しかない。そこに向かう者は誰しも、反対側を除き[船を]降りることができず、高いところから水中に身を投げるしかない。

8) 「永遠の島々」は周海の最西端に位置する諸島とされ、現在はカナリア諸島に対する名称であるが、かつてはカナリア諸島と同様にマデイラ諸島、アゾレス諸島やヴェルデ岬諸島を指すこともあった[*EI*<sup>2</sup>: al-Djazā'ir al-ḫālidā]. マスウーディーは、オケアノスの別名を「緑の海」としてブリタニアや永遠の島々に触れており、一方「緑の海」と永遠の島々についてはイブン・ホルダードベが述べている[al-Mas'ūdī, *Kitāb al-tanbīh*, p. 68; Ibn Ḥurdāqbih, *Kitāb al-masālik*, pp. 230–231].

9) テキストでは文章は前の「緑の海」に続いているが、内容から別の海（あるいは「緑の海」の一部分）を指すとも考える。イブン・ホルダードベによると、「緑の海」は「周海（al-Muḥīṭ）」（ギリシア語では「オケアノス」とも呼ばれる）を指し、一方「南の海」は、人の住む場所がない海だとされる。さらにこの「南の海」の後に続けて、名称が不明瞭な別の海“īryūfūyā”を挙げ、そこにイエメンやスインド、ヒンドがあると述べている[Ibn Ḥurdāqbih, *Kitāb al-masālik*, pp. 155, 230–231]. 本書の記述はこの部分が混乱した可能性がある。

10) 長さの単位。1ミールは約2キロメートル。

11) これ以降、アラビア文字の順（アリフ、バー、ター、…、ヤー）にしたがって世界の海、湖、河川が列挙される。底本としたソトゥーデ本ではときに文字の順が入れ替わっているが、原典に則して訳出する。なお、サーデギー本ではすべて正しく置き換えられている。

もし死ななければ岸にたどり着く。また、来た道を通って帰ろうとしても、水(波)がその者を通そうとせず、再度、島のほうへ運んでいく。水が島にうち寄せ、誰にも帰らせようとはしない。

<バー(al-bā')の項>

「嘆きの海(Baḥr al-bākī)」は美味な水の海である。ダイヤモンドの海のうしろにある。創造主はその海に2つに分かれるよう啓示を与えた。[しかし海は]集まり[1つになった]ので、至高なるアッラーは海を咎めた。[海は]泣いた。復活の日まで泣き続けている。常に呻き、荒れている。その向こうには「暗黒の海(Baḥr al-muẓlim)」<sup>12)</sup>がある。そこはいつも真っ暗で、厚い雲が立ち込める。

「バランジャルとBKRWYLの海(Baḥr-i Balanjar wa BKRWYL)」は大きな海である<sup>13)</sup>。

ハザルの海(カスピ海)(Baḥr al-Ḥazar)の向こう側には(p.91)敵がいた。公正なるヌーシラヴァーンはその方面に防壁を築いた。その防壁とハザルの王の町バイダー(Baydā)の間は4ヶ月行程[の距離]であり、バイダーからイスファンディヤール(Isfandiyār)<sup>14)</sup>の防壁までは2ヶ月行程である。ヌーシラヴァーンは彼とテュルクの国の間に防壁があるよう望んだ。皮袋に空気を詰め、互いに結び合わせ、その上に防壁を建てた。やがて[防壁は]大地に落ち着いた。さらに鉄の扉を取りつけ、衛兵を配した。この壁が完成すると、[ヌーシラヴァーンは]黄金の玉座を壁の上に据え、そこに座した。そして神——至大なれ、崇高なれ——に跪拝し、言った。「おお、主の中の主よ。あなたは私の求めるもの。この辺境の防壁にかけて。私が故国に帰れますように。」

それから玉座の上で横になり、言った。「私は安心したぞ。」

そして眠りに落ちた。彼は次のような[夢を]見た。海から星が昇り、全世界を覆った。そして白雲が現れ、防壁に落ちた。アミールたちはそれを見て、恐れた。

ヌーシラヴァーンは夢から覚めて、言った。「恐れるな。私は12年間も民の安らぎのためにこの壁に心血を注いだのだ。創造主は[それを]台無しにはしまない。」

そして言った。「私は次のような夢を見た。この星が現れ、私に言った。『おお王よ、落ち着きなさい。私は7度、私のこの地域の人々によって、この防壁が栄え、そしてまた荒廃するのを見た。創造主は私に次のように知らせた。この時代の帝王——そなたのことである——が防壁を築き、それは復活の日まで残るであろう、と。そなたこそ、その建設者たる王である』と。そして[星は]水に沈んでいったのだ。」

「バフテガーン(Baḥtigān)」<sup>15)</sup>は一方がファールスの海に接している。その長さは20ファルサン

12) 北大西洋のことを指すと考えられている。「暗黒」というのは、悪天候と海上の危険な性質をあらわす。“Baḥr al-zulma”や“Baḥr al-zulmāt”とも呼ばれる [EI<sup>2</sup>: al-Baḥr al-Muḥīl]。

13) バランジャルはこの項目で言及されるバイダーとともにハザルの都市である。イブン・ファキーフ(10世紀)の地理書では、「アルメニア」の章の中で、「バランジャルの辺境防壁」として、以下の防壁の話とまったく同様の逸話が載せられているが、それによると、この防壁は海の中に建設されたようである。また、イブン・ファドラーンは、「サカーリバの国」で「バランジャール」と呼ばれるイスラームに改宗した一族と交流している [Ibn Faḳīḥ al-Hamadānī, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, Ed. M. J. De Goeje, E.J. Brill, Leiden, 1885, (repr. Beirut, [n.d.]), p. 289; *Hudūd al-'ālam*, Ed. M. Sütüda, Intiṣārāt-i Dāniṣgāh-i Tihirān, Tehran, 1962, p. 193 (*Hudūd al-'ālam (the regions of the world); a Persian geography 372 A.H.-982 A.D.*, Trans. and Explained V. Minorsky, E.J.W. Gibb Memorial, repr. 1982, pp. 162, 452-453); EI<sup>2</sup>: Balandjār; イブン・ファドラーン著、家島彦一訳註『イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記』アジア・アフリカ言語文化研究所、1969年、50頁]。バランジャルに続くBKRWYLについては、イブン・ファキーフが「この海はBKRDBYLと名づけられる」と伝えるが、同テキストでも母音点や発音等は不明 [Ibn Faḳīḥ, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p. 289]。

14) イランの伝説時代のカヤーン朝第5代王グシュターズプの息子。

15) ファールス地方最大の塩湖。シーラーズの東、約100キロメートルに位置する。クル川が流れ込む湖で、現在は

グで、水は塩辛い。そこから岸辺に打ち上げられるものは、塩になる。その周囲には獐猛な野獣がいる。

「[バターイフ] 湿地 (Baṭīḥa)<sup>16)</sup>。湿地というのは数多くある。バスラでは [バターイフ] 湿地を除き、水は塩辛い。[バターイフ] 湿地について、ムアッダル・ブン・ガイラーン (Mu‘addal b. Ḡaylān)<sup>17)</sup> は [次のように] 語っている。

バスラの人々にとって、下水 (bālū‘a-hā) はこの湿地に注ぎ込んでいた。

ある日 [ムアッダルは] バスラの人々に言った。「40 日間川に小便し、[それを] 飲むような者に、あなたがたは何と言うか？」

人々は言った。(p.92) 「そいつの知性は足りない。」

彼は言った。「あなたたちこそ、80 年間水に小便し続け、[それを] 飲み続けているのだ。あなたたちにどのような知性があるというのか。」

<ター (al-tā’)<sup>18)</sup> の項>

「トゥーリヤ (Tūliya)<sup>19)</sup> は [天の] 北極の下にある海である。そこには「トゥーリヤ」と呼ばれる島があり、赤道から 63 度離れている。いかなる船もそこを通ることはできないほど険しい海であり、その向こう側 [へ行くの] は難しい。この海の長さは 1000 ミールである。穏やかな海だが、船がそこを進むと荒れ狂い、上へ下へとかき乱れる。

<ジーム (al-jīm) の項>

「ジャイフーン (アム川) (Jayhūn)」は川であり、水は不味い。パルフとジャイフーン川の間は 12 ファルサングの距離がある。東のほうから流れる。「リーヴシャーラン (Rīwšārān)<sup>20)</sup> と呼ばれる場所に発するが、それはスィンドとヒンドの地域に連なる山である。このジャイフーンはブハーラーに達し、そこを越えてティルミズ (Tirmid) の城壁にぶつかる。そこをも過ぎ、中国にまで達する。その水源はチベットの山々にあり、東風とともに流れる。その地では「ヴァッハーン (Waḥḥān)<sup>21)</sup> と呼ばれる。パルフに至るとジャイフーンと呼ばれる。そしてホラズムを過ぎ、シヤーフ・クーフ (Siyāh-kūh)<sup>22)</sup> に至り、タバリストーンの入り江に連なる。

砂漠に囲まれているが、かつては肥沃な村や町が接していた [E<sup>2</sup>: Bakhtigān; Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, pp.277-279]。『世界の諸境域』に本文と同様の記述がある [Hudūd al-‘ālam, p.15]。

16) アラビア語の「湿地 (baṭīḥa)」の複数形である「バターイフ (baṭā’ih)」は、主として、北ではクーファとワースイト、南ではバスラに接するティグリス、ユーフラテス川下流域の大湿地帯を指す [E<sup>2</sup>: Baṭīḥa]。一方、バスラには 2 つの湿地があったという説もある [Hudūd al-‘ālam, pp.47-48]。

17) アッバース朝期にバスラで活動した詩人、‘Abd al-Ṣamad b. al-Mu‘addal b. Ḡaylān (854/5 年没) のことか [Muḥammad b. Ṣakir al-Kutbī, *Fawāt al-wafayāt wa ḡayl ‘alay-hā*, Ed. I. ‘Abbās, Dār Ṣādir, Bayrūt, 1973, vol. 2, pp.330-331]。

18) 校訂本では tā’ だが、つづく項目に合わせる。次注参照。

19) 校訂本では Tūliya だが、ヤークートの『諸都市辞典』にある表記に従う [Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 2, p.59]。マスウデーは、北の果て、赤道から 63 度のところに、Tawfī という島があると伝えるが、別の箇所では Tūliya と表記されている [al-Mas‘ūdī, *Kitāb al-tanbīh*, pp.25, 67]。また、イブン・ホルダードベやイブン・ファキーフによると、トゥーリヤはルームとホラズムの間、サカーリバの向こうにある島 (あるいは町) であり、船の行き来はないとされる [Ibn Hurdāqbih, *Kitāb al-masālik*, p.93; Ibn Faḡīḥ, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p.8]。

20) アフガニスタンのヘラート東部のガルチスターン地方の都市 [E<sup>2</sup>: Ḡhardjstān]。

21) 校訂本では RḤAB だが、ma 及び lā 写本に従い、Waḥḥān と読む。『世界の諸境域』では「ジャイフーンは Waḥḥān 地方から発する」と伝えられる [Hudūd al-‘ālam, pp.27-28] が、文脈からすると、本書の著者トゥースイーは、ヴァッハーンをジャイフーンの別名と考えているのだろう。

22) 「黒い山」の意で、カスピ海南岸のアルボルズ山脈の一角か、もしくは、カスピ海にある大きな島がこの名で呼ばれている [Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 3, p.292]。またイスタフリーは、この島はカスピ海の北側にあると

「ジャイハーン (Jayhān)」は大きな川であり、「マッシーサの川 (Nahr al-Maṣṣīṣa)」とも呼ばれる<sup>23)</sup>。その水源はルームの境域にある。

「ジャハルフルの海 (Baḥr-i JHRHWR)」<sup>24)</sup>は大きな海である。西から流れてクルズムに至り、そこを過ぎて東にまで達する。この海よりも大きな海はない。その水は塩辛く、一方の境域にはアデン (‘Adan) がある。

「チーチャストの海 (Baḥr-i Čīčast)」は、テュルクの地にある大きな海である<sup>25)</sup>。

アフラーシヤーブ (Afrāsiyāb)<sup>26)</sup>がカイ・ホスロウから逃れたとき、ある山に入った。その場所で、彼はテュルク語で独り言った。「ああ、惨めなことよ。玉座から洞窟に落ちふれるとは。」

フーム (Hūm)<sup>27)</sup>という名の人物が彼を見つけ、捕らえた。[アフラーシヤーブは] フームの手から逃れ、この海の中に飛び込んだ。フームは投げ縄を手に岸辺に座った。

ある人が尋ねた。「この海で (p.93) ワニでも獲ろうとしているのかい?」

[フームは] 答えた。「アフラーシヤーブがこの中に入っていったのだ。」

カイ・ホスロウに伝えられると、彼は岸辺にやってきた。アフラーシヤーブの弟を捕らえていたので、岸で [その弟を] 鞭打った。彼は泣き喚いた。アフラーシヤーブは弟の呻き声を聞き、水中から出てきて捕らえられた。

この海には「水の人 (mardum-i ābī)」<sup>28)</sup>がいる。

「チギルの海 (Čigil)」は西から来て、クルズムに注ぐ海である<sup>29)</sup>。そこには魚がいるが、それ

---

いう [Ibrāhīm b. Muḥammad al-Fārsī al-Iṣṭahṛī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, Ed. M. J. De Goeje, E.J. Brill, Leiden 1967, p. 218]。テキストで触れられているのは、前者の山脈であると考えられるが、本書の挿絵地図 (テキスト 93 頁) では、カスピ海の東南にこの名称の山があり、またカスピ海の南方にも同名の島があるため、著者自身もあえて区別していないのだろう。

- 23) アナトリア半島東部に発し、キリキア地方を横切って地中海に流れ込む川。古代にはビュラヌス川とも呼ばれた [EP: *Djayhān*]。マッシーサは流域にある都市の名。
- 24) この地名は地理書や地図からは確認できないが、紅海の北端にあるクルズムおよびアラビア半島南端のアデンとともに言及されることから、紅海と同義か、その一部を指すのだろう。本章で後述される「オマーンの海」の中にも現れる。
- 25) イラン北西部にあるウルミエ湖を指す [Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, pp. 160–161]。しかしこの名称は、初期の地理書には現れない。
- 26) 『王の書』をはじめとするイランの伝承に見られるトゥーラーンの王。古くはゾロアスター教の聖典『アヴェスター』などでもカイ・ホスロウの敵役であったが、やがてカヤーン朝だけでなく、それ以前のピーシュダード朝の敵役としても語られるようになった。『王の書』では、カイ・ホスロウは父スィヤーブの仇を討つため、ロスタムらとともにアフラーシヤーブと戦う。最終的にアフラーシヤーブはアゼルバイジャンに逃亡したが、カイ・ホスロウに見つかり殺害された。のちに、トゥーラーンとテュルクが同一視され、テュルク系王朝は彼を祖先とみなすこともあった。たとえば、カラ・ハン朝は「アフラーシヤーブ家 (Āl-i Afrāsiyāb)」と呼ばれ、セルジューク朝はアフラーシヤーブの子孫だと主張した [EP: *Afrāsiyāb*]。
- 27) 巻末の訂正表に従う。フームは、フェルドウスィーの『王の書』において、アフラーシヤーブを捕らえ、カイ・ホスロウに引き渡した人物として描かれる。細部は省かれているが、この話はそれを踏まえていると考えられる。
- 28) 「水の人」は、後出の「ゼレの湖」の中で、若干詳しい説明がある。また、カズヴィーニーの『被造物の驚異と万物の珍奇』では、アラビア語で「水の人 (insān al-mā’)」として言及される。カズヴィーニーによると、人間と同じだが、尻尾があり、普段は水中に暮らし、ときに陸に上がる [Zakariyā b. Muḥammad al-Qazwīnī, *‘Ajā’ib al-maḥlūqāt wa ḡarā’ib al-mawjūdāt*, Arabic text, Dār al-Ma’ārif li-l-Ṭibā’a, Susa, [n.d.], p. 98, Persian text, Ed. N. Subbuḥī, *Kitābḥāna wa Čāpḥāna-yi Markazī-yi Nāšir Ḥusraw*, Tehran, 1340s, p. 138]。なお、British Library 所蔵のカズヴィーニー著『被造物の驚異』(Add. 16739)には、カラーの挿絵があり、そこでは「水の人」は、毛が生え、尻尾のある猿のような姿をした動物として描かれている。本書において類出する。
- 29) チギルは、現在のキルギスタン共和国領にあるイシククル湖の北西に広がる地域を指す [Hudūd al-‘ālam, pp. 83–84 (Minorsky comment, pp. 98–99, 297–299)]。ここでは紅海のクルズムが現れ、地理的には錯誤が見られる。

はラクダをも〔飲み込む〕。テュルクたちはこの魚に苦しめられる。投げ入れた網は、すべて食いちぎられる。

#### <ハー (al-ḥāʾ) の項>

「ハザルの海（カスピ海）(Baḥr al-Ḥazar)」は丸い海である。どの海ともつながっていない。その周囲をまわると、出発したのとまったく同じ場所に戻る。この海に注ぐ美味な水の川が1つある以外は、〔途中〕何の障害もない。その海の水は塩辛く、満ち潮も (p.94) 引き潮もない。水は真っ黒で、底には黒い泥がある。2つの黒い島がある。そこには泉がいくつかあり、野獣や家畜がいる。もう1つの島は反対側にある。人々はそこに入り、アカネを採り、各地に持っていく。

「西風のハザルの海 (Baḥr al-Ḥazar al-dabūrī)」は、ある者によると、諸門の門（ダルバンド）(Bāb al-abwāb) のある一帯である。一方、「ハザルの湾 (Ḥalīj al-Ḥazar)」は「ダッヴァーラ (Dawwāra)」とも呼ばれ、タバリスターンとジョルジャンの海のほうにある<sup>30)</sup>。そこには2つの島がある。1つは水に沈んだ。もう1つは「バークー (バクー) の島 (Jazīra-yi Bākū)」と呼ばれ、そこから白と黒の石油がもたらされる。

「ホラズムの海(アラル海)(Baḥr-i Ḥwārazm)」は小さな海である。その周囲は120ファルサングで、水は塩辛い。シャーシュの川(シル川)(Nahr al-Šās)がそこに注ぎ込んでいるが、〔水の量は〕増えない。まことにアッラーは最もよく知りたまう。この海とハザルの海の間には〔大地の〕割け目があり、水が流れ込み、ハザルの海へ注ぐ。2つの海の間は20日行程である<sup>31)</sup>。

「ヒラートの海 (Baḥr-i Ḥilāt)」はアルメニア (Armaniya) にある海である<sup>32)</sup>。そこでは10ヶ月の間は魚もカニもないが、つづく2ヶ月の間は現れる。その理由は、創造主のみがご存じである。

#### <ダール (al-dāl) の項>

「ティグリス (Dijla)」は、ザンジュの国 (Bilād al-Zanj) との境界をなす川である。ザンジュの国の魚たちはティグリスにやってくる。それを「ツバメ魚 (māhī-yi parastūj)」<sup>33)</sup> と呼ぶ。困難な道と恐ろしい荒波を乗り越え、ティグリスを目指す。〔その間〕ザンジュの海 (Baḥr al-Zanj) は魚がないままであり、ティグリスはその魚でいっぱいである。その後、再びザンジバルの海 (Daryā-yi Zangbār) へ戻る。アルメニアにあるアラスの川 (アラス川) (Nahr-i Aras) のように、そこ (ティグリス) にはたくさんの種類の魚がいる。月ごとに〔異なる〕種類の魚が海からやってくると言われている。暖かい地方へ向かう渡り鳥のように、毎月、前の月には見なかった魚を見ることができ。ティグリスの水は山々から来ている。一部はアルメニアに発し、バグダードを通り、ワースイト (Wāsīt)<sup>34)</sup> とバターイフに至り、ヒンドの海にまで流れる。

30) イブン・ファキーフは「ハザルの湾(入り江)」と「ダッヴァーラ」を、ハザルにある海の一部として紹介している [Ibn Faqīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 7-8]。本文のこの部分は、カスピ海の西岸と南岸の話がやや錯綜している。

31) ホラズムの海については、イスタフリーに同様の記述が見られる [al-Iṣṭahārī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 304]。

32) ヒラートは現在のトルコ共和国のヴァン湖のほとりにある都市 [Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, pp. 183, 230-231]。現在はアフラト (Ahlāt) と呼ばれる。魚やカニの出現に関する同様の記述がイブン・ファキーフに見られる [Ibn Faqīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p. 295]。

33) プリニウス (79年没) の『博物誌』にこの魚の説明があり、「ツバメ魚は鳥とまったく同じように飛ぶ」とある [プリニウス著、中野定雄・中野里美・中野美代訳『プリニウスの博物誌』雄山閣、1986年、I巻410頁]。

34) イラク南部のクーファとバスラの間にある町。

(p.95) <ラー (al-rā') の項>

「ルームの海 (地中海) (Baḥr al-Rūm)」は、「緑の海」からマシュリク (東) までの入り江である。サイダー (Ṣayda)<sup>35)</sup> とスール (Sūr)<sup>36)</sup> にまで達し、1000 ミール [の長さが] ある。その海には 162 の島があり、すべてに人が住んでいる<sup>37)</sup>。ブルース (Burūs)<sup>38)</sup>、サルディニア (Sardāniya)、イクリーティヤ (Iqrīṭiya)<sup>39)</sup> といった島がある。これがその図である。

アブドゥッラー・ブン・アムル・ブン・アル＝アース (Abd Allāh b. 'Amr b. al-'Ās)<sup>40)</sup> は次のように言っている。「この [海] には、カメや巨大なカニやカエルがいる。ルームの町 (ローマ) の沖合いで [見つかる]。この [海の] 一方には、石で造られた偶像があり、その手には鉄鉤があり、あたかも水中から何かを持ち上げようとしているかのようである。有害な動物のうち、ルームの町に入ろうとするものは何であれ、この場所で引き返す。」

<ザー (al-zā') の項>

「ゼレの湖 (Buḥayra-yi Zara)」は大きな湖である<sup>41)</sup>。水は危険で、大きな波が立っている。そこには、「獅子の口 (Fam al-asad)」<sup>42)</sup> と呼ばれる場所がある。険しい場所で、水は湖へと落ちていく。(p.96) その轟きは天の彼方まで届く。15 ファルサング先からでも、その音が聞こえる。

次のように言われている。カイ・ホスロウはそこに至り、「水の牛 (gāw-i ābī)」<sup>43)</sup> と「水の人」を見た。[水の人] は髪が長く、体中が毛むくじゃらで、水牛のような頭をし、手は後ろから、そして足は前から [生えている]。魚やワニのような種族である。[カイ・ホスロウ] は陸に着くまで、6ヶ月間、船を走らせた。そして、アルボルズの山 (Kūh-i Alburz) の上にギヤング (Gang) [城砦] を建てた<sup>44)</sup>。

「ザンジュの海 (Baḥr al-Zanj)」は大きな海で、オマーンにまで達する<sup>45)</sup>。7 ファルサングあり、真つ暗で黒い海である。そこには何も無い。その水を飲む者には誰であれ、疥癬 (jarab) が生じる。ザンジュの民はいつも疥癬を患っており、疥癬のない者はいない。母親から生まれたばかりの子どもでさえも、疥癬がある。

35) レバノン南西部の地中海沿いの町。

36) 巻末の訂正表に従う。同じく、レバノン南西部の地中海沿いの町。サイダーの南方に位置する。

37) ルームの海に 162 の島があるという記述がイブン・ホルダードベに見えるが、当該箇所テキストには混乱が見られ、本文の記述との関連は明らかではない [Ibn Ḥurdādbih, *Kitāb al-masālik*, p.231]。

38) キプロスのことか [EP: *Ḳubrus*]。

39) クレタ島のこと [EP: *Ikṛīṭish*]。

40) イスラーム初期の将軍でエジプト総督であったアムル・ブン・アル＝アース (663年頃没) の息子。アムルはシリアやエジプトの占領に功績があった [EP: 'Amr b. al-'Ās]。本書の主な典拠の1つと考えられるイブン・ファキーフが、彼の言葉をしばしば引用している [Ibn Faqīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, pp.3, 15, 72 etc.]。

41) イラン南東部のスイースターンにある湖。淡水湖で、魚と葦が多い。

42) 「獅子の口」はおそらく滝壺などのことであろう。本章で頻出する。

43) どのような動物を指すのか不明。カズヴィーニーの『被造物の驚異』では、「水の牛 (baqara al-mā)」として、「草を食むために陸に上がる動物。その糞は竜涎香である」と記される [Qazwīnī, 'Ajā'ib al-maḥlūqāt, Arabic text, p.98, Persian text, p.138]。ペルシア語の辞書ではマッコウクジラ (kāšālū) とされる。

44) トゥルクスターンにあったとされる、年中春めいた気候の天国のような場所や、カイ・ホスロウが同地に建てた偶像寺院 (but-ḥāna) などがギヤングと呼ばれる [Luḡat-nāma-yi Dihūdā: Gang]。本章第4部の砦の項では、「アフラーシヤープのギヤング」と呼ばれる宮殿式の建築物が現れる。

45) インド洋のなかでも、東アフリカ沿岸とザンジバル地方の海を指す。ザンジュの海の形容と同じ表現がイスタフリーの書に見え、またザンジュの地の疥癬についてはイブン・ホルダードベが触れている [al-Iṣṭahrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p.31; Ibn Ḥurdādbih, *Kitāb al-masālik*, p.170]。



<スイーン (al-sīn) の項>

「スイーラーフとオマーンの間 (Bahṛ-i Sīrāf wa ‘Umān)」は1つであり<sup>46)</sup>、そこでは恐ろしい波が立つ。商人たちは海の時化が収まるまで、商品をスイーラーフに置いておく。この海には「ドゥルドゥール (Durdūr)」と呼ばれる渦巻きがある<sup>47)</sup>。[それは] 2つの山の間にある海峡で、水はその場所へ押し寄せる。小さな船は、矢のようにそこに放り込まれ、そしてヒンドの海へ投げ出される。もし [船が] 壊れなければ、無事にたどり着く。さらに7昼夜行くと、水は穏やかになる。そして、ハーンフー (Hānfwā)<sup>48)</sup> の町の城壁が見え、そこで船を泊める。ハーンフーの人々は出迎え、彼らがあのような死の淵から救われたことを神に感謝する。

「サイハーン (Sayhān)」は大きな川である<sup>49)</sup>。そこには橋が架けられており、7つのアーチがある。その地方には鉄製の銘板があり、何か書かれている。水かさが増えて橋の上にまで来ると、その銘板を鎖でつなぎ、川の中に入れる。[すると] 水は鎮まる。こちらの「サイフーン (Sayhūn)」はルームから来ている<sup>50)</sup>。これは、実に驚くべき銘板である。その銘板に何が書かれているのかは誰も知らない。

(p.97) <シーズ (al-sīn) の項>

「シーズの海 (Bahṛ-i Šīz)」は小さな湖である<sup>51)</sup>。その周囲には城壁が築かれている。だが、その底や深さは誰も見たことがない。この湖の一隅には黒い水があり、白い水と混じり合っている。この湖の水を泥と混ぜ合わせ、太陽にさらすと石になる。かつて1万4000アラシュの縄がこの湖の中に垂らされたが、底まで達しなかった。再度 [縄の長さを] 増やし、おもりと一緒に垂らしたが、どこにも達しなかった。

シーズの子供たちはこの湖で泳ぐ。湖の底は、まるで太陽が水底にあるかのように輝いている。私はある人から次のように聞いた。ある王がこの湖の岸辺に立ち、いくつかの金のかげらを水中に投げた。子どもたちが潜り、水の中でそれを見つけては、拾って引き上げ、王に見せたという。

底が明るい理由は、次のとおりである。カイ・ホスロウの玉座と「世界を映す杯」がシーズの町に置かれていた。1人の敵がそれを奪おうと画策した。[シーズの人々は] 言った。「何年もの間、玉座と杯はこの地にある。カイ・ホスロウ王ゆかりの品だ。誰もそれを狙ったり手を出したりはし

46) スイーラーフは、ペルシア湾の北岸にある港町。10世紀にペルシア湾の主要な商業中心地として繁栄した。イスタフリーは、「規模と壮麗さにおいて、シーラーズに匹敵する」と評した [al-Iṣṭahrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 127]。オマーンはペルシア湾の南岸に位置する。ここでは、両者は1つの同じ海だと述べられているが、「オマーンの間」についての説明が後述する。

47) この岩礁地帯については、『中国とインドの諸情報』にほぼ同様の記述が見える [家島彦一訳注『中国とインドの諸情報』平凡社東洋文庫、2007年、第1巻34、123-124頁]。

48) 中国の広府 (広東) のこと。

49) キリキア地方を流れるサルス川のこと。水源は小アルメニアの高地。アダナ (Adana) の町にかけられた巨大な橋によって有名である。アダナの橋は、ユスティニアヌス帝の時代に建立された。743年、ウマイヤ朝カリフ、ワリード2世 (在位743-744年) によって再建され、それ以降、「ワリードの橋 (Jisr al-Walīd)」と呼ばれるようになった。840年には、アッバース朝カリフ、ムッタシム (在位833-842年) によって再建された [Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, pp. 131-132]。

50) アラブ人は、中央アジアのアム川とシル川を「ジャイフーンとサイフーン」と呼んだのにちなみ、キリキア地方を流れるビュラス川とサルス川を「ジャイハーンとサイハーン」と呼んだ [EP: *Djayhān*]。この一文は、この経緯を踏まえたものであろう。

51) イラン西北部のタフテ・スレイマーン遺跡のある湖を指す。シーズについては、第2部の拜火殿の話も参照のこと [本訳注 (3) 『イスラーム世界研究』第3巻2号、2010年、380頁、注4]。

なかったぞ。」

だがその敵は聞き入れなかった。シーズの民は失望し、玉座を杯と一緒にその湖に投げ入れた。この湖の底が明るいのは、その杯のためである。いかなる王もその黄金の玉座と杯を引き上げることはできなかった。

<アイン (al-'ayn) の項>

「オマーンの水 (Baḥr al-'Umān)」は大きな海であり、サランディープの境域にまで広がっている。そこには良質の真珠がたくさんあり、真珠貝もたくさんある。この海は、1年のうち40日間は穏やかで波立たないが、太陽が双子宮に来ると、時化となり、真珠貝は隠れてしまう。潜水夫たちは「真珠が採れる」時を待ち、真珠を採る。[その後は]翌年まで採ることはできない。[真珠が]採れると、その5分の1を王に差し出す。

オマーンの水は塩辛いが、なかには美味な[水の]泉がある。水運び人はそれらの泉から水を汲み、[人々はそれを]飲む。[オマーンの水は]アデンやジャハルフル<sup>52)</sup>[の海]と境をなし、シフル(Šiḥr)<sup>53)</sup>を過ぎ、バルバル(Barbar)<sup>54)</sup>の地まで行き、その後、オマーンに達する。そしてムルターン(Mūltān)<sup>55)</sup>を通り、さらに南域のシャラーヒト(Šalāḥit)<sup>56)</sup>と(p.98)カーマルーン(Qāmarūn)<sup>57)</sup>に至る。4000ファルサング[の幅]と500ファルサングの長さがあり、あまりにも広大なために「海の耳(uḡn al-baḥr)」と「海の足(rijl al-baḥr)」という名の2つの入り江(湾)がある。潜水夫は、糸杉からつくった二又状のものを持ち、鼻に栓をする。そして酔がいっぱいに入った皮袋を背負い、潜って真珠貝を採る。もしワニが襲いかかってこようとしたら、ワニにめがけて酔袋の口をあげ、ワニやサメが逃げていくようにする。

「アデンの水(Baḥr al-'Adan)」は、オマーン[の海]と接している。アデン[の海]には、ジャンナーバ(Jannāba)<sup>58)</sup>とパスラの間に行くつかの淵(hawr)がある。そこでは誰も助からない。入り組んだ難所となっており、海中にあるその山々を「山峽(šī'b)」と呼んでいる。船を難破させる<sup>59)</sup>。この海には、夜と昼の2回、潮の干満がある。クルズムの境域から中国の境域にまで[至る]。ファールスの海を除き、いかなる海にも干満はない。

52) この地名については、詳細不明。「ジームの項」に既出(注24参照)。ただしここでは別写本に、Šūrという表記が見られる。「スール」という地名は、先のシリアの町ではなく、アラビア半島のインド洋に面する港町として確認される。あるいは、「中国とインドの諸情報」において、アデンとともに言及されるオマーンの港町スハール(Subār)のことか。

53) インド洋に面したアラビア半島南岸の町で、乳香の産地として有名。

54) ここは北アフリカのベルベル人ではなく、アデン対岸の地で、アフリカ大陸のソマリアにある町バルバラを指す。ただし、「バルバルの地(zamīn-i Barbar)」という表現から、著者自身は「ベルベル人の地」と考えていたのかも知れない。

55) インダス川の支流であるチェナーブ川沿いの町。ムルターンはインド洋に面していないので、ここに現れるのはやや唐突な感があるが、スインド地方(インダス流域)の代表的な都市として挙げられているものか。

56) アラビア語史料では、マラッカ海峡からアンダマン海の一部を含み、「カラフの海」などと呼ばれている[『中国とインドの諸情報』(家島訳註)、第1巻98-99頁]。『世界の諸境域』ではスマトラ島のこととされる[*Hudūd al-'ālam*, p.19 (Minorsky comment, p.57, 187)]。

57) テキストではGMRWNだが、『中国とインドの諸情報』で「最高品質の沈香がある地方」とされているインドのカーマルーンと判断する[『中国とインドの諸情報』(家島訳註)、第2巻78頁]。

58) ハールク島の対岸にあるペルシア湾北岸の港町。現在の地名はバンダレ・ゴナーヴェ(Bandar-i Gunāva)。

59) この淵については、イスタフリーにも記述がある[al-Iṣṭahri, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p.32]。

＜ファー（al-fā'）の項＞<sup>60)</sup>

「ファールスの海（ペルシア湾）（Baḥr al-Fārs）」と「ヒンドの海（インド洋）（Baḥr al-Hind）」は1つであり、向かい合っている。ファールスの海は波が多く、幾重にもなる。ファールスの海が荒れると、ヒンドの海は穏やかになり、ファールスの海が穏やかになると、ヒンドの海は荒れる。太陽が処女宮に来ると、ファールスの海の波は激しくなり、[その状態は]太陽が双魚宮に入るまで続く。最も激しいのは、太陽が人馬宮にあるときであり、春が近づくにつれ海面は穏やかになる。太陽が双子宮にあるときは、最も穏やかである<sup>61)</sup>。ファールスの海は、「片目のティグリス（Dijla-yi 'awrā）」<sup>62)</sup>の河口に始まり、ティーズとマクラーンまでである<sup>63)</sup>。

## ＜ガイン（al-ḡayn）の項＞

「雲の海（Baḥr al-ḡamām）」は、トゥルクスターンのカーシュガルの向こう側にある。その中に石を投げ入れると、大きな雲が立ちのぼり、雷鳴が轟き、人々を死に至らしめる。人々はその1ファールサング先を通り、そこに近づこうとはしない。

「ユーフラテス（Furāt）」はルームに発し、キンナスリーン（Qinnasrīn）<sup>64)</sup>、サファワーン（Safawān）<sup>65)</sup>、オマーン、アデン、DH MLK<sup>66)</sup>に至る。また、(p.99) イエメン、フィラスティーン（パレスチナ）、バイルートを通る。これらすべての中にあるのが、「アラブの島（アラビア半島）（Jazīra al-'Arab）」である。

スッディー（Suddī）<sup>67)</sup>は次のように言っている。「ユーフラテスは、信徒の長アリー・ブン・アビー・ターリブがカリフであった時代に増水した。流れてきたザクロが1つ見つかった。[ザクロは]橋をも壊した。そこで人々は、このザクロは天国から来たものだ、と言いつつあった。」

また、ハビーブ・ブン・アビー・サービト（Ḥabīb b. Abī Ṭābit）<sup>68)</sup>は言う。「ユーフラテスとナイルは信者（mu'min）であるが、ティグリスとバラフート（Barahūt）<sup>69)</sup>は不信心者（kāfir）、すなわち不吉である。」<sup>70)</sup>

60) 校訂者も述べているとおり、著者は「ガインの項」の前に「ファーの項」を記しており錯入が見られるが、原文に従う。

61) 同様の話がイブン・ファキーフの地理書に見られる [Ibn Faqīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p. 8]。

62) バスラを流れるティグリス川の支流 [Ibn Faqīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p. 189; Ibn Ḥurdādhbih, *Kitāb al-masālik*, p. 240]。

63) 同じ記述がイブン・ルスタの地理書にも見られる [Abū 'Alī Aḥmad b. 'Umar Ibn Rusta, *Kitāb al-a'lāq al-naḥṣa*, Ed. M. J. De Goeje, E.J. Brill, Leiden, 1967, p. 87]。

64) シリアのアレッポとフムスの間にあった町、およびその地域一帯を指す [Ḥudūd al-'ālam, p. 172 (Minorsky comment, p. 150)]。

65) 地理的には離れるが、マスウーディーやヤークートが、アラビア半島のバドル付近に“Safawān”と呼ばれる谷があると伝えることに従う [al-Mas'ūdī, *Kitāb al-tanbīh*, p. 235; Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 3, p. 225]。

66) 「王の村（deh-i malik）」、「10の国（dah mulk）」など、さまざまな読み方が可能である一方、該当する地名が見当たらないため、読み方についてはここでは保留する。もしくは、ヤークートが言及する、イエメンの海にある島“Dahlak”のこともかもしれない [Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 2, p. 492]。

67) 伝承者 Ismā'īl b. 'Abd al-Rahmān (744/5年没)の異名。イスファハーンの有力家系の出身。クーファで活動し、同地で没した。アナス・ブン・マールクなどからの伝承を伝える [Yāqūt b. 'Abd Allāh al-Ḥamawī, *Mu'jam al-udabā'*, Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, Beirut, 1991, vol. 2, pp. 295-297]。

68) イブン・アッバースなどからの伝承を伝える Ḥabīb b. Abī Ṭābit Qays b. Dīnār al-Asadī (735-737年頃没)のこともか [Ṣalāh al-Dīn Ḥalīl b. Ayyak al-Ṣafādī, *Kitāb al-wāfi bi-al-wafayāt*, Deutsche Morgenländische Gesellschaft, Leipzig, 1931-, vol. 6k, pp. 290-291; LN: Ḥabīb]。

69) ハドラマウトにある洞穴。入り口に預言者フードの墓があることで有名になった。また、初期イスラーム時代には、不信心者たちの魂が集まる場所とされていた [EI<sup>2</sup>: Barhūt]。

70) イブン・ファキーフはアラビア語の同様の語句を引用しているが、伝承者は挙げていない [Ibn Faqīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p. 174]。

「門番の口 (Fam al-bawwāb)」は、イーザジュ (Īḍaj) とアフワーズの境域にある大きな川である<sup>71)</sup>。河川の集まった場所であり、人や家畜がそこに落ちると、白のように回って死ぬ。その後、岸边に流れ着く。

「獅子の口 (Fam al-asad)」は、大きく、破壊的な川である。そこにはヌーシラヴァーンの堰とイスファンディヤールの堰がある<sup>72)</sup>。

ヌーシラヴァーンは (p. 100) [その川を] 見たいと思った。[人々は] 言った。「無理でしょう。ライオンの口は渦になっており、誰も助かりません。」

ヌーシラヴァーンは言った。「私はこの鉄の堰を何としてでも見たいのだ。」

彼は支度を整え、渦に到着した。その大きさに立ちつくし、進むこともできなかった。彼の軍は呻き声を上げた。ヌーシラヴァーンは泣き、創造主に嘆願した。彼は、波がその上にまで押し寄せている島を見た。島には、象ほどの大きさをしたライオンの石像があった。水はライオンの尻から入り込み、口から出ていた。はるか遠くに流れ落ち、渦巻いていた。肝を冷やすほどの轟音が鳴り響いていた。彼らの望みは絶たれてしまった。

至高なるアッラーは1匹の魚を遣わした。魚はライオンの口の中に飛び込み、水をせき止めた。ようやく船は通ることができた。[ヌーシラヴァーンは] この堰を見て、驚き、そして帰っていった。

次のように言われている。「獅子の口」には、銅製の偶像があり、そこに誰かが行くと、この像が手を振り、「戻れ。これより先には行くな」[と身ぶりで示す]。この像の手が動くとは驚くべきことである。像のかたちはこのとおりである [図]。

知れ。大海は4つあるが、最も大きな海は「ファールスの海」である。その長さは中国からエチオピアまでであり、そこには渦があり、それを「バルバルの入り江 (Ḥalīj-i Barbarī)」と呼んでいる<sup>73)</sup>。次は、「ルームとシャームの海 (Daryā-yi Rūm wa Šām)」で、マグリブ (西) からマシュリク (東) まで [広がる]。次は「ポントゥス (黒海) (Punṭus)」で、「コンスタンティノーブルの入り江 (Ḥalīj-i Qusṭantīniya)」はその中にある。もう1つは「西の海 (大西洋) (Daryā-yi maḡrib)」である。

#### <カーフ (al-qāf) の項>

「聾の大洋 (Qaynas al-ašamm)」は世界のまわりを取り囲む海である<sup>74)</sup>。世界中の海は、そのそばにあっては1つの泉 [のよう] である。「暗黒の海」は「[聾の] 大洋」よりも大きい、暗い。

「クルズムの海 (紅海) (Baḥr-i Quḷzum)」は、すでに述べた「ファールスの海」のことであり、30日行程である。一方の端は狭く、対岸が見えるほどである。もう一方の端は広く、湾曲した中にある。その図を描いておいた [図]。そこには多くの山 (岩礁) があり、船を破壊する。日中は (p.

71) イーザジュは、イランのザグロス山脈中にある古くからの町。現在の呼び名は「イーゼ」。イーザジュとアフワーズを流れる大きな川と言えば、イラン最大の水量を誇るカールーン川のことか。

72) 「獅子の口」は前注42のように、滝壺を指すと考えられる。ここで述べられているのは、イラン南西部のフーゼスターン地方に位置するシュューシュタルの町に現存する滝と水車のコンプレックスを指すか。この遺構は、カールーン川の水を利用した人工的な数本の滝であり、サーサーン朝期に造られた。豊富な水が川に流れ落ちる。

73) ファールスの海にあるバルバルの入り江については、イブン・ルスタが触れている [Ibn Rusta, *Kitāb al-a' lāq al-naḥṣa*, pp. 83-85]。なお、この段落の内容は、彼の記述にきわめて近い。

74) “Qaynas” はギリシア語の「オーケアノス」に由来する。

101) 船を進めることができる。クルズム<sup>75)</sup>とターラーン (Tārān)<sup>76)</sup>の間には不吉な渦があり、そこでは誰も助からない。いつも2つの山峡から逆方向の風が吹き、船を白のように回す。南風のときには昼夜を問わず、誰もそこを通ることはできない。ファラオはこの渦の中で溺れ死んだ<sup>77)</sup>。

「コンスタンティノーブルの海 (Baḥr al-Qustanṭīn)」は西風のほうから、あるいは諸門の門 (ダルバンド) の向こう側から発し、カイラワーンに至り、そこからアンダルスを経て、「幸運の鳥々 (Jazāyir al-sa‘ādāt)」<sup>78)</sup>と、サル場所である「猿の谷 (Wādī al-qirada)」へと向かう。

[逸話]

アブドゥルマリク・ブン・マルワーン時代に、その地に1人の役人がいた。彼は、潜水夫たちに潜って宝石を海から採ってくるように命じた。1人の潜水夫が浮かび上がり、大変な苦勞をしていくつかの銅製の水差しを持ってきた。それらの口は錫でふさがれていた。[役人は]口を開けるよう命じた。すると、それぞれの口を通してディーヴ (悪鬼) が飛び出し、言った。「おお、ダーワードの子よ。どのくらいまで俺たちを閉じ込めておくのか?」

大きなわめき声が起こり、数千頭のサルが「猿の谷」から集まってきた。ラクダほどに大きな1匹 [のサル] が前に出て立ちはだかった。[そのサルには] 長いあごひげがあり、首から鉄の銘板を吊るしていた。そこにはシリア語で次のように書かれていた。「最も偉大なる無限大者たるアッラーの御名において。これはダーワードの子スライマーンの手書 (kitāb) なり。この島のこのサルの群れのもとにあり。[サルたちは]この海の中に閉じ込められしこれらシャイターンを見張る。汝ら、ジンや人間は、安全であれかし。」

その [大きな] サルは銘板をそこに置いた。それらの水差しが海に投げ込まれるまで [サルたちは] 啼き続け、[投げ込まれると] ようやく彼らは静かになった。

コンスタンティノーブルの海は大きな海で、その境域にはスフルの町 (madīnat al-Ṣufrī)<sup>79)</sup>がある。その水はアンティオキア (Antākiya)<sup>80)</sup>方面から来て西側へ流れている。その長さは2000ファルサングであり、その源は周海に発する。

[逸話]

次のように言われている。カイ・ホスロウはその場所へやって来て思った。荒れ狂った波のために世界が混乱に陥っている、と。(p. 102) 朝になると、半円形の白くて丸いものがいくつかの岸辺にあるのが見えた。すべてがきらきらと光を放っていた。1本の棒で [そのうちの] 1つを叩くと、

75) 現在のスエズ近くの港町の名。この海の名前はこの町にちなむ。

76) 現在のティーラーン (Tārān) 島。紅海の難所として知られる、シナイ半島の南端ムハンマド岬のアカバ湾の出口付近にある島。スエズ、アカバ両方向から吹く風と渦で有名な場所で、ファラオが死亡した場所としても知られていた [Hudūd al-‘ālam, Minorsky comment, p. 190]。

77) クルズムの海には岩礁が多く、航行が困難であったことは当時の船乗りにはよく知られていた。そのため、インド洋から航行してきた船は通常紅海の中央付近に位置するジッダまでしか来ず、エジプト向けの積荷はジッダでクルズムの船に積み替えられたという [『中国とインドの諸情報』(家島訳註)、第2巻84頁]。この渦の形容は、イスタフリーの記述と大筋で一致する [al-Iṣṭahārī, Kitāb al-masālik al-mamālik, pp. 30–31]。

78) 前出の「永遠の鳥々 (カナリア諸島)」がこれと同一視されることが多い。

79) モロッコ北中部の都市スフロー (Sefrou)。イスラーム時代以前にその起源を遡る古い町で、9世紀にイドリース2世によってイスラーム化した。11世紀までにはフェスとスーダン西部を結ぶキャラバン交易路上の重要都市として発展した [EI<sup>2</sup>: Ṣufrūy]。

80) セレウコス朝期に建設されたアンティオキア (アンタキヤ) のこと。現在のトルコ共和国にある。

白と黄色の水が流れ出た。潜水夫たちに尋ねると、彼らは答えた。「海の波がこの岸辺に運んできたのです。それは動物の卵でしょうが、何の卵か私たちにはわかりません。」

この海には黒い水の人がいる。カイ・ホスロウは彼らを恐れて帰っていった。

#### <カーフ (kāf) の項>

「カラフパール (Kalāhbār)<sup>81)</sup> と「ブドウの海 (Baḥr al-a'nāb)」はザーバジュ (Zābaj) の国<sup>82)</sup>にある海である。そこには大きな山がそびえている。アーダムが地上にやって来たとき、その山の上に降り立ったと言われている<sup>83)</sup>。

#### <ミーム (al-mīm) の項>

「周海 (Baḥr al-muḥīt)」はマグリブ (西) にあり、果てのない海である。タンジャ (Ṭanja) とアンダルスはその沿岸にある。[北の]ブルガール (Bulgār)<sup>84)</sup>の地に達すると、この海は「玉座 (awrang)」と呼ばれる。それから東のトゥルクスターンに至り、未知の土地へ向かう。この海の向こう側は、東は中国 (Čīn wa Mācīn) であるが [そこへ行く] 道はない。その反対側 (南側) ではオマーンの宮廷 [があり、西へ向かって] シフルにまで至る。終わりは北の果てまでである。この中には「永遠の島々」や、キーシュ (Kīš)<sup>85)</sup>、[ハサー (Aḥṣā)]<sup>86)</sup>、バフラインの島がある。エチオピアの向かい側では、「アンダルスの入り江」が突き出している。

その [海の] 水は苦いが、その中には美味な [水の] 泉がいくつかある。そこでは恐ろしい風が吹く。[船では] 長い柱の上に [取りつけた] 鉄製の籠の中に水先案内人を入れる。彼は目を凝らし、航路はどのようであり、どちらの方角から風が吹いているか、星の運行はどのようであるかを水夫に知らせる。こうして水夫は船を正しいコースに走らせるのである。

#### <ヌーン (al-nūn) の項>

「ナイル (Nīl)」は大きな川である。赤道の向こう側に発し、エチオピアの地を過ぎ、クルズム、ダミエッタ (Dimyāt)、ティンニース (Tinnīs)、「西の海」に流れ込む。ナイルは南方から流れてきて、西の方へ行き、片目の人々 ('uwwār) の国々に達する。彼らは黒人の部族である。それから [ナイルは] 二手に分かれる。「白い川 (Nahr al-abyaḍ)」と「緑の川 (Nahr al-aḥḍar)」と呼ばれ

81) 表記は KLAWBAR だが、「カラフパール」と読む。マレー半島南西岸の交易港であるカラフ/カラフパール (Kalah/Kalahbār) 周辺の海を指す。紀元前2世紀頃まで遡る歴史をもつ港である。『中国とインドの諸情報』では、「ザーバジュ王国の一部」とされ、『世界の諸境域』では、スマトラ島南西岸の港バルース (Balūs) の南にある島の名前とされている [『中国とインドの諸情報』(家島訳註)、第1巻39、133頁、第2巻44-45、145-146頁; *Hudūd al-'ālam*, p.20 (Minorsky comment, pp.57, 187)]。

82) ザーバジュ王国は、10世紀から15世紀前半までマラッカ海峡地域に栄えた交易国家である。9世紀前半までのザーバジュ王国は、ジャワ島を本拠としスマトラ島を支配下に収めていた。イブン・ホルダードなどが伝えるザーバジュはこちらである。しかし、9世紀後半にはジャワ島を放棄し、スマトラ島に中心を移した。こちらは、中国文献にあらわれる「三仏齊国」に相当する [『中国とインドの諸情報』(家島訳註)、第1巻134-136頁、注122]。

83) 本書の別の箇所では、楽園から追放されたアーダムが最初に降り立った場所はサランディープにあるロフーンの間であるとしており(テキスト158頁、ルビーの項)、情報の食い違いが見られる。

84) ブルガールは南ロシア草原に移住したテュルク系民族の名称。10世紀中頃まではハザル王に仕え、やがて独立した。同世紀初頭にはアッバース朝カリフ、ムクタディル(在位908-932年)の使者としてイブン・ファドラーンが派遣され、貴重な記録を残している。ブルガール王国の中心はヴォルガ川、カマ川とその2つの川の合流点という三角地帯にあった [E1: Bulgār]。

85) ベルシア湾の島。ホルムズ海峡の西側のイラン沿岸にある。紀元前4世紀より港として機能していた。

86) 校訂テキストでは LHSA であるが、サーデギー本に従い、Aḥṣā と読む。「アフサー」はアラビア半島東部のオアシス地帯であるハサー地方 (al-Ḥaṣā) を指す [E1: al-Ḥaṣā]。

ている。またスインドの国では「ミフラーンの川」と呼ばれている<sup>87)</sup>。誰もその源泉については（p. 103）知らない。ナイルが増水するときはずも世界中の水が減る。[ナイルは] ザンジバルの国から流れる。ナイルについてはその項で述べよう。

「ポントウスの海（黒海）(Baḥr-i Puntās)」は大きな海である<sup>88)</sup>。その長さは3300ミールである。ターニス(Tānīs)の川<sup>89)</sup>がその海に注ぎ込んでいる。入り江(湾)がせり出し、「ミスルの海(Baḥr-i Miṣr)」に流れ込む。入り江の岸に、コンスタンティノーブル[の町]が築かれている。ポントウスの海の大きさは神のみがご存じである。

<ハー(al-hā)の項>

「ヒンドの海(Baḥr al-Hind)」は大きくて真っ暗な海である。それについては「ファールスの海」の項で述べた。太陽が双魚宮に来ると、この海は暗くなり、波が次々と押し寄せる。誰もその中を進むことはできない。太陽が双子宮に来るとより暗くなる。処女宮に来ると[暗さは]和らぎ、船の航行は容易になる。太陽が人馬宮に来ると、波は穏やかになる<sup>90)</sup>。ヒンドの海の境はティーズとマクラーンの岬(jazīra)に始まり、中国(bilād-i Čīn)で終わる。

ワフブ・ブン・ムナッビフ(Waḥb b. Munabbih)<sup>91)</sup>は言った。「海を見ながらにして、至高なるアッラーを偉大だと思わない人を私は見たことがない」、すなわち[ペルシア語では]、「海を見ておきながら、創造主の偉大さが心の中で増さないのは奇妙なことである」と。

「ハルカンドの海(Baḥr-i Harkand)<sup>92)</sup>は大きな海であり、その深さは明らかではない。カアブ・アル＝アフバルは次のように述べている。

ヒズル(Hidr)<sup>93)</sup>——彼に平安あれ——がこの海にたどり着き、友人たちに言った。「海底を見たいから、私を沈めてくれ。」

彼は潜っていった。しばらく潜ると、1人の天使に出会った。

[天使は]言った。「おお人の子よ、どこへ行くのか？」

87) 「ミフラーンの川」は通常インダス川を指す[EP: Mihrān]。ここでなぜ「ミフラーン川」の名が出てくるのかは不明だが、古代ギリシアにおいて、ナイルとインドが結合していたと考えられていたことを踏まえているのかもしれない。初期のアラビア語地理書ではこのような見解は見られないが、マスウーディーは、「ミフラーンはスインドの川でミスルのナイルから発する」とするジャーヒズの説を誤りだと記す[‘Alī b. al-Husayn al-Mas’ūdī, *Murūj al-ḡahab wa ma’ādan al-jawāhir*, Ed. ‘A. Muḥannā, Mu’assasa al-A’lamī li-l-Maṭbū‘āt, Beirut, 1991, vol. 1, p. 107]ことから、本書での典拠はジャーヒズに近いものであろう。

88) この項はイブン・ルスタの記述に拠っていよう[Ibn Rusta, *Kitāb al-a’lāq al-naḥṣa*, pp. 85–86]。

89) 校訂本ではTānīsであるが、Tānīsと読む。比定は困難だが、黒海に注ぐ大きな川としては、ドナウ川やドニエスタル川がある。

90) 同様の記述がイブン・ファキーフに見えるが、そこでは最後の人馬宮は双魚宮になっている[Ibn Faqīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p. 8]。

91) Abū ‘Abd Allāh Waḥb b. al-Munabbih (728年没)。ペルシア系のイエメンの伝承者。カアブ・アル＝アフバルなどから聖書の知識を学んだとされる[EP: Waḥb b. Munabbih]。

92) ベンガル湾を指す。Harkandは「東ベンガル」を指すサンスクリット語の“Harikela”からの派生語であるという[ブズルク・イブン・シャフリヤール『インドの不思議』(藤本・福原訳注)、152頁、注46;『中国とインドの諸情報』(家島訳註)、第1巻85–86頁]。スマトラまで広がる範囲とされることもある[*Hudūd al-‘ālam*, p. 25 (Minorsky comment, pp. 87, 241)]。

93) 『クルアーン』18章59–81節にも登場する預言者の1人。命の水を発見し、それを飲むことで不死となったとされ、アラブやペルシアの伝承ではアレクサンドロスのワズィールとして名高い。元来は、ユダヤ教の伝説やアレクサンダー・ロマンス、あるいはギルガメッシュ伝説に由来するとされる。しばしば旧約聖書に出てくる聖人エリヤ(イリヤース)と同一視され、特にインド洋西海域で活動する航海民の間では宗教を越えて「航海の守り神」として現在にいたるまで崇拜を集めている[EP: al-Khadir; 家島彦一「ムスリム海民による航海安全の信仰」『アジア・アフリカ言語文化研究』42、1991年、117–135頁]。

[ヒズルは] 言った。「この海の底へ。」

[天使は] 言った。「ヌーフの時代に1人の男がこの海に落ちたが、今日でさえ、この海の3分の1の深さにも達していない。」

[そこで] ヒズルは引き返した。

同様に、「サンジャリーの海(Baḥr-i Šanjālī)」<sup>94</sup>もまた、海底に到達した者は誰もいない。なぜなら、海底で風が生じ、波を引き起こしているからである。あらゆる海で波は上方で生じるが、この海では波は下方で生じ、人が海底に到達するのを阻んでいる。

海については、こういったことを述べておこう。なぜなら「海を見ぬ者は、至高なるアッラーの偉大さを知ることはない」と言われているからである。私がこれら「海」のことについて語ってきたのは、(p.104) 至高なる真理者「たる創造主」の偉大さが読者の心に増さんがためである。海の驚異には際限がないとはいえ、私はいくつかの箇所ですべてに「その驚異についてさらに」述べていこう。ある人が「どんな海の驚異を見てきたか?」と尋ねられ、こう答えた。「私が海から安全であることこそが、私の見た最も不思議なことだ」、すなわち「ペルシア語では」、「海から救われること、そして無事にそこから戻り来ることこそ、あらゆる驚異のなかで最も不思議なことである」と。

次の章では世界中の小川や川や泉の性質とその驚異について述べよう。

### 第3章 川と小川の驚異について

至高なるアッラーのいわく、「かれらは言う。『わたしたちのために、あなたが地から泉を湧き出させるまでは、あなたを信じないであろう』」[Q17:90]。

知れ。川や泉は世界中にたくさんある。その中でも、驚くべきことが含まれている一部のものについて私は述べていこう。そうすれば読者の心には信心と英知が増すであろう。本章もまたアルファベット順に配列されている。

#### 【世界中の川、小川、泉について】

＜アリフ (al-alif) の項＞

「イティル (Itil)」は大きな川であり、ルース (ロシア) の境域に発し、ブルガールを通り、ハザルの海に流れ込む<sup>95</sup>。「イティルの川」はキルギス (Hirhīz) の近くから、キーマークの人々 (Kīmākīya)<sup>96</sup> やグズの人々 (Gūzīya)<sup>97</sup> の間を抜け、ブルガールの向こう側に至る。その後、戻っ

94) 本書では「サンジャルの入り江」は中国にあると記されている (後出)。イブン・ホルダードベは、インド洋南部にある場所と考えていたようであり、一方ヤークートは、サンジャル (Sanjal) と呼ばれる川がグラナダにあると伝える [Ibn Ḥurdādhbih, *Kitāb al-masālik*, p. 63; Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 3, p. 264]。

95) ヴォルガ川のこととされる。この部分の記述は『世界の諸境域』と近い:「キーマークとヒルヒーズ (Hirhīz) の境域にある山から生じ、(中略) グズとキーマークの間の境域に沿って西に流れ、ブルガールに達する。そこから南へ向かいベチェンガ (Pačanga) とブルタースの間を流れ、ハザルに属するイティル (Ātil) の町を横切り、ハザルの海に流れ込む」[*Hudūd al-'ālam*, pp. 46-47]。

96) キーマークは、イルティシユ川下流の西シベリアに暮らしたテュルク系民族 [EI: Kimāk]。『世界の諸境域』によると、キーマークの地は、東はキルギズの居住地、南はイルトウシユ川とイティル川、西はキプチャーク、北は無人地帯と接している [Hudūd al-'ālam, p. 85]。

97) グズあるいはオグズは、8世紀に東突厥国を滅ぼした部族連合を構成していたテュルク系民族の1つ。9-10世紀にはアラル海北方で活動しており、北はキーマーク、東はカルルク、西はハザルと接していた。その後南下



てルースの方へ流れ、再び戻ってブルガールにやって来て、さらにはブルタース (Burtās)<sup>98)</sup> の地に至る。そしてハザルの海に流れ込む。70 の川に分かれるが、その本流はハザルの海の向こう側 30 ファルサングのところであり、海の水の上を覆い尽くす [ほどに流れ込む]。冬には、この川の本流は凍る。なぜなら淡水は氷になるからである。一方ハザル [の海] の水は塩辛く、凍らない。注ぎ込んだ先で、その淡水は [凍った状態で] 海の表面に現れる。

「アンダルス川の川 (Nahr-i Andalus)」は船が入れない川である。ただし、土曜日、太陽が沈む時刻には穏やかになり、その後船は進むことができる。その岸には銅製の偶像がある。言われているところによると、(p.105) [それは] 地面から生えている。なぜなら人にはそれをつくるほどの力は与えられていないからである。その像の額には、「私を越えて行くな。さもなくばおまえは戻れない」、すなわち [ペルシア語では] 「ここより先に進むな。戻れなくなるのだから」と書かれている。

「イーラクの川 (Nahr-i Īlāq)」は大きな川である<sup>99)</sup>。そこには魚がいる。その魚を食べた者は誰でも 1 週間麻痺した状態になり、やがて回復する。その水で沐浴する者は、その夜、夢精する。

「ウブッラの川 (Nahr-i Ubullā)」はバスラにあり、その長さは 4 ファルサングである<sup>100)</sup>。両岸に邸宅や庭園があり、1 本の線のように連なっている。海の満潮時には川全体が水でいっぱいになるが、干潮時にはすべての川や庭園から水が引く。しかし水は塩辛いため、ウブッラの住民はマアキルの川 (Nahr al-Ma'qil)<sup>101)</sup> から水を得る。この川には大きな淵があり、危険である。

ビラール [・ブン・アビー・ブルダ] (Bilāl [b. Abī Burda])<sup>102)</sup> の時代、人々はバスラの川の数を数えた。小舟が進むことのできる川が 12 万本もあり、それぞれの川に名前があった<sup>103)</sup>。

「アラス (Aras)」は大きな川である<sup>104)</sup>。アゼルバイジャンの境域にあり、タバリスターンの海 (Daryā-yi Ṭabarīya) に注ぐ。その川に入った馬はいずれも血管が開き、余分な血が流れ出す。このような特性がこの川にはある。

「赤い水の泉 (‘Ayn-i āb-i aḥmar)」はティルミズにある赤い泉である。そことジャイフーンの間は 10 歩分 [の距離] である。[その泉の水は] 夏は冷たく、冬は温かい。ジャイフーンの水は腐るが、この泉の水は美味しい。

し、イスラーム化した一部のグズはトゥルクマーンと呼ばれるようになったと考えられている。セルジューク朝は彼らによって建てられた。ここでの「グズの人々」の土地は、9-10 世紀の彼らの活動範囲を指している [EI<sup>2</sup>: Ghuzz]。

98) ブルガール人とハザル人の活動領域の中間付近にあった森の中で、より原始的な生活を営んだ人々。モルドヴァ人の祖先と言われる [EI<sup>2</sup>: Burtās]。

99) イーラク (イーラク) は、現在のウズベキスタンを通るシル川流域を指す。フェルガーナとシャーシュ (チャーチュ) 地方の間に位置し、銀の産地として知られる [EI<sup>2</sup>: Īlāq]。

100) バスラ近郊の町ウブッラから、南西方面に向かってペルシア湾にいたるウブッラ運河のこと [EI<sup>2</sup>: al-Ubullā]。

101) バグダードとバスラを繋ぐ運河。正統カリフのウマルの時代に、教友マアキル・ブン・ヤサルによって掘削された [Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, pp.44, 46]。

102) ビラール (Bilāl b. Abī Burda al-Aṣ'arī, 739 年没) はクーファ初のカーディーと伝えられるアビー・ブルダ (Abī Burda) の息子。727/8 年にイラク総督ハーリドによってバスラのカーディーに任命されたが、742/3 年にイラク総督ユースフ・ブン・ウマルにより解任、投獄され、獄中で死亡した [EI<sup>2</sup>: al-Aṣ'arī, Abū Burda]。

103) 同様の記述をイスタフリーが伝える [al-Iṣṭahṟī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p.80]。

104) アルメニア山脈東部から生じ、アゼルバイジャンやアッラーンの境域を流れ、カスピ海に流れ込む。

「白い水の泉（‘Ayn-i āb-i abyad）」はアルメニアにある泉である。牛乳のように白い。服につくと黒くなる。金や銀製の杯に入れると錆が生じる。ガラス製であれば錆はつかない。この泉に干し草を入れると沸騰し、やがて取まる。

「黒い水の泉（‘Ayn-i āb-i aswad）」はアゼルバイジャンにある泉である。そこでは糸玉（kalāf）を染色する。（p.106）世界中でこのような泉は他になく、スルターンの保護下にある。染色に使えるような黒い水は、世界中でここのみである。

#### <バー（al-bā’）の項>

「バービルの水場（Āb-i Bābil）」はサバラーンの山<sup>105)</sup>の上にある。[そこには]銅製の釜が据えつけられているが、それは1アラシュもの大きさがある。水を汲みたいときには、そのまわりで火を燃やす。すると、雷鳴が轟き、泉から水が流れ出す。水を汲み終えると、その地方の長（ra’īs）が赤土を取り出し、その泉の口に置く。これは風変わりで不思議なことである。

「箱の泉（‘Ayn-i ṣandūq）」。このような泉はマグリブに [もある]。海岸にある泉で、その上に、鍵のかけられた箱が置かれている。箱には穴があいており、そこから水が吹き出る。村々はその水に頼っている。水が少なくなると、ヒンドの人々はそこに行き、1000人の貧者に食べ物を与え、罪を悔い改める。[すると]その箱から水が溢れ出し、地域を水で満たす。彼らは、罪の忌わしさゆえに水が少なくなる、と言っている。

#### <ジーム（al-jīm）の項>

「ジャージャルムの泉（‘Ayn-i Jājarm）」<sup>106)</sup>は、太陽が昇るとそこには1滴水もないが、太陽が沈むと水でいっぱいになる泉である。

#### <ハー（al-hā’）の項>

「生命の泉（‘Ayn al-hayāt）」は「闇の世界（Zulmāt）」にある。その水を飲むものはみな、不死になる。イスカンダルは [それを] 求めたが手に入れることはできなかった。

「イスカンダルは、そこへ至る道の」中ほどまで来たときに言った。「老人は誰も私と一緒に来てはならぬ。」

そうしてみなを帰してしまった。1人の若者が、自分の父親を箱に隠して連れて行った。双角の所有者（イスカンダル）は「闇の世界」の中で立ち往生し、引き返そうと思ったが、光 [の世界] への道を見つけられなかった。彼は言った。「何ということだ。我らを救ってくれる古老はいないものか。」

かの若者は自分の父のことを打ち明け、父を連れてきた。

「イスカンダルは」言った。「我らに助かる方法を見せてみよ。」

「父親は」言った。「ここで雌馬の仔を殺し、残しておかれよ。引き返すときに、雌馬を先頭に立

105) イラン西北部の山（本訳注（3）、381頁、注10参照）。

106) ジャージャルムは、現在の Bodhnord を中心とするカスピ海東部の地域。13世紀までは肥沃な土地として知られていた [EI<sup>2</sup>: Djādjarm]。

てれば、それは子供のところまで戻ってくるだろうから。」

〔イスカンドルは〕この水をヒズルに分け与えた。(p.107) イスカンドルは引き返すときに雌馬を先頭に立てた。雌馬は子供の「亡骸の」ところまで戻り、彼は助かった。

「熱湯の泉（‘Ayn mā’ al-hār）」はターラカーン（Ṭalāqān）<sup>107)</sup>にある泉である。羊をその中に入れると煮え、鍋をこの泉の中に置くと沸く。〔この水を〕飲む者は腹から出血する。タバリスターンにもこのような泉があり、ファールスの境域にも同じような泉がある。この泉の上に風呂をもうければ、熱い湯が溢れる。巷の人々は、ディーヴがこの水を熱しているのだ、と言っている。これを「スライマーンのハンマーム（ソロモンの風呂）」と呼ぶ。

「熱湯の泉（‘Ayn mā’ al-hār）」は、ハッラカーン（Ḥarraqān）<sup>108)</sup>とカズヴィーンの間にある。「温水の泉（‘Ayn al-ḥamma）」と呼ばれる。水は熱くてすばらしく、性交に効果がある。「ザラーワンド（Zarāwand）」<sup>109)</sup>とも呼ばれている。傷を負ったり、ライ病（juzām）、炎症（bād-hā）、あるいは排尿困難の病にかかった人や動物をその水の中に入れると、癒され、快方にむかう。折れた骨は排出される。疥癬や腹の疝痛（qawlanj）、倦怠感（istirḥā）にも効果がある。〔かつて〕1人の男が矢で射られ、鏃が彼の体の中に残り、鏃の上を肉が覆ってしまった。人々は、「鏃は肝臓にまで達してしまった」と言ったが、その者を3日間この泉に浸けたところ、鏃は彼の脇腹から出てきた。

この温泉の近くに冷泉がある。その泉は脾臓の管を広げ、下痢（ishāl）に効果がある。喉の炎症（ḥawānīq）や目の痛みを和らげる。アンダラーニー塩（milḥ-i andarānī）<sup>110)</sup>、蛙の亜鉛（tūtiyā-yi dafādi’ī）<sup>111)</sup>、マンガン（maghnīsā）がこの泉から採れる。この泉と同じようなものが世界中では聖なる家（イェルサレム）にあったが、それは埋もれてしまった。そのことについてはあとで述べよう。

#### <ハー（al-ḥā’）の項>

「ハーブールの川（Nahr-i Ḥābūr）」はラース・アル＝アイン（Ra’s al-‘Ayn）<sup>112)</sup>から流れ出る川である。300の（p.108）泉があり、すべてが合流したものを「ハーブール」と呼んでいる<sup>113)</sup>。水は透明で、20ファルシング流れる。その川の岸辺には、カルキースィヤー（Qarqī[s]iyā）<sup>114)</sup>まで普通の本木が一直線に繁っている。

#### <ダール（al-dāl）の項>

107) ターラカーンと呼ばれた場所としては、現在のアフガニスタン北部にある「マルヴ・ルードのターラカーン」、現在のイラン中央部にある「カズヴィーン（レイ）のターラカーン」、およびトハリスタン地方の東端とされる都市の3つがある [EP: Ṭalākān]。本文中の情報だけでは、このうちのどれかは特定できない。

108) イランのカズヴィーン近郊の町。

109) かつては薬草として利用された植物の一種ウマノスズクサの意味もある。

110) 岩塩の一種 [LN: Milḥ-i andarānī]。ピールーニーの『医学における薬物の書（Kitāb al-ṣaydana fī al-ṭibb）』では、ホウ砂（tankār）の一種として挙げられている。ただし、同書の注では真っ白な塩を指す“milḥ al-ḡarrānī”の誤りであろうとされている [Abū al-Rayḥān Bīrūnī, Kitāb al-ṣaydana fī al-ṭibb. Ed. A. Zaryāb, Markaz-i Našr-i Dāniṣgāhi, Tehran, 1370s, pp. 152–153]。

111) この語が何を差しているかは不明。

112) 現在のシリアとトルコの国境にある都市。古代から泉の存在で知られていた [EP: Ra’s al-‘ayn]。

113) 「大ハーブール」と呼ばれるユーフラテス川の支流。その流域は肥沃なことで有名 [EP: Ḫābūr]。

114) ジャズィーラ地方のユーフラテス河畔にある都市。ローマ時代に築かれた城塞があり、軍事・商業上の重要都市であった [EP: Karkīsiyā]。この部分の記述内容はイスタフリーと一致する [al-Iṣṭabī, Kitāb al-masālik al-mamālik, p. 74]。

「血の泉(‘Ayn al-dam)」は、ダムガーンファンジャール(Fanjār)村にある泉である。赤く、血のように凝固する。水銀を泉の中に投げ込むと、色づけされた石になる。

<ザー(al-zā)の項>

「黄金の川(Zarrīn-rūd)」は美味な[水の]川である<sup>115)</sup>。その源はナバーカーン(Nabākān)の村にあり、河口はディズ(Diz)の村にある。そうして土埃の立つ川となり、ある場所で砂地に潜り込み、ケルマーンで再び現れる。その砂地からケルマーンまでは60ファルサングである。ケルマーンの一帯はこの水で潤される。その後、東の海に注ぎ込む。[かつて]1本の棒がその砂地の底に投げ込まれた。[棒には]王の名が銀で刻してあったが、[それは]ケルマーンで見つかった。まことにアッラーは最もよく知りたまう。

<スイーン(al-sīn)の項>

「シルワーン(シロアム)の泉(‘Ayn-i Silwān)」は聖なる家(イェルサレム)の地にある。キリスト教徒たちは子供が生まれるとその水で赤ん坊を洗い、「キリスト教徒になった」と言う。イーサーはその水でもって盲人の目を見えるようにし、死者を生き返らせ、そこで沐浴した。マッカにあるザムザム(Zamzam)の井戸のように、[神に]祝福された泉である。

「安息日の泉(‘Ayn al-sabt)」はコヘスターンにある泉である。土曜日にそこを通り過ぎる生きものはみな、災厄に見舞われるが、ほかの日には害がない。札が立てられ、その日は誰もそこを通らないようにしている。

「毒の泉(‘Ayn al-samm)」は中国の天子(faġfūr)<sup>116)</sup>の宮殿にある泉である。水は美味で、益が多いが、そこから1ファルサング以上離れたところに運ぶと、猛毒になる。

「スーリーンの水の泉(‘Ayn-i āb-i Sūrīn)」はレイの地方にある泉で<sup>117)</sup>、「災いの泉(‘Ayn al-mayšūma)」と呼ばれる。その水を用いると、たいいてい病気になる。「この泉の凶兆の原因は何か？」と問われ、彼らは答えた。「ヤフヤー(洗礼者ヨハネ)・ブン・ザカリヤー(Yahyā b. Zakariyā)を殺すときに用いた剣をこの水で洗ったのだ。」

(p.109) <シーン(al-sīn)の項>

「シューシュの川(Nahr-i Šūs)」<sup>118)</sup>は2ミールの長さがある。アブー・ムーサー・アル＝アシュアリー

115) 現在では「ザーヤンデ・ルード(生命を生み出す川)」として知られるイスファハーンを流れる川。イブン・ホルダドベが同じ話を伝えている。「ザリーン・ルードの源はイスファハーンの川で、多くの村を潤す。その数は17。それから、村の尽きるところで砂の中に消え、その後ケルマーンで再び現れる。消えたところから60ファルサフの距離である。そしてケルマーンの地を潤し、東の海に流れ込む。そのことは、文字の書かれた木片がそこに投げ込まれ、ケルマーンで現れたことからわかる」[Ibn Ḥurdāqbih, *Kitāb al-masālik*, p. 176]。

116) ムスリムの諸文献に現れる中国の「皇帝」。サンスクリット語の“bhagaṇputra”、中世ペルシア語の“baḡaṇputra”に相当する。その語義は「神の子」であり、中華思想における「天子」を意味する[ET: Faġfūr]。

117) ヤークートは、レイにある泉として同様の記述を伝えているが、殺害されたのは、アリー・ブン・アビー・ターリブの次男フサインの子孫であるヤフヤー・ブン・ザイド(Yahyā b. Zayd)だとされる[Yāqūt, *Muʿjam al-buldān*, vol. 3, p. 279]。ほか、ヤアクービー参照[Aḥmad b. Abī Yaʿqūb, *Kitāb al-buldān*, Ed. M. J. De Goeje, E.J. Brill, Leiden, 1967, p. 313]。

118) シューシュは古代のスーサ。イラン南西部のカールーン川とカルカー川に挟まれた平野にある。アケメネス朝の冬の都があったとされる。預言者ダーニヤール(ダニエル)の墓の話は本書テキスト240頁、棺の話は437-438頁でも触れられる。ダーニヤールの墓は町の中に現存する。

(Abū Mūsā al-Aṣḥarī)<sup>119</sup> がシューシュを征服したとき、宝物庫でダーニヤール（ダニエル）の遺骸を見つけた。彼は言った。「いったいどうやってこの遺骸はおまえたちのもとへ来たのか？」

「人々は」言った。「シューシュで早魘があり、我々はこの棺をテュルク人から借りました。[今も] これでもって雨乞いをしているのです。」

アブー・ムーサーは言った。「いつかテュルク人たちが、おまえたちからこれを取り返すやもしれぬ。私がこれを埋葬しよう。」

そこで彼はシューシュの川をせき止め、川の底を掘り、3つの墓と3つの棺をつくった。そして遺体を墓の1つに安置し、3つの墓を封じてから堰を切り、[水が] それらの墓の上を流れるようにした。こうして [ダーニヤールの遺骸を] 求める望みはすべて断ち切られた。それ以降、かの地に飢饉は生じなかった<sup>120</sup>。

潜水夫たちは川底で墓を目にする。シューシュの民にとって、ダーニヤールの墓廟がこの川の中にあるというのはこの上ない榮譽である。

「シャブディーズ<sup>121</sup>」の泉（‘Ayn-i Šabdīz）は、ビヒストゥーンの山の麓から流れ出る泉であり、水は澄んでいる。麝香のかげらと一緒に、その中に1000ディルハム銀貨を投げ込むと、1006ディルハムになる。6ディルハム増えるのだが、その理由は神のみがご存じである。

#### <サード (al-šād) の項>

「サンジャリーの入り江の川 (Nahr-i ḥaljī-i Šanjaī)」は中国にあり、水は不吉で血に飢えている。そこでは「ハップ (ḥabb)」<sup>122</sup> と呼ばれる風が吹き、船を破壊し、人々を溺れさせる。そこには水の人がいる。水が穏やかになると、彼らは現れる。いきなり物を奪って水に潜っていく以外、彼らは誰にも危害を加えない。

#### <ター (al-tā’) の項>

「タバリスターンの水の川 (Nahr-i āb-i Ṭabariya)」は水量の多い川で、数千の下水と排水溝 (ḡusālāt) がそこに流れ込むが、毎日、その水はきれいになる。

その地には別の川があり、7年流れ、7年干上がる。これと同じような川がダマスカスの4フェルサング先にあり、4年流れ、4年干上がる。それは「欺くもの (ḡarrāra)」と呼ばれている。

「[[こだまの] 泉 (‘Ayn [al-ṭinnīn])」<sup>123</sup> はタバリスターンの山上にある泉で、そばで声を上げる

119) 預言者ムハンマドの教友。614年頃イエメンに生まれ、カリフ・ウマルの時代にバスラ総督に任じられ、642年にはシューシュタルを征服した。この話に出てくる「テュルク」は時代が合わず不明 [EI<sup>2</sup>: al-Aṣḥarī, Abū Mūsā]。

120) 同様の逸話をイスタフリーヤイブン・ハウカルも伝えるが、そこでは飢饉やトルコ人からの棺の借用という話は見られない [al-Iṣṭahārī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 92; Ibn Ḥawqal, *Kitāb ṣūrat al-‘ard*, p. 255]。

121) ホスロウ・パルヴィーズの駿馬の名。「シャブディーズ」は「夜のような漆黒」の意。この泉は、イラン西部のケルマーンシャー近郊にあるターケ・ボスターンを指す。シャブディーズにまたがるホスロウの浮き彫りなど、サーサーン朝期の遺構が残る。注201も参照のこと。

122) ハップは海の悪天候・荒天を指す。校訂テキストでは HSB となっているが、同じような話がイブン・ファキーフの書に見られる。そこでは地名は「サンジー (Šanjī)」であるものの、その海に吹く風が「ハップ (ḥabb)」と呼ばれている [Ibn Faḳīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p. 13]。マスウーディーも、「サンジーの海」に吹く暴風「ハップ」や、その海に出現する「水の人」について伝えている [al-Mas‘ūdī, *Murūj al-dhahab*, vol. 1, pp. 162–163]。

123) 校訂テキストでは「泉 (‘ayn)」のあとの語が落ちていますが、ミーノヴィー氏の注釈に従い、「こだまの泉 (‘Ayn-i ṭinnīn)」と考える。サーデギー本では「叫び声の泉 (Čīšma-yi bāng)」となっている。

と「流れが」止まる。人が隠れると流れ始める。100回こういったことをすると、「100回とも」このようになる。

(p.110)「香りの泉(‘Ayn al-ṭayyba)」はハーバの山(Kūh-i Ḥāba)<sup>124)</sup>の上にある泉で、数部屋分の「大きさの千畳敷」岩の上にある。水はそこから矢のように流れ出し、千畳敷岩の表面をたたく。そして穴に入り、千畳敷岩の四方に流れ落ちる。そこからは麝香や竜涎香の香りがする。その水で洗ったものは、よい香りになる。

#### <ファー(al-fā’)の項>

「ファールヤーブの泉(‘Ayn al-Fāryāb)」は海よりは小さいが、大きな泉である<sup>125)</sup>。人がそこに入ると、藻が足に絡みつく。力を入れると、よりきつく絡む。おとなしくしていると、「藻は」次第にほどけていく。

「馬の泉(‘Ayn al-faras)」は「複数の」大きな泉で、中国の境域にある。雨が降ってほしいときには馬をその源泉に配し、人々はそのまわりに立つ。「すると」ただちに雨が降る。たくさん降ったら、馬を外に出す。「すると」雨が止む。その後、その馬を殺し、獣や鳥が食べるように肉を山の上に置く。彼らは言う。「創造主は我々に水を与えた。我々は神のしもべたちに肉を与える。」

「ファイユームの泉(‘Ayn-i Fayyūm)」はナイル川岸にある泉で、ファイユームの町にある<sup>126)</sup>。ファイユームにはナイルからまったく水が来ないが、この水は、ユースフ——彼に平安あれ——がもたらした。それを「ラーフーンの川(Nahr al-Lāhūn)」と呼ぶ。ナイル川岸の町はすべてナイルから水を得ているが、ファイユームのみはラーフーンから水を得ている。

#### <カーフ(al-qāf)の項>

「カルキースィヤーの泉(‘Ayn-i Qarqīsiyā)」は山から流れ落ちる泉である。そこでは、宝石や銀製品や金製品が採れる。「それらが」どこからやってくるのかは誰も知らない。

ある男がそこで、王の名が記された金の盃を手に入れた。数年が経ち、「別の」男がそれを見て、言った。「それは私のだ。ルームの海でなくしたのだ。」

「最初の男は」言った。「私はカルキースィヤーの泉で手に入れたぞ。」

「こうして」その泉はルームの海から来ていることがわかった。船が「ルームの海で」沈むと、積み荷の一部がその泉で手に入る。

#### <カーフ(al-kāf)の項>

「クルの川(Nahr-i Kur)」は大きな川で、ティフリースの城壁のふちを流れている<sup>127)</sup>。アッラー

124) 本書には現れない地名である。

125) この地名は、アフガニスタン、ファールス、ケルマーン、ソグドなどに見られるが、本書の記述からはそれらのうちのどれか特定できない [EI<sup>2</sup>: Faryāb]。

126) ファイユームは中部エジプト、ナイル渓谷の東に位置する地方。渓谷と同地方とを隔てる絶壁が破れている場所が1ヶ所あり、ナイルの支流がそこから入っている。その場所は、中世には「入り口(Halīj al-Manhā)」、現在は「ユースフの海(Bahr Yūsuf)」と呼ばれる。古代からラーフーン(イラーフーン)にある堰で調整された [EI<sup>2</sup>: al-Fayyūm]。

127) コーカサスを流れ、カスピ海に注ぐ。現在は「クラ川」と呼ばれる。

ン（Allān）地方の（p.111）山々に発し、タバリストーン〔の海〕に注ぐ。クルの川は「サムール（Samūr）」<sup>128)</sup>とも呼ばれ、シャッキー（Šakkī）<sup>129)</sup>の国々から来る。アラスの川は、クルよりも小さい。クルはアラスとぶつかり、その間に割り込み、反対側へすばやく流れ出る。

<ミーム（al-mīm）の項>

「死の川（死海）（Nahr al-mīta）」はシャームにあり、海ほど〔の大きさ〕である。そこに落ちた者は溺れることはなく、水に沈まない。だが、波がその者をもてあそび、やがて死に至らしめ、岸に打ち上げる。

「聖なる泉（‘Ayn al-muqaddasa）」はイスカンダリーヤにある温水の水場である。〔かつては〕ライ患者がそこに行くと、ライ病が治ったものだった。

ルームの王が嘘をついて言った。「私はライ病だ。」

彼はイスカンダリーヤの近くまで来て、「私は、この水のためにやって来た」と伝言を送った。彼らは〔王が町の中に来ることを〕妨げなかった。王は1000隻の船とともに来て、この泉に浸かり、言った。「私のライ病はよくなった。」

ある夜、〔王は〕鬨の声をあげ、彼の軍は勝利をおさめ、イスカンダリーヤを征服した。イスカンダリーヤの灯台の鏡を引きはがし、灯台の一部を破壊した。そしてこの泉を埋めてしまった。その夜、この王はライ病を患い、皮膚にはライが現れた。そして彼は戻っていった。

「癒しの泉（‘Ayn al-maraḍī）」はゲールの境域にある泉で、そのふちには3つの穴のあいた岩がある。病人はそこに来ると、1つの穴の上に裸で座り、両足をそれぞれ〔残る〕2つの穴に入れる。泉の水を病人に注ぐと、やがて彼は気を失う。そのあと、その者をフェルトで包み、〔体が〕温まるまで灰の下に寝かせる。意識が戻ると、彼は快復している。

<ヌーン（al-nūn）の項>

「ナフラワーン（Nahrawān）」<sup>130)</sup>は大きな川であり、〔ナフラワーンの〕町の中から流れ出し、バグダードの郊外に至る。ダスカラ（Daskara）<sup>131)</sup>に着くと、〔水量が〕少なくなる。その後、ティクリート（Tikrīt）の境域まで行く。この川の岸では、イルヤース——彼に平安あれ——がよく見かけられる。

<ハー（al-hā）の項>

「ヒンドミードの川（Nahr-i Hindmīd）」は、スイースターンの川である<sup>132)</sup>。1000の小川から水

128) 動物の黒テンの意もある。なお、クル川とサムール川は、実際には別の川である。サムール川はシャッキーの北側に発し、ダルバンド（デルバント）の南側でカスピ海に注ぐ。

129) 東コーカサスの地域。東西はアラザン（Alazan）渓谷からグルジアを、南北はコーカサス山脈の南からクラ川までを指す。イスラーム以前はコーカサス・アルバニア（アッラーン）王国の一部であり、アラブ・ムスリム勢力の進出後は、東コーカサスのシルワーンシャー朝とグルジア勢力の係争地となった〔EI<sup>2</sup>: Šakkī〕。

130) ティグリス川から東に分かれる運河。長さは200マイル。ティクリートに始まり、ワースイトの50キロ北でティグリスに再合流する。ティグリス川のイラン寄り土地の灌漑に利用された〔Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, pp. 57-61〕。この記述は、イスタフリーの地理書とほぼ一致する〔al-Iṣṭahrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 86〕。

131) バグダードとワースイトの間の都市。

132) アフガン山麓に発し、プストを通過してゼレ湖に注ぐヘルマンド（Helmand）川のこと。イブン・ファキーフはスイースターンの人々の言葉として、「1000本の川が流れ込むが水量は増えず、1000本の川が分岐するが水量が減ることもない」と伝え、本書と同じく“Hindmīd”と表記しているが、本来は、この川の別名である

がこの川に(p.112)注ぐが[水量は]増えず、1000の川がそこから流れ出す。ゲールの境域に発し、ゼレの湖に注ぎ込む。その長さは30ファルサングである。そこには魚がたくさんいる。

<ワーウ(al-wāw)の項>

「ワーズワーズの川(Nahr-i Wāzwāz)」はニハーヴァンドにあるくぼみで、穴のあいた大きな岩がある<sup>133)</sup>。水はそこから湧き出る。農夫がこの穴に入り、鋤で地面をたたくと、水が流れ出す。用いる場合は、水路を伝わせる。

<ヤー(al-yā')の項>

「イエメンの泉('Ayn al-Yaman)」は不思議な泉である。アブドゥルマリク・ブン・アブドゥッラー・アルムハッラビー('Abd al-Malik b. 'Abd Allah al-Muhallabī)<sup>134)</sup>は言う。「私はアフカーフ(Aḥqāf)<sup>135)</sup>に着いた。1本の川を見たが、それは太陽が昇ると日没の時刻までは流れ、太陽が沈むと逆流する。私はこのことについて尋ねた。彼らは言った。『いつもこのようになる。雲がでているとき、我々はこの川が逆流することから日没を知るのだ。』」

川や泉の驚異についてはこの程度のことを述べておこう。[これらは]賢人たちの言説から私が聞いたり、書物から得たりしたものである。たとえ、これらについて確固たる論拠をもたないとしても、知り得たことを述べたまでである。

続いて井戸の驚異について述べよう。それらがどれほど過剰であるとしても、その中に驚異があるかぎり、述べていこうと思う。

<掘削された泉と井戸の驚異について>

バヌー・アーミル(Banī 'Āmir)部族<sup>136)</sup>のもとには1つの井戸があると言われている。スライマーンがそこに至ったとき、彼の軍は喉が渴いていた。彼は乾燥した大地を見て、困惑した。スライマーンはディーヴが笑っているのを見て、言った。「みな喉が渴いているというのに、おまえは笑っているのか?」

[ディーヴは]言った。「だっておまえたちの足の下に水があるのに、わかっていないからさ。」

[スライマーンが]掘るように命じると、300もの泉が現れた。

そこで次のように言われている。「水の上にいるかぎり、誰も渴きで死ぬことはない。」

また、次のように言われている。一団の人々が荒野で渴きのために死んでしまった。[その話を聞いて]ハッジャージュ・ブン・ユースフは言った。「あそこには水があるではないか。」

[人々が]掘ると、水が出てきた。

彼らは言った。「どうしてあなたは知っていたのですか?」

“Hiḡmand”と読むべきであろう[Ibn Faqīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p.208; *Hudūd al-'ālam*, pp.43, 102-103 (Minorsky comment, pp.73, 110, 344); Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p.338]。

133) 1日に1度か2度水の流れ出す泉としてイブン・ファキーフが述べている [Ibn Faqīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p.259]。

134) この人物についての詳細は不明。

135) 『クルアーン』46章の章題にも現れる。アードの民の地として言及され、ハドラマウト地方に比定される [EI: Aḥkāf]。

136) 西エリトリアからスーダンにかけて居住するムスリムの遊牧部族 [EI: 'Āmir, Banū]。



[ハッジージュは] 言った。(p. 113) 「喉が渴いたときに [すぐに] 彼らが神に助けを求め、水を望んでいれば、それは [神に] 受け入れられたのに。彼らには運がなかったのだ。」

<ある井戸>

サーマッラー (Samarra) に井戸がある。水は美味しく、穏やかである。[だが] 日干し煉瓦をその中に投げると、そこから大きな音が鳴り響く。3時間経つと水が熱くなり、その後、静かになる。

<ある井戸>

サランディープの山頂には井戸がある。誰であれ、それをのぞきこむと、その者をめがけて矢のように石が飛んできて、傷めつける。それが何であるのかは誰も知らない。ある者は、[それは] アーダム——彼に平安あれ——の娘の墓だと言う。

<ある井戸>

プーシャング (Pūshang)<sup>137)</sup> の山の上には2つの井戸がある。1つ目の井戸に投げ込んだものは何であれ、戻ってくる。もう1つの井戸は10万羽のハトが巣を作っており、飛び立っては、また戻ってくる。その中に綱を垂らすと2つに切れてしまい、底に届かない。あたかもハサミでもって真っ二つに切り裂かれたかのようになる。

<ある井戸>

イスファハーンの山には井戸がある。その底は見えない。イスハーク・スィームジュリー (Ishāq Sīmūrī)<sup>138)</sup> の時代に、1人の子供がその中に落ちた。[イスハークは] 帝王であり、心を痛めた。子供の母親は悲嘆に暮れていた。[そこで] 死刑を宣告された1人の男を牢から出し、駕籠の中に座らせ、[井戸の中に] 降ろした。7日後に引き上げるという条件であった。[男は] 7日間進み続けた。彼は駕籠の中に置いてあった石を下に投げた。3昼夜、耳を澄ましていたが、何も聞こえなかった。そして彼は引き上げられた。人々が尋ねた。「何を見たのか?」

彼は言った。「暗黒だ。」

<ある井戸>

ダームガーンの境域には井戸があり、誰もその水を飲むと下痢をする。その水を別の場所を持っていくと血になる。さらに速くに持っていくと、その血は石になる。月経時の布をその井戸の中に投げ込むと、壁をもなぎ倒すほどの強風が井戸から生じ、水と布を外に吐き出してから静かになる。

とある書物で私が読んだところでは、人間の顔の皮を槍の先につけ、月経時の布をその先に結び、[槍を] 高く掲げると、(p. 114) 激しい風がわき起こり、その地方を混乱に陥れる。[それは] 槍を下ろし、それらを取り外すまで [続く]。

<ある井戸>

137) ヘラート西方のハリー・ルート川沿いにある古都。7-8世紀におけるアラブ・ムスリムの前衛拠点であり、ターヒル朝の故地でもある [EI<sup>2</sup>: Būshandī]。

138) スィームジュール家はサーマーン朝に仕えたトルコ系奴隷軍人の家系。ホラーサーンに拠点を置いて活動した [EI<sup>2</sup>: Sīmdjūrīds]。

タハーブ (Taḥāb)<sup>139)</sup> とガルチスターン (Ġaršistān) の境域には井戸があり、その中には赤い泥がある。それを汲み上げて流し去り、井戸に固くふたをする。翌年、井戸のふたを開けると、[井戸は] 赤い泥でいっぱいになっている。もし井戸にふたをしなければ、その井戸から風が吹いてきて、タハーブの民を苦しめる。その音のために女たちは死んでしまう。

<ある井戸>

ヒンドゥスターンには井戸が1つあり、[水が] 流れ出している。水は2つの流れとなり、それぞれが穴に流れ込んでいる。一方は黄色のゴムになり、猛毒である。もう一方は青色のゴムとなり、効能ある薬 (taryāq) である。このようなことは珍しい。

<ある井戸>

バーミヤーン (Bāmiyān) の地には「ガウラク (ĠWRK)」と呼ばれる村があり、そこには水が溢れんばかりの井戸がある。喉を渇かせた獲物が水を目指してやって来ると、水位が下がり、獲物を溺れさせる。しばらくすると、獲物の骨が外に投げ出される。

<ある井戸>

チベットの境域には1つの井戸があり、その井戸には空隙 (faḍā) がある。井戸の中に入ると、テュルク語、ヒンディー語、アラビア語、ペルシア語の話し声が聞こえてくる。だが、誰 [の姿] も見えない。いつも聞こえるが、雨が降ると聞こえない。雨がやむと、また聞こえてくる。

<ある井戸>

ハマダーン地方のミフラワーン (Mihrawān) 地区<sup>140)</sup> に「サトク (STQ)」という名の村があり、そこには底の見えない井戸がある。

1人の帝王が言った。「私はこの井戸を埋めてしまおう。」

その年にこの地方でとれたすべての薬を集め、翌年にも集め、[それら] すべての薬をその井戸の中に投げ入れたが、何の変化もなかった。翌年、マーワラーンナフルの隊商がやって来て、次のように話した。「マーワラーンナフルでは水が吹き出し、限りない量の薬が出てきた。」

[そこで] 井戸には地中に裂け目があり、あちらの境域まで続いているのだ、ということがわかった。

<ある湖>

この[ハマダーン]地方のアチュム (AĈM) 地区には山があり、山上に2つの洞窟がある。[1つを] (p. 115) 「キャフターレ・ホル (kaftār-i ḥul)」<sup>141)</sup> と呼んでいる。その傍らには、もう1つ真っ暗な洞窟がある。その中には湖があり、石で覆われている<sup>142)</sup>。私はその地区出身の人から次のような話を聞いた。

彼は言った。「我々は蠟燭を手にしてその中に入った。湖のふちにたどり着くと、その周辺には、

139) この地名の詳細は不明。

140) ハマダーン近郊の町で、現在のミフラバーン (Mihrabān)。

141) 「灰色の (もしくは「愚かな」) ハイエナ」の意。

142) これは、ハマダーンの北方にある世界最大級の鍾乳洞を指すのではないと思われる。現在は「アリー・サドル洞窟 (Ġār-i ‘Alī Ṣadr)」として知られる。

葦やヨシのようなものが生えており、その上に鳥たちがとまっていた。その鳥の羽は黄金のように輝いていた。[鳥たちは]我々や蠟燭のあかりを見ると、羽ばたき始めた。まるで炎のように翼がきらきらと輝いていた。我々は、暗闇と[羽ばたきによる]風のために引き返した。]

これは驚くべきことである。石で覆われた湖があり、その上には何層にもなった山があり、暗闇の中で生活する鳥がいるとは。

<ある川>

アンダルスには1本の川がある。この川には1つの石があり、「平らなもの (pahna)」と呼ばれている。[その石は]1射程の距離から人を引き寄せせる。その石を見た者は誰も笑いすぎて死んでしまう。かの地には銅製の偶像が置かれている。それは1本足で立ち、そこには次のように書かれている。「先に進むべからず。道はない。」

井戸の驚異についてはこの程度のことを述べておこう。文責は伝え手にある。

ここまですべて、水の不思議や海の驚異について述べてきた。次に、大地と土の不思議について一節したためよう。至高なるアッラーが望みたもうならば。

#### 第4章 大地の驚異とその性質について

至高なるアッラーのいわく、「かれは大地を2日間で創られたお方。しかもかれに同位者を立てるのか。かれこそは、万有の主であられる」[Q41: 9]<sup>143)</sup>。[すなわちペルシア語では、神は]「われこそは力ある神であり、大地を2日間で創造した。[しかるに]おまえたちはわれに競争者をつくりだす。われの競争者の誰がこのような大地を創造することができようか」とおっしゃった。

また別の箇所では、「われは大地を、広々としなかったか」[Q78: 6]、[すなわち]「われが大地をおまえたちの安息所となしたのではなかったか。」

[神は]アーダムの子孫に恩寵をほどこされる。大地 (zamīn) は、生ある者たちの休息の場であり、死者たちの秘所を隠す帳であり、大地の影のゆえに夜がある。(p.116) [それは]預言者たちの場所である。植物はそこから生え、被造物の日々の糧の門である。カアバの家はその上にある。[大地は]忍耐強く、重荷を背負い、寛大で、信頼に足る。水と火と風の落ち着くところである。自らに委ねられたものは何であれ100倍にして返す。[それは]整えられた食卓であり、あらゆるものがその上に置かれている。天や風や水や月や太陽はみな、従僕のように大地のまわりをまわっている。大地は帝王のようにひとつところに落ち着いている。春は大地を飾る侍女となり、秋雨や落葉はその上で泣く。あるものは飾りつけをし、風は敷物を広げる。雲は水運び人となり、星々は燭光持ちとなる。

知れ。世界とは、その中にあらゆるものを包含した英知 (hikmat) である。そなたが見るものの

143) 『クルアーン』本文とはごくわずかが異なる。『クルアーン』では次のように書かれている。「言ってみようがいい。あなたがたは、2日間で大地を創られたかれを、どうして信じないのか。しかもかれに同位者を立てるのか。かれこそは、万有の主であられる』」。

うちのあるものは、英知のために創造された。それは英知あるもの(hakīm)であり、学識者や賢人たちのように英知を備えている。またあるものは英知のために創造されたが、物体や無生物のように英知をもたない。[しかしながら]たとえそれ自身では[言葉を]話さずとも、実質的には[雄弁に]語っている。それぞれのものは言う。「私には全能の創り手がいるのだ」と。

そなたが目にするこの世界のいかなる微分子の中にも驚異がある。あるものはハトのように人好き、あるものはカラスのように人を寄せつけない。あるものはカモシカのように優美で、あるものはブタのように不快である。あるものはライオンのように勇敢で、あるものはキツネのように意地が悪い。あるものはカメレオンのように太陽を求め、あるものはコウモリのように太陽から逃げる。あるものはシャコのように笑い、あるものはサンカノゴイのように泣いている<sup>144)</sup>。あるものは雄鶏のように寛大で、あるものは犬のように吝嗇である。あるものはミツバチのように有益で、あるものはネズミやハエのように有害である。天はこれほどまでに高く、大地はこれほどまでに低い。昼にはこれほどの親しみや光があり、夜にはこれほどの恐怖や闇がある。あらゆるものの創り手は神である。[何ものも]おのずから生じたのではない。「ああ、何と素晴らしいアッラー、最も優れた創造者であられる」[Q23:14]。

#### <大地の領域分割について>

知れ。大地という天球(kura-yi hāk)はひとつの世界である。そこにあるものは何であれ、いくつかの種類に分けられる。すなわち動物や植物のように成長するものか、あるいは鉱物や石のような無生物か、というように。

さて、天や(p.117)諸宮や星々については、無生物とも成長するものとも言われていない。しかし大地については、「無生物であり、生命がない」と言われている。水や火や空気については、無生物でもなく、生命がないものでもなく、動物でもないと言われている。また、成長するものには、話さないものと話すものがあると言われている。話さないものとは、たとえば植物であり、話すものは、たとえば動物である。つまりは、万物の創り手は主の中の主であり、すべてを英知でもってお創りになった。至高なるお方のお言葉にあるように、「あなたがたは、われが戯れにあなたがたを創ったとでも考えていたのか。またあなたがたは、われに帰されないと考えていたのか」[Q23:115]。

知れ。双角の所有者イスカンドルは東西をめぐり、各地に痕跡を残した。マグリブではイスカンドラーヤを、マールランナフルではサマルカンドを[建設し]、イラクを支配した。ルームの町を建て、そこに滞在した。イラクではマダーインを建設した。

#### [ヒンドの人々の分け方]

ヒンドの人々は大地を7つの地域(iqlīm)に分けた。すなわち、ヒンド、ヒジャーズ、シャーム、バビロン、アラブ、ルーム、そしてゴグとマゴグである。

144) カメレオン(hirbā')はペルシア語では「太陽を求めて回るもの(āftāb-gardak)」[「太陽を崇めるもの(āftāb-parast)」と呼ばれ、コウモリ(huffās)は「夜の翼(šab-parra)」や「夜盲(šab-kūr)」など夜にちなむ名をもつ。また食用となるキジ科のシャコ(kabk)は、その鳴き声が知られていないにもかかわらず大声で笑うと言われている。またサギ科の鳥であるサンカノゴイ(bū-timār)は、その悲しげな鳴き声から、別名「悲嘆にくれるもの(gam-hwurak)」と呼ばれている。この段落にあがる動物や鳥の性格については、本書第9部「鳥の章」や第10部「動物の章」でも一部触れられるが、アラビア語やペルシア語の動物寓話などの文学作品においてはよく使われる特徴である。

### 〔緯度による分け方〕

知れ。大地の円周は赤道上で360度である。1度は25ファルサングであり、1ファルサングは1万2千アラシュである。われわれはみな〔大地の〕北側の4分の1の部分におり、南側の部分は荒地である。北側の下半分もまた荒地である<sup>145)</sup>。われわれにはその地に関する情報はない。

〔大地の〕各部分は7つの地域に分けられている。各地域は3万8500ファルサングになる。地域の1つはアラブ人のもとに、1つはルームのもとに、1つはエチオピア人のもとに、1つはヒンドのもとに、1つはテュルクのもとに、1つは中国の人々のもとに、1つはゴグとマゴグのもとにある。

第1の地域は、サランディープまでの灼熱の土地である。住民は黒く、醜く、野獣のように裸で、長命である。その境域には竜がいる。この地域の長さは5000ファルサングであり、幅も同じである。

第2の地域は、サランディープからエチオピア、スインド、ザープリスターン (Zābulistān)<sup>146)</sup>までである。〔その中心はマッカである。〕そこの住民はそれほど醜くはない。この地域の長さと同幅は、第1の地域と同じくらいである。

(p.118) 第3の地域は、ソグドとジョルジャーノから中国、アデン、シャーム、ファールスまでである。〔中心はイスカンダリーヤである。〕その長さと同幅は〔上記の2地域と〕同様である。

第4の地域は、バビロンである。諸地域の真ん中であり、イフリーキヤとバルフとマルヴがある。〔中心はイスファハーンである。〕長さと同幅は〔上記地域と〕同様である。

第5の地域は、ルームとハザルとコンスタンティノーブルである。〔中心はサマルカンドである。〕長さと同幅は〔上記地域と〕同様である。

第6の地域は、フランク (ifranja) のものである。行いの悪い部族であり、彼らの言語は難しい。子供の頃に胸に焼印を押す。〔中心はバルダウ (Barda') である<sup>147)</sup>。〕

第7の地域は、テュルクである。彼らは木造の家をもっている。

世界の〔分割〕図は左のページに描かれているとおりである<sup>148)</sup>。

### 〔ファリードゥーンの分け方〕

さて、ファールス人の出身であり、諸王の中でも抜きんでたファリードゥーン (Farīdūn)<sup>149)</sup>

145) 当時の地図では南が上になるので、「大地の北側の下半分」とは北半球の高緯度地方を指す。

146) アフガニスタン東部のガズナとその周辺地域。古くこの地域はアラコシアという名で呼ばれていた。ザープリスターンという名称は7世紀のアルメニア語地理書に Zaplastan という形で現れ、7-8世紀の中国側史料には「漕矩吒」あるいは「謝颯」と書かれているものに相当するとされる [EI<sup>2</sup>: Zābul; 稲葉稜「七-八世紀ザープリスターンの三人の王」『西南アジア研究』35、1991年、39頁；桑山正進編『慧超往五天竺伝研究』京都大学人文科学研究所、1992年、133-141頁]。

147) フランクは一般的には(西)ヨーロッパを指し、それは本書でも同様である。またバルダウは、『世界の諸地域』や『諸都市辞典』などによれば、コーカサスの都市とされている [Hudūd al-'ālam, p.161; Yāqūt, Mu'jam al-buldān, vol.1, p.558]。ここでは緯度によって気候帯(地域)が分割されており、ヨーロッパとバルダウの両者は、緯度上は同じ気候帯に属すと判断されたのであろう。

148) 校訂テキスト(118頁)、サーデギー本(63頁)ともに図が載せられている。丸い図を7つの地域に水平分割し、上下に南極・北極の2つの地域が残る構図である。図の上(南側)の地域から訳出すると、「〔南極〕これは南極であり、暑さが支配的である。その住民については誰も知らない。(諸海。燃えているザンジュ。これは赤道である。第1の地域：中心はスイヤーフ(黒)(Siyāh)。第2の地域：中心はマッカ。第3の地域：中心はイスカンダリーヤ。第4の地域：中心はイスファハーン。第5の地域：中心はサマルカンド。第6の地域：中心はバルダウ。第7の地域：中心はテュルク。〔北極〕これほど北側は寒さが支配的であり、その住民については誰も知らない。』

149) イランの神話上(ビーシュダード朝)の王。アーファリードゥーン (Āfarīdūn) とも呼ばれる。1000年間統治した暴君ザッハークを倒し、イランの王となる。公正と平和を実現し、王国を3人の息子(イーラジュ、サルム、トゥール)に分封した [EI<sup>2</sup>: Farīdūn]。イーラジュには真ん中の「イーラーン」、サルムには西の「ルーム」、トゥールには東の「トゥーラーン」が与えられたとされる。

は、3人の息子に大地を分配した。テュルクと中国からなる東方の第1の区域は、トゥール (Tūr) に与えた。西の区域は (p. 119) ルームであり、サルム (Salm) に与えた。「イーラーンシャフル (Īrānšahr)」<sup>150)</sup> にあたる中央の区域は、イーラジュ (Īraj) に与えた。これは経度による分割である。その図は次のとおり<sup>151)</sup>。

### [ヌーフの分け方]

さて、預言者たちの長である預言者ヌーフ——彼に平安あれ——は、大地を緯度で分け、3人の息子に与えた。まず、南にある黒人たちの地域をハーム (ハム) (Hām) に与え、白人 [の地域] である北側の部分をヤーフェス (ヤペテ) (Yāfiṭ) に与えた。そして小麦色をした [人々のいる] 真ん中の部分をサム (セム) (Sām) に与えた。これが [その] 図である<sup>152)</sup>。

### <別の分け方>

タフムーラス (Ṭahmūrāt)<sup>153)</sup> は大地を7人の王たちの間で分けた。[すなわち] ホラーサーン、スイースターン (Sijistān)、ギーラーン (Jīlān)、タバリスターン、アゼルバイジャン、イラク、そしてアルメニアである。[この分け方は] 人の住む地域を丸く分割したものである。これがその図である<sup>154)</sup>。

### (p. 120) <世界の広さ>

世界の広さは [すでに] 計測されている。

[天の] 北極の高さは、ラッカ (Raḡqa)<sup>155)</sup> とタドゥムル (Tadmur)<sup>156)</sup> の町で測られたが、ラッカでは35度で、タドゥムルでは34度であった。[2つの町の間] 大地を測量すると27マイルであった。これら [の数値] に鑑みると、世界の広さは2万4000ファルサングとなる。1万2000ファルサングは黒人が所有し、8000 [ファルサング] はルームの人々が有し、3000ファルサングはファールスガ、1000ファルサングはアラブが所有する。

プトレマイオス (Baṭlimiūs) はハッラーン (Harrān)<sup>157)</sup> をより高いとみなし、高さを計測した。町々や山々 [の数値] を換算すると、1つ目から2つ目まで66マイルであり、天の円周を掛けると、2

150) 「イーラーンシャフル」という語の用例はサーサーン朝のシャープール1世の時代に作成された碑文に初出する。当時この語は「イラン人の地」を意味し、イスラーム時代に入ってから同様の意味で使用された。しかし11世紀以降、「トゥーラーン」との対概念という性格が強まり、「イーラーンシャフル」が指す地域はより西側に限定されるようになった [EI: Ērān, Ērānšahr]。

151) 校訂テキスト (119頁) およびサーデギー本 (63頁) の縦割りの図参照。「東: トゥールの王国」「イーラーンシャフル: イーラジュの王国」「西: サルムの王国」と区分けされている。

152) 校訂テキスト (119頁) およびサーデギー本 (64頁) の横割りの図参照。上から、「南: ハームの王国=黒」「イラク: サームの王国=アジャム」「北: ヤーフェスの王国=テュルク」となっている。

153) イランの伝説上の王朝であるピーシュダード朝の3代目の王。

154) 校訂テキスト (119頁) の図参照。図は、丸い円を中心に6つの円が取り囲む。真ん中の丸い円の中には、「イーラーンシャフルとイラクとバビロン」と記されている。その周囲の円には、上から時計回りに、「ヒンド、カンダハール、ムルターン、バルバル、タンジャ、マグリブ地方、スース」、「ルーム、ターズイヤーン、アラブ」、「シャーム、マグリブ」、「トゥルクスターン、ハザル」、「中国、チベット、バルガーフ、ハーンフー」となっている。なお、イランを中心にそのまわりを6つの大国 (kišwar) (インド、中国、テュルク、ルーム、アフリカ、アジア) が取り囲むという考え方がイランには古来ある [EI: Iktīm]。

155) シリア北部のジャズィーラ地方の主要都市。バリーフ川がユーフラテス川に注ぎ込む地点にあり、古来イラクとシリアを結ぶ要衝として栄える。

156) バルミラのこと。ヒムスから東に140キロメートル、ユーフラテス河中流域から西に240キロメートルのシリア砂漠の中にある。古くからキャラヴァンの中継地として栄えた [EI: Tadmur]。

157) 古代シリア北部 (現在のトルコ南東部) にあった都市で、ユーフラテス川に注ぎ込むバリーフ川の水源地。ラッカからは2日行程 [EI: Harrān]。

万 4000 ファルサングであった<sup>158)</sup>。

さて、われわれは世界の全景を描いてみよう。それによって東西南北の各地域が明らかとなるように。海や世界のかたちを、1つの椀のように目の前に思い浮かべるならば、場所や境域が同時にわかるだろう。至高なるアッラーのいわく、「万有の主、アッラーにこそ凡ての称賛あれ」[Q1:2]。その意味は、「この世界に住まうものたちに日々の糧をお与えになる創造主に感謝を捧げよ」ということである。

次のように言われている。1万8000の世界があり、1つは東から西まで[のこの世界である]。1万7000[の残りの世界]は、人がそこに至るすべはない<sup>159)</sup>。その大きさは神のみがご存じである。世界の図は次のページに描かれている。アッラーは最もよく知りたもう。世界のかたちはこのようになっている<sup>160)</sup>。

[次に]各地の特性について述べよう。

知れ。クタイバ・ブン・ムスリム (Qutayba b. Muslim)<sup>161)</sup> は、フィールーズ・ブン・ホスロウ (Fīrūz b. Kisrā)<sup>162)</sup> の娘シャー・アフアリード (Šāh Āfarīd)<sup>163)</sup> を捕らえたとき、彼女から1つの籠を奪い、その中から1冊の書を手に入れた。そこには次のように書かれていた。

「造形者たるアッラーの名において。クバード・ブン・フィールーズ (Qubād b. Fīrūz)<sup>164)</sup> は世界を比較し、次のように考えた。世界中で最も快適なところは、イラクとマダーインとシューシュとジュンディー・シャープール (Jundī Šāpūr)<sup>165)</sup> である。最も寒いところは、カーリーカラー (Qālīqalā)<sup>166)</sup> とホラズムとマルヴとハマダーンであり、積雪の多いところは、シャープール・ハースト (Šāpūr-ḥwāst)<sup>167)</sup>、ジョルジャー、レイ、ザンジャー (Zanjān)、バルダウである。飢饉はマイサーンとイスファハーンでおこり、客舎はホラーサーンとアルダビールとイスファハーンとシーラーズにある。恵みの地はアルメニアと (p.121) アゼルバイジャンとケルマーンであり、嫉妬の地はフルワーン (Hulwān)<sup>168)</sup> とハマダーンである。勇敢さの地はマールワランナフルとイス

158) ここで挙げられている数字は、マスウディーが引用しているプトレマイオスの説の数値に合致している。ただし、測量地については同書では触れられていない [al-Mas'ūdī, *Kitāb al-tanbīh*, pp.26-27]。

159) 単純計算では、残りの世界は1万7999となるが、著者は同じ表現を第1部でもしている (本訳注 (2)『イスラーム世界研究』第3巻1号、2009年、417頁、注42参照)。

160) 校訂テキスト (121頁) の図参照。

161) ウマイヤ朝のホラーサーン総督 (669-715年)。704/5年に、イラク総督ハッジャージュ・ブン・ユースフによってホラーサーン総督に任じられ、中央アジア征服を指揮した [岩波イスラーム辞典：クタイバ]。

162) サーサーン朝最後の王ヤズダゲルド3世の息子ペーローズ2世を指すか。

163) クタイバはサマルカンド征服時に捕らえた彼女をハッジャージュのもとに送り、ハッジャージュは彼女をカリフ・ワリードへの贈り物とした。彼女はのちに、ワリードの息子ヤズィード3世の母となったとされる [清水和裕「ヤズデギルドの娘たち——シャフルバーヌー伝承の形成と初期イスラーム世界」『東洋史研究』67/2、2008年、16-18頁]。

164) サーサーン朝11代君主クバード1世 (在位488-496、499-536年)。ヌーシラヴァーンの父。ゾロアスター教徒と協力し、国内の混乱の鎮圧を図り、6世紀のサーサーン朝の復興につながる改革を推し進めた [EP: Sāsānids]。

165) サーサーン朝の王シャープールが建設したイラン南西部にあった学術都市。イスラームにおける科学的・知的活動の始まりに影響を及ぼした文化都市であり、特に医学の分野において重要な役割を果たした [EP: Jundīshāpūr]。

166) 現在のトルコ東部にあるエルズルムのこと。415年にビザンツ皇帝テオドシウス2世によって築かれた。当初はテオドシウス2世の名にちなんでテオドシオポリスと呼ばれていた。カーリーカラーの名はアルメニア語の Qarin ないし Qarnoi Qalaq という呼称に由来する [EP: Erzurum]。

167) ロレスターンの都市。イスタフリーは、「住人のすべてはシーア派で、ほとんどがアラブである」と伝える [al-Iṣṭahrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p.201]。現在のイランのロレスターン州の州都であるホッラムアーバードだという説もある [EP: Luristān]。

168) フルワーンという町はイラクとカイロ南部の2ヶ所にある。ここで列挙されている地名との関連から判断する

ファハーンとハマダーンとフルワーンであり、水の美味しいところはティグリス、ユーフラテス、バルフ、サマルカンド、ハマダーンである。狡猾の地はレイとイスファハーンとハマダーンとアルメニアであり、気晴らしの地はケルマーンシャーとアルヴァンド山麓とパウワーン渓谷<sup>169)</sup>である。良質の果物の〔採れる〕地はマダーイン、シャープール、レイ、ニハーヴァンド、ハマダーンである。誠実さの地はホラーサーンであり、慈善の地はジュズジャー (Jūzjān)<sup>170)</sup>である。〕

(p.122) <逸話>

ヤフヤー・ブン・マフフーズ (Yahyā b. Maḥfūz)<sup>171)</sup> は言う。「至高なるアッラーは、知性を狡猾さとともに創造し、イラクに定めた。忍耐を冷酷さとともにシャームに定め、貧困を充足とともにヒジャーズに定めた。そして富裕を浅ましさとともにミスルに定めた。」

<逸話>

アブドゥッラー・ブン・サラーム (‘Abd Allāh b. Salām)<sup>172)</sup> は言う。「〔神は〕10の盗みを創造し、9つをコプト人 (qibt) に、1つを世界に定めた。10の能弁さを創造し、9つをアラブ人に、1つを世界に定めた。10の喜びを創造し、9つをヒンドの人々に、1つを世界に与えた。10の悲しみを創造し、9つをテュルク人に、1つを世界に与えた。10の勇気を創造し、これも9つをテュルク人に、1つを世界に与えた。」

知れ。たとえに挙げられる世界の良好な土地は次のとおりである<sup>173)</sup>。ダマスクスとガウタ (Ġawta)<sup>174)</sup>、ナスィービー (Naṣībīn) とヒルマース川 (Hirmās)<sup>175)</sup>、バスラ、ハマダーンの河川域と幸運なるアルヴァンド境域、サマルカンドとソグド、ケルマーンとパウワーン渓谷<sup>176)</sup>、ニーシャープールと AYAR<sup>177)</sup>、マダーインとティグリス、人目を惹くシャフラズール (Šahrazūr)<sup>178)</sup>、

---

と、イラクの町を指すのだろう [EI<sup>2</sup>: Hulwān; Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 2, pp. 290–294]。

169) ファールス地方の Nawbanjān にある木々の豊かな谷間。1340年に執筆されたペルシア語の地理書『心魂の歓喜 (Nuzhat al-qulūb)』によれば、この地はダマスクスのガウタ (Ġawta)、サマルカンド周辺のソグド渓谷、ファールス地方のシーダーン (Šīdān) の牧草地と並んで地上に存在する4つの楽園の1つに数えられる [Hamd Allāh Mustawfī, *Nuzhat al-qulūb*, Ed. G. Le Strange, Institute for the History of Arabic-Islamic Science, Frankfurt am Main, repr. 1993, pp. 128–129]。

170) 現在のアフガニスタン北西部、ムルガープからアム川にかけての地域を指す。ペルシア語ではグーズガーンとも呼ばれる [EI<sup>2</sup>: Djuzjān]。

171) この人物については確認できないが、知られた話のようである。

172) ムハンマドの時代にメディナにいたユダヤ人。イスラームに改宗したとされるが、その時期については諸説ある [EI<sup>2</sup>: ‘Abd Allāh b. Salām]。

173) この段落は、イブン・ホルダードベヤイブン・ファキーフが、「最良の土地」として挙げた説明に基づいていると考えられる。そこでは、「冬はバグダード、春はレイ、秋はハマダーン、夏はイスファハーン」という説に続けて、「○○と、そこにある△△」という組み合わせでいくつかの場所が挙げられている [Ibn Ḥurdābih, *Kitāb al-masālik*, pp. 171–172; Ibn Faqīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p. 227]。本書ではテキストにかなりの乱れがあるが、上述のアラビア語地理書等で補いつつ訳出する。

174) 前述の地上の4つの楽園の1つで、ダマスクスにあった。

175) ナスィービーは、古代のニシピス、現在のヌサイピンのこと。上メソポタミアのヒルマース川上流域にある。ヒルマース川はユーフラテス川の支流 [EI<sup>2</sup>: Naṣībīn; Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 5, p. 399; Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p. 95]。

176) 正しい組み合わせは、「ファールスとパウワーン渓谷」 [Ibn Ḥurdābih, *Kitāb al-masālik*, p. 172; Ibn Faqīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p. 227]。

177) この箇所は、上述のアラビア語地理書で述べられる「ジュンディー・シャープールと、そこにある良質の川 (anhār) (もしくは「木々 (ašjār)」「井戸 (ābār)」「水々 (ābān)」) の誤りと考えられる。もっとも当該箇所は、ニーシャープールの名前も挙がっている [Ibn Ḥurdābih, *Kitāb al-masālik*, p. 171; Ibn Faqīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p. 227]。

178) 西クルディスタンにある平地で、現在のイラク東部に位置する。



シューシュ、レイの河川域とスッルとサルバーン（Surr wa Sarbān）<sup>179)</sup>、イエメンとサヌアー（Ṣan‘ā）<sup>180)</sup>。

世界の「さまざまな」特徴としてはこの程度のことを述べておく。さて、[次の]章に移ろう。至高なるアッラーが望みたもうならば。

### <大地の創造について>

知れ。スナナの民は次のように考えている。創造主は大地を海のおぼくから創造し、山々を海の波から創造された。そして「水が」固まり、山となった。大地の本質は石であり、その後「石が」土となったのである。「もっとも」一部の人は、「大地の本質は土であり、[土から]石が生じた」と言う。なぜなら、(p.123)植物は石ではなく、土に生えるからである。

大地は丸く、自身の中の卵黄のように天の中にぶら下がっている。空気は大地を取り囲み、天は空気を取り囲む。

### <問答>

もし、「なぜ重い大地が下に落ちてこないのか」と問われたら、次のように答えよう。

大地のあらゆる方向に天があるからである。こちら側の大地が天に向かわないように、別の側の大地も天には向かわない。空に向かって石を投げると、大地に落ちる。同じように、大地の反対側で石を天に投げても、「石は」大地に落ちてくる。というのも、重いものは重いものを目指すからである。空っぽの水差しを口を密閉し、海の底に沈めるならば、手を離すと「水差しは」上にあがってくる。なぜか。その内部に空気があるからである。空気はみずからのもといた場所（markaz）に向かうとする。よって、もし水差しが壊れたならば、下に沈むだろう。

大地の背にあるこれらの山は、山の上にあるキビのようなものである。大地の背にあるこれらの海は、山の上にあるくぼみのようなものである。ゆえに、大地は山や海もろとも1つの丸い球であり、天がその周囲をまわっているのである。それは、創造主の命により、中空にぶら下がる。

一部の人は言う。「大地は球体ではない。これほど重く、これほど大きな物体が球であろうはずがない。どれだけ下に行っても大地には終わりがなく、どれだけ上に行っても空気には終わりがなく」と。その終わりや極みというものは創造主のみがご存じである。

またある者は言う。「大地は柱のように長方形であり、球形ではない。もし球形ならば、水はその上で定まることがないであろう。水が平らでないものの上に存在することは不可能である。もし水や大地が球形ならば、水は球体の天辺でとどまることはできない」と。

### [各地域の気候]

179) テキストでは、ŠBRH wa SRYAN となっており、写本間の異同もあるが、イブン・ホルダードベヤイブン・ファキーフに基づき、このように読む[Ibn Hurdāqbih, *Kitāb al-masālik*, p. 171; Ibn Faqīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p. 227]。スッル、サルバーンともに、レイ近郊の小村で、小川や木々のある快適な場所であった[Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 3, pp. 205–206, 211]。

180) サヌアーは現在のイエメンの首都。アラビア語地理書では、「良質な土地」の中にこの組み合わせは出てこない。

知れ。大地の広さやその大きさは、(p.124) 53億549万8570ファルサング<sup>181)</sup>である。大地はマクワウリのように線で2つに分かたれている。[すなわち] 南半分と北半分である。これら2つに分けられたうちの[さらにその] 半分に人が住んでおり、[残りの] 半分は水と雪で覆われている。人が住んでいるこの[四] 半部分は[さらに] 北と南に二分される。東方の町はバランスがとれている。なぜなら太陽が水を美味しくするからである。西方の町は、水が腐っているため、病が多い。南方の町では水が熱く、人々は貧弱な体型をしている。北方では水が美味しく、人々は壮健な体つきで、長寿である。なぜなら涼しい山岳地帯の町のように、[大地の] 内部に熱があるからである。

#### <問答>

もし、「マッカやアラブの地はたくさん山があるのに、なぜ暑いのか」と問われたら、「なぜなら起伏の激しい土地(hubūt)だからである」と答えよう。山は寒くなりやすいと同時に、暑くもなりやすい。

知れ。寒さや暑さは太陽からの遠近による。太陽が近いところでは、南方のように暑さが厳しくなる。太陽が遠いところでは、北方のように寒さが厳しい。これら2つの境域では、生きものはいない。未知の土地ははかり知れず、誰もそこに行くことはできず、生物はそこでは生き残らない。そのような未知の土地に生きものがいたら、サイヤー角獣(dāt al-qarn)のように変わった姿をしていよう。[かつて] この境域から動物の黄色い皮がもたらされたことがある。その皮には黒い円斑があり、それぞれの円斑の外側を赤い円斑が囲んでいた。そして緑の線が額から頭に伸び、首筋をとって尾の先まで伸びていた。

また、生きたまま人の手に落ちる別の変った生きものもいる。極暑であれ極寒であれ、そのような地域に人が行くことはできないが、その地の生きものについては情報がある。[たとえば] この時代、北の境域から1羽の鳥がもたらされた。それは「シャー・バズ(šāh bāz)」<sup>182)</sup>と呼ばれ、2つの三日月のような2本の角を持っていた。(p.125) さらにコヘスターンの王のもとに、白い嘴と赤い足をしたカラスが送られたことがある。これらはすべて珍しいことである。

大地の性質についてはこの程度で十分であろう。[次に] 私は山の性質について述べよう。至高なるアッラーが望みたまうならば。

## 第5章 山々の驚異とその性質について

至高なるアッラーのいわく、「かれは、そこに(山々を)どっしりと置いて大地を祝福なされ、御恵みを規定なされた」[Q41:10]。

知れ。世界には、シャームのルブナーン(Lubnān)[の山]、ティハーマ(Tihāma)のサラール(Sarāh)[の山]、サランディープのロフーン(Ruhūn)[の山]、アーモルとタバリストーンのダマーヴァンド(Dubāwand)[の山]、コヘスターンのアルヴァンド[の山]など、多くの山々がある<sup>183)</sup>。

181) 校訂テキストでは5,000,305,498,570ファルサングとなっている。しかし、10億から1000億の単位だけゼロになっているのは不自然であり、ミーノヴィー氏の訂正およびサーデギー本に従う。

182) 「王の鷹/鷹の王」を意味するペルシア語。王が鷹狩りに使用する白いタカを指すこともある[LN: Šāhbāz]。

183) ティハーマのサラール山をのぞき、すべての山についてそれぞれの項の中で後述される。ティハーマは、アラビア半島の紅海沿岸地域の中でもヒジャーズの南側の地域を指す。

知れ。山々は大地の飾りであり、大地の杭である。「われは大地を、広々としなかったか。また山々を、杭としたではないか」[Q78: 6-7] という至高なるお方のお言葉にあるように。[すなわち、ペルシア語では、神は] しもべたちに恵みをお与えになり、おっしゃった。「大地をおまえたちの安息の場とし、山々をその杭となした。[大地が] 動いたり揺れたりせず、おまえたちの家々が壊れることのないように。また、[さまざまな] 宝や水や鉱物を山に託した。」

[カーフの山について]

知れ。カーフの山は「緑の山 (Jabal al-aḥḍar)」と呼ばれる。「闇の世界」のほうから大地を取り囲んでおり、ほかの山々はその支脈である。

イスカンドルは「闇の世界」から外に出たとき、1つの山が輝いているのを見た。山の四方八方は「わからないほどであった」<sup>184)</sup>。[さらに] 1人の天使がその山に手を置いているのを見た。あたかも、動きだしたりしないように何かを見張っている者のようであった。[天使は] 額ずき、雷のような声で叫んでいた。「おお、力ある神よ、創造の時から終末のラッパが鳴る時まで、何事もあなたには隠されてはいない。被造物にお慈悲を！」

イスカンドルが彼のところにたどり着くと、[天使は] 言った。「おお、アードムの子よ、ここに来るとは、世界に飽き足りぬのか。おお、2つの角をもつ者 (dū al-qarnayn) よ！」

イスカンドルは (p.126) [そのように呼ばれて] 侮辱されているのだと思った。天使は言った。「世界の縁 (qarn) から世界の別の縁に行った者は、世界の両端を見たことになる。そのような者を『双角の所有者 (dū al-qarnayn)』と呼ぶのだ。」

イスカンドルは尋ねた。「これは何という山か？」

[天使は] 言った。「カーフの山だ。天はこの山の頂きにあり、ドームのように載っている。この山は『山々の母 (umm al-jibāl)』であり、すべての山がここに連なっている。私はこの山を任されたので見張っているのだ。さもなくば、世界は「この山の」ひと揺れで壊滅してしまうだろう。」

<アリフ (al-alif) の項>

「赤の山 (Jabal al-aḥmar)」は、マグリブの海の中にある赤い山である。それは青銅の町が建てられた場所で、誰もその山の頂きに登ったことはない。

<逸話>

ウマル・ブン・アブドゥルアズィーズ (‘Umar b. ‘Abd al-‘Azīz)<sup>185)</sup> の時代に、人々が彼にその山のことを説明した。ウマルはターリク (Tāriq)<sup>186)</sup> をマグリブに派遣した。ターリクはムーサー・ブン・ヌサイル (Mūsā b. Nuṣayr)<sup>187)</sup> のグラームであった。

[ウマルは] 言った。「山に着いたら、そのそばで牛を見るだろう。1体の偶像がその上に乗って

184) サーデギー本に従って訳す。底本では、「彼らは山の四方八方を見た」となっている。

185) ウマイヤ朝第8代君主(在位717-720年)。欧米や日本ではウマル2世ともいう。短い治世の間にアラブとマワーリーの身分の平等化や、税制の改革を試みた[[ウマル・イブン・アブドゥルアズィーズ]『岩波イスラーム辞典』]。

186) アンダルス征服軍の指揮官で、ベルベル人。ウマイヤ朝のイフリーキヤ総督ムーサーに仕え、タンジェに駐屯した軍の長であった。711年にイベリア半島遠征軍の指揮官に任命され、翌年に同地を征服した。イベリア半島と北アフリカを分かちジブラルタル海峡の名は、「ターリクの山 (Jabal al-Tāriq)」という呼び名に由来する[[ターリク・ブン・ジャード]『新イスラーム事典』、「ジブラルタル」『岩波イスラーム辞典』]。

187) Mūsā b. Nuṣayr b. ‘Abd al-Rahmān b. Zayd al-Laḥmī (640-716/7年)。ウマイヤ朝のアブドゥルマリク兄弟であるアブドゥルアズィーズによってイフリーキヤ総督に任じられ、マグリブからスペインまでを征服した[*EI*<sup>2</sup>: Mūsā b. Nuṣayr]。

いる。2つとも壊し、真鍮の町まで行け。」

彼が出発すると、テュルクたちの王がアンダルスで彼を見かけ、尋ねた。「どこへ向かっているのか？」

[ターリクは] 言った。「青銅の町へ。」

王は彼を援助し、ついに彼はその地に到達した。偶像を乗せた牛を見つけたが、[偶像の] 手には「我が後ろに出口はなし」と書かれていた。赤の山に着くと、そのふもとで1匹がラクダほどもある蟻と遭遇し、彼の軍の大半は食べられてしまった。彼は行き詰まり、引き返した。それ以上のことはわからなかった。

「アーサクの山 (Jabal-i Āsak)」は炎が噴き出している山である<sup>188)</sup>。昼間は煙が漂い、夜は炎が見える。おそらくは油田があり、火がついて、外に溢れ出る分が燃えるのだろう。

「ウフドの山 (Jabal-i Uhud)」はマディーナにあり<sup>189)</sup>、ハムザ・ブン・アブドゥルムッタリブ (Hamza b. ‘Abd al-Muṭṭalib)<sup>190)</sup> がそこで殉教した。預言者 [ムハンマド] (p. 127) ——彼に祝福あれ——は「ウフドは楽園の門の上にある」と言った。ラドゥワー (Raḍwā) とアシュアル (Aš‘ar) とアルジュ (‘Arj) の山はマッカとマディーナの間にある<sup>191)</sup>。

「アルヴァンドの山」はコヘスターンにある最も大きな山で、吉兆の山である。山裾は12ファルサングある。数千もの泉がそこから湧き出ている。ジャアファル・アル＝タイヤール (Ja‘far al-Tayyār)<sup>192)</sup> は、「アルヴァンドの山には、楽園の泉から流れでる泉がある」と言う。この山には同時に3つの季節がある。山頂には常に雪があり、冬である。山裾は常に春で、ふもとは夏である。1000の溪谷があり、それぞれの溪谷には木々や澄んだ水の泉が数えきれないほどにある。

#### <逸話>

私は、イスカンダリーヤ出身のある人から次のように聞いた。彼は1ヶ月間、それらの溪谷を旅していた。いわく、「私はシャームやルームから最果てのスース (Sūs al-aqṣā)<sup>193)</sup> まで巡り、高さ40ファルサングの木がある土地や、サフランに覆われた大地を見てきたが、アルヴァンドのような場所は見つけない。」

私は尋ねた。「サマルカンドのソグドやバウワーン溪谷は見つめたのか？」

彼は言った。「見たよ。だが、かの地の害虫や昆虫のことを話したら、君はうんざりするだろうよ。」

188) フーゼスターンにある山。イスタフリーも火を噴く山と述べる。『世界の諸境域』では Asak と表記されており、火を噴く山の中腹にある村の名前とされる [al-Iṣṭāḥrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 92; *Hudūd al-‘ālam*, p. 137]。

189) メディナ郊外にある山で、ムハンマド軍が敗北したウフドの戦い (625年か626年) の舞台となった。ウフドの山はハディースでたびたび言及される。ブハーリーは「これは我々が愛する山だ」というアブー・フマイド・サーイディーの伝承と「この山は我々を愛し、我々もこれを愛す」というアナス・ブン・マーリクの伝承を伝えている [ブハーリー 『ハディース——イスラーム伝承集成』 (牧野訳)、上巻 399 頁、下巻 341 頁]。

190) 預言者ムハンマドの父方の叔父 (625年没)。勇猛な戦士として知られる。バドルの戦いでは、多くの敵と一騎打ちを行い、翌年のウフドの戦いで戦死した [EI<sup>2</sup>: Hamza b. ‘Abd al-Muṭṭalib]。

191) このムハンマドの発言は現存のハディース集などからは確認されない。また最後の3つの山も、メッカとメディーナの間にある、という情報以上のものはない [Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 1, p. 198, vol. 3, p. 51, vol. 4, pp. 98–99]

192) ムハンマドの甥で、アリーの兄であるジャアファルのこと [EI<sup>2</sup>: Dja‘far b. Abī Tālib]。

193) 現在のモロッコ南部を指す [EI<sup>2</sup>: al-Sūs al-Aqṣā]。

「ウワールの山 (Jabal-i Uwāl)」はヒンドの海の中から突き出ている山で<sup>194)</sup>、その住民は黒い。彼らは我々を見ると笑う。彼らが笑う理由は誰も知らない。人は、丁子とナツメグの皮を求めてそこに行く。

「アトワーラーンの山 (Jabal-i Aṭwārān)」<sup>195)</sup>はマグリブにある山で、ラクダほどの大きさのサルがいる。そこには渦のような難所と樟脳の木がある。

「アマドの山 (Jabal-i Amad)」は裂け目のある山である<sup>196)</sup>。その裂け目に剣を差し込むと、剣が振動し、両手でも支えられない。その理由は創造主のみがご存じである。

「アシュクラーンの山 (Jabal-i Aškrān)」はイスファハーン地方の山である<sup>197)</sup>。この山には蛇がいる。(p. 128) 解毒剤のために、そこから毒蛇がもたらされる。この山には1つの穴があり、そこには「何匹かの」毒蛇がいる。ある人が冬にそこを訪れた。暖をとろうと、蒸気が噴き出している穴に両足を入れた。[すると]彼の両足は真っ黒になった。

<バー (al-bā') の項>

「ビスール (Biṣār)」<sup>198)</sup>はヒンド地方にある山で、そこには象のような竜がいる。それを見た者は誰であれ、一瞥するや否や死んでしまう。

「バールジャーフの山 (Jabal-i Bārjāḥ)」はサマルカンドにある高い山である<sup>199)</sup>。その周囲には1000の泉があり、水が西に向かって流れている。ここには、とくにキジなどの獲物がある。

「ビヒストゥーンの山 (Jabal-i Bihistūn)」<sup>200)</sup>は人を寄せつけない山で、一方が削られている。この境域では、これよりも高い山はアルヴァンドとサバラーン以外にはない。そのふもとからは泉が1つ湧き出しており、その上にはシャブディーズの姿が描かれている<sup>201)</sup>。ところで、一方が削られているのは、ホスロウの命令により、ファルハード (Farhād) がそこからもう一方へと道を切り拓こうとしたからである。これはつくり話であるが、驚くべきことである。

194) イスタフリーは、フェールスの海にある島と伝え、ヤーカートはバフラインの海にある島と伝える [al-Iṣṭahrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 107; Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 1, p. 274]。

195) 先行するアラビア語やペルシア語の地理書などからは確認できない地名である。

196) Āmad, Āmidとも綴られる。ティグリス・ユーフラテスの源流の山であり、現在のディヤルバクル地方に相当する [Hudūd al-'ālam, p. 47 (Minorsky comment, pp. 200–201)]。なお、イブン・ファキーフがこれと同様の逸話を伝えている [Ibn Faḳīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p. 67]。

197) イスファハーンの西方、ロレスタンとの境にある山 [Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 1, p. 199; Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p. 207]。

198) この山は、先行するアラビア語やペルシア語の地理書などからは確認できない。

199) 読みはサーデギー本に従う。イブン・ファキーフやイブン・ホルグードは、「(バールジャーフは) 大きな丘であり、その周りには1000の泉がある」と伝える [Ibn Faḳīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p. 327; Ibn Ḥurdādbih, *Kitāb al-masālik*, p. 28]。

200) 「ビーソトゥーン (Bīsūtūn)」とも呼ばれる。ケルマーンシャーからハマダーン街道を東に40キロメートル行ったところにある山。ホスロウの妾であったシーリーンへの横恋慕のために、ファルハードがこの山を掘った話は、ニザーミーの『ホスロウとシーリーン (*Husraw wa Šīrīn*)』をはじめ、ペルシア語世界では有名。

201) シャブディーズはホスロウ・バルヴィーズの駿馬の名。その浮き彫りは、ケルマーンシャー近郊の別の泉(ターケ・ポスターン)に施されており、ここでは場所の混同が見られる。ビーソトゥーンとターケ・ポスターンの壁画や伝承に関する時代ごとの認識の変遷については、守川知子「ロマンスからヒストリアへ——ビーソトゥーン碑文とイランにおける歴史認識」(『上智アジア学』25、2007年、1–48頁)参照。

「バルターイールの山 (Jabal-i Bartāyīl)」は大きな山で、ヒンドの海にある。この山では昼も夜も常に、杵太鼓とシンバルの音が聞こえるが<sup>202)</sup>、演奏者はまったく見えない。この海には3つの山があり、1つはいつも稲妻が閃いている。1つでは暴風が吹き、1つでは雨が降る。誰もその地に住むことはできない。

「バルバルの山 (Jabal-i Barbar)」は、その頂きに1本の塔がある山である。塔の先端には1つの穴があり、いつもそこから柱のように炎が燃え上がっている。トリポリ (Ṭarābulūs)<sup>203)</sup>にも同じようなものがある。

#### <ター (al-tā') の項>

「タンヌーマ (Tannūma)」<sup>204)</sup>はヒンドにある山で、そこには美味な水がある。ヒンドの人々は、「この水を飲んだ者は長生きする。だが、犬のような赤い動物がいて、この水のまわりをうろつき、人間を喰らう」と言う。

(p.129)「チベットにある山」は、水から聳え立っている山である。火をつけると、水がもり上がり、[火を] 消してしまう。チベットの王がこの境域にやって来て、大量の薪と石油と硫黄を燃やした。[すると] 水が出てきて、それを消した。王は驚いて、言った。「これからは、どれほど不可思議なことを言われても信じよう。1つのことは、1000のことの証左となるのだから。」

#### <ジーム (al-jīm) の項>

「ジューディー (Jūdī)」は、小さな山である。ヌーフの船はここにたどり着いた<sup>205)</sup>。

1人の天使が触れ回った。「船は、ある山に降り立つだろう。大洪水 (ṭūfān) が起きても、そこは安全である。」

高き山々は口々に言った。「私の上に降りてくるだろう。」

ジューディーは言った。「私は [高い] 山々の中にいる。それなのに、船は私のところに来るだろうか?」

創造主がお命じになり、[船は] ジューディーの上にたどり着いた。

「ジャリールの山 (Jabal-i Jalīl)」はヒムス (Ḥimṣ)<sup>206)</sup>の境域にある山で、ヌーフ——彼に平安あれ——はそこに家を建てた<sup>207)</sup>。大洪水の水は [ヌーフの家を] 流し去った。大洪水はこの山から

202) イブン・ホルダードは、24時間太鼓の音が聞こえるヒンドの海にある島として伝える [Ibn Ḥurdāqbih, *Kitāb al-masālik*, p.68]。

203) トリポリはレバノンとリビアの2ヶ所にある。16世紀以降は区別のため、それぞれに「シリアの」と「西の」と書き加えられるようになった。本書の記述からは特定しづらいが、「炎が燃え上がっている塔」が灯台だとすると、リビアのトリポリである可能性が高い [E<sup>1</sup>: Ṭarābulūs al-Ḥarb]。

204) 先行するアラビア語やペルシア語の地理書などからは確認できなかった。

205) メソポタミア上流域にある山。[クルアーン]に次のようにある。「御言葉があった。『大地よ、水を飲み込め。天よ、(雨を)降らすことを止めなさい。』水は引いて、事態は収まり、(舟は)ジューディー山の上に乗り上げた」[Q11:44]。イスタフリーによると、ヌーフたちがこの山に築いた集落は、彼らの人数にちなんで「80の村 (qariyat ṭamānīn)」と名づけられた [al-Isṭahṛī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p.78; Ibn Ḥurdāqbih, *Kitāb al-masālik*, p.245]。

206) オロンテス川東岸に位置するシリアの町。ダマスクス=アレppo間の交通路上の要所であり、紀元前より栄える [E<sup>1</sup>: Ḥimṣ]。

207) ヤークートは、ヌーフの家がこの山にあったとする説をイブン・ファキーフのものとして伝えているが、後者の

始まった。

<ハー (al-ḥāʾ) の項>

「ハーリス (Hārīt)」と「フワイリス (Ḥuwayrit)」は、アルメニアにある2つの高い山である<sup>208)</sup>。そこにはアジャムの王たちの墓がある。クバード大王 (Qubād al-akbar) はアポロニウス (Balīnās)<sup>209)</sup> に命じた。「そこに人が行かぬよう、まじないをかけよ。」

[アポロニウスは] そのようにしたので、誰もそこに行くことはできない。

「動く山 (Jabal al-jārī)」はザンジバルの海にある山である。この山の幅は4ファルサングで、木々が生えている。春になると [山が] 動き、4ファルサング進み、ある島の近くに来る。その島には人間とたくさんの鳥がいる。[山と島が] 合わさると、[人々は] 果実や薪をこの山で集め、獲物を獲り、島に運ぶ。ティール月<sup>210)</sup> が来ると、山は帰って行き、本来の場所に戻る。

<逸話>

次のように言われている。この山が帰る時期に、1人の男が薪を集めていた。集め終わったときには、山は戻ってしまっていた。男はそこに取り残され、死んだ。

この話は大変珍しい。

また、次のように言われている。(p.130) 「これは山ではなく、移動しているのはカニなのだ」と。創造主は、望まれるすべてのことをなされる全能のお方である。

「鉄の山 (Jabal al-ḥadīd)」はヒンド地方にある山で、そこからは鉄が溶け出している。鉄は火のように赤く、手に入れるのが難しい。[この鉄でつくられた剣で] 人を傷つけても、血が出ない。まるで、焼印を押したかのようになる。[この] 剣で石を切り出せるほどである。

<ダール (al-dāl) の項>

「ダマーヴァンド (Dubāwand)」は、レイの境域にある屹然たる山である<sup>211)</sup>。その頂上から雪が消えることはない。この山には何も生えておらず、動物も暮らせない。水がないために、植物が生えないのである。その頂きは100ファルサング先からでも見える。ふもとでは不快な水が流れ出て

地理書にはそれらしい記述は見られず、この山の名前も現れない [Yāqūt, *Muʿjam al-buldān*, vol. 2, pp. 157–158]。ほかの地理書にもこのような記述はみられないが、ただイブン・ホルダードべは、ヒムス＝ダマスカス間の道中にある山として触れている [Ibn Ḥurdāqbih, *Kitāb al-masālik*, p. 76]。ここでは「ジャリール山」という固有名詞ではなく、「高い山 (jabal-i-jālī)」と考えたほうがよいかもかもしれない。

208) イスタフリーは、アルメニアのアララト山地に、「ハーリス」と「フワイリス (小ハーリス)」と呼ばれる大小の山があると伝える [al-Iṣṭahṛī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 191]。

209) ティアナのアポロニウス (1世紀頃?) のこと。経歴には不明な点が多いが、まじない (ṭilasm) に関する彼の著作はアラビア語に訳され、よく知られていた [EP: Balīnūs; Ibn al-Nadīm, *The Fihrist*, Ed. and Trans. B. Dodge, Columbia University Press, 1970, p. 733]。クバード大王とルームのまじない師バリーナースという組み合わせは、イブン・ファキーフの地理書でも見られる [Ibn Faqīh, *Kitāb al-buldān*, pp. 214, 240]。なお、後出の本書第3部の第6章 (石と鉱物) で指輪の石について述べられている部分は、このバリーナース (アポロニウス) の著作に由来するものであろう。

210) ティール月はイラン太陽暦の第4月で、夏至から7月21日ごろまでにあたる。

211) 中東の最高峰の山 (標高5610メートル) で、イランのアルボルズ山系にある。休火山であり、ふもとには温泉がある。以下に見られるようにイラン古来の伝説が多く伝えられる場所である。なお、本書では主に“Dubāwand” (ドゥバーヴァンド) という表記が用いられている。

いる。そこではいつも風が吹いている。

<逸話>

次のように言われている。

ザッハークは暴君で、絶えず食事として人間の肉を蛇に与えていた。蛇は彼の肩から生えていて、人の肉を喰らった。創造主は、アーファリードゥーンに彼を討たせた。[アーファリードゥーンは]彼を捕らえ、イスファハーンの入り口にあった山に鎖でつないだ。ザッハークは魔法でこの山を引っぱり、運んでいった。アーファリードゥーンは彼のあとを追い、ダマーヴァンドの山で彼を捕らえ、その山の穴の中に監禁した。そして、この穴[の見張り]をアルミヤーイール(Armiyāyīl)<sup>212)</sup>に任せ、毎日2人の人間の脳みそを彼に与えるよう命じた。

時が過ぎ、アルミヤーイールは思い悩んだ。[そこで]毎日2頭の羊の脳みそを彼に与え、捕虜たちを[毎日2人ずつ]解放した。まじないでザッハークの胃が[羊でも]満たされるよう、人に頼んだのである。

30年が過ぎ、捕虜たちはすっかり解放された。アーファリードゥーンは賞賛し、アルミヤーイールに[賜衣と]王冠を与え、その地方を彼に分与した。そして、彼に「マスマガーン(Mašmagān)」<sup>213)</sup>というラカブを与えた。今でもマスマガーン家の民がいる。

(p.131) ザッハークを投獄した日は、メフル月<sup>214)</sup>の半ばであった。その[日]を「メフラガーン(mihragān)」と呼んでいる<sup>215)</sup>。ザッハークを殺したアーファリードゥーンの[山の]頂きには、9本の槍がある、と言われている。アッラーは最もよく知りたもう。

この話はきわめて珍しいが、多くの書物で語られているのを私は見た。

<ラー(al-rā')の項>

「ロフーンの山」は、ヒンドゥスターンにある有名な山であり、山頂は雲に隠れている<sup>216)</sup>。世界中でこの山よりも高い山はなく、地上からも海上からもこの山を見ることができる。この山には、アダム——彼に平安あれ——の片足の跡があり、足跡1つが80アラシュにもなる。毎昼夜、雲も雷鳴もないにもかかわらず、そこでは稲妻が光る。この稲妻は、山上でルビーが輝いているのである。いついかなるときもその山に行くことはできない。毎日雨が降り、アダムの足跡の埃を洗い流している。そうして大水が生じ、ルビーの破片がふもとへと流され、海に注ぎ込む。潜水夫は潜ってその破片を探ってくる。

212) 本書に先立つ1051-52年ごろに書かれた『情報の飾り(Zayn al-ahbār)』では、ザッハークの宰相であったアルミヤーイール(Armiyāyīl)という人物は、蛇の生贄にされる2人のうちの1人は殺したが、もう1人は解放し、ダマーヴァンドの山に隠し続けるとされる。そのためアーファリードゥーンに賞賛され、ダマーヴァンド地方を分与された[Abū Sa'īd Gardīzī, Zayn al-ahbār, Ed. R. Malik, Anjuman-i Ājtār wa Mafāhīr-i Farhangī, Tehran, 1384s., p.354]。

213) 「偉大なるマギたち」の意とされる。

214) イラン太陽暦の第7月。秋分の日に始まる。

215) 秋に祝われるメフラガーンは、春分の日ノウルーズとならび、古来イランの主要な祭日であった。祭りの名称(および「メフル」という月の名称)は太陽神ミトラに関連づけられている。アーファリードゥーンがザッハークを倒したことに祭りの起源を求める説は、イランの民間伝承で一般的である[*EI<sup>2</sup>: Mihragān*]。

216) 校訂テキストでは、ZHWN(項目のタイトルも同様に「ザーの項」とある)となっているが、「ロフーン(ruhūn)」と読む。『中国とインドの諸情報』にはサランディーブに関して次のような記述がある。「その地にはクルフーン>と呼ばれる山があり、[神の創造した最初の人間]アダム(アダム)——アダムに平安あれ!——が[地上に]降り立ったのは、他ならぬその山である。そしてアダムの片足[の跡]は石に深く入り込んだ状態で、この山の頂上の岩盤に残されている。(中略)この山の周囲には、宝石の鉱山、[宝石には、例えば]ルビー、トパーズ、青玉(サファイア) [など]がある」[『中国とインドの諸情報』(家島訳注)、第1巻27頁]。現在その場所は、Sripada(Adam's Peak)と呼ばれ、仏教徒は仏陀の、ヒンドゥー教徒はシヴァ神の、キリスト教徒とムスリムはアダムの足跡があると、それぞれ信じている聖地である。



<スイーン (al-sīn) の項>

「スマイラの歯 (Sinn-i Sumayra)<sup>217)</sup> はコヘスターンにある山で、驚くような絵や美しい文様がそこに描かれている。それを命じたのは、ホスロウ・パルヴィーズ (Kisrā Abarwīz)<sup>218)</sup> である。

「スインジャールの山 (Jabal-i Sinjār)」は吉兆の山であり、モースルの境域にある。ヌーフ——彼に平安あれ——の船はこの山にたどり着いたと言われている<sup>219)</sup>。ヌーフは「大洪水の」水が減ったことを知って喜び、この山で「神に」祈念した。ヌーフ——彼に平安あれ——の祈念の恩寵により、「この山は」いつも恵みに満ちている。

「サバラーンの山 (Jabal-i Sabalān)」はアルダビールにある大きな山であり、いつも雪が積もっている。荒れ果てており、人が住めるような状況ではない。「そこにはいかなる益もない」と言う者もいる。

「サンジュの山 (Jabal-i Sanj)<sup>220)</sup> はイエメンにある山で、山には裂け目がある。その裂け目に入って出てきた者は、合法な子供である。もし私生子であれば外に出てくることはできず、亀裂はその者の前で閉じてしまう。

「サルマーとアジャーの山 (Jabal-i Salmā wa Ajā)」は、アラブにある2つの山である<sup>221)</sup>。「サルマー」という名の女と、(p. 132)「アジャー」という名の男がいた。彼らは互いに愛しあっており、ある女の家で密会を重ねていた。その女の名は「アウジャー (‘Awjā)」と言った。[ある日] 彼らのことが露見し、彼らはこの2つの山に逃げた。人々は彼らのあとを追い、それぞれを山上で殺した。[このため、山の] 一方は「サルマー」、もう一方は「アジャー」、[そして、これらの山の向かいにある丘は]「アウジャー」と名づけられた。

<シーン (al-sīn) の項>

「シャアラーンとカンディール (Ša‘rān wa Qandīl)<sup>222)</sup> は2つの山であり、それらを「シールー

217) テキストでは、SN wa SHRM となっているが、このように読む [Ibn Ḥurdābih, *Kitāb al-masālik*, p. 119]。この山にある彫刻は、アブー・ドゥラフが触れている [アブー・ドゥラフ『イラン旅行記』(イスラーム地理書・旅行記研究会訳)、23頁]。

218) サーサーン朝の末期の君主ホスロウ2世(在位591-628年)。サーサーン朝歴代の偉大な王の最後とされる人物。パルヴィーズは「勝利を与えられた人」という意味。アラビア語では「キスラー・アバルウィーズ」という表記が一般的で、本書でもそのように記されている。その治世は、ビザンツ帝国との激しい戦いの繰り返しであった。602年にはヒーラのラフム朝ヌウマーン・ブン・ムンズイルを廃位に追い込み、ラフム朝を滅亡させた。しかし、そのためにアラビア半島の遊牧勢力を抑える媒介がなくなり、以降帝国の西の境界であるメソポタミアではアラブによる襲来が頻発した。愛妾シーリーンとの恋愛は『ホスロウとシーリーン』など文学作品の題材ともなり、アダブ(礼節)文学や君主鑑文学では、彼の宮廷の豪華さと贅沢さがしばしば取り上げられている [EI<sup>2</sup>: Parwīz, *Khusraw II*]。

219) スインジャールはイラク西北部のシリア国境に近い町。ヌーフの方舟とこの山を関連づける記述は、『諸都市辞典』参照 [Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 3, p. 262]。

220) 先行するアラビア語やペルシア語の地理書からはこの山名は確認できない。

221) 「サルマー」と「アジャー」は、あわせて「タイイ (Ṭayy) の2つの山」と呼ばれた [Ibn Faqīh, *Muḥtasar kitāb al-buldān*, p. 92]。本文で述べられている「アウジャー」も登場する逸話は、『諸都市辞典』に見られる [Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 1, pp. 94-95, vol. 4, p. 167]。

222) アラビア語の地理書の記述からは、シャアラーンの山の別名がカンディールであるとも読めるが、その他の内容については本文とほぼ同様 [Ibn Faqīh, *Muḥtasar kitāb al-buldān*, pp. 131-132; Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 3, p. 349]。

エ<sup>223)</sup>の玉座 (taḥt-i Šīrūya)」と呼んでいる。モースルにあり、人が住んでいる。この山には泉や果実があり、鳥がいる。

<サード (al-šād) の項>

「スィーラ (Šīra)」は、アデンのサヌアーにある山である。ラマダーンの月が確認されたときには、スィーラの山頂で火を灯す。その後は「マフラク (Maḥlāq) の山」で、そして「ズィー・マカリブ (Dī Makārib) の山」で、そして「クラーブ (Qurāb) の山」で [火を灯す。] 10日かかる 100 ファルサングの距離に、瞬間に報せが届く<sup>224)</sup>。

「[中国の諸門 (Abwāb al-Šīn) の] 山」<sup>225)</sup> は中国の海にある山で、海中から突き出ており、誰もそこへ行くことはできない。[だがかつて]ある者が策を練り、非常な努力でもってその山に降り立った。そこには大きな城があり、果樹園や高いドームがあった。彼はそのドームに行き、大きな2つの山を目にした。山の上まで登ろうと努めたのだが、行くことはできなかった。その山を「中国の諸門の山」と呼んでいる。

<ター (al-tā') の項>

「シナイの山 (Tūr-i Sīnā)」はミスルの境域にある山で、ティー沙漠 (Tīh) とクルズムの間にある<sup>226)</sup>。この山からはファラオのガラスが採れる。偉大で、吉兆で、栄えた山である。創造主はムーサーに、この山でトラーを与えた。そしてこの山の位置を移動させ、イスラーイール (イスラエル) の子孫に与えた。そのため、彼らは帰依したのである。また、神に跪拝した最初の山はシナイの山だと言われている。

この山には 6600 の礎石があり、山頂にはシナゴークがある。(p. 133) 「ムーサーのシナゴーク」と呼ばれており、大理石の柱で造られ、青銅や鉄の扉が架けられている。屋根はモミの木できており、その上には鉛板が敷かれている。誰もそこで眠ることはできない。というのも、追い出されてしまうからである。この山の周囲には 6000 の修道院がある。ミスルからかの地の税収がもたらされる。今日、この地には 100 人ほどの修道僧がおり、栄えている。崇高な場所であるため、各地から [人々が] やって来ては、そこで祈願や嘆願をする。これがその図である [図]。

「タマーの山 (Jabal-i Tāmā)」<sup>227)</sup> はハドラマウトにある大きな山である。この山の頂上には 1 本の剣があるが、誰もその剣をその場から引き抜くことはできない。その剣には銘が刻まれているが、誰もそれを読むことはできない。その剣を抜こうとした者には、あらゆる方向からその者に向かって石が降りかかってくる。手を触れずにいると、石は降ってこない。アッラーは最もよく知れたまう。まじないなのか、あるいはディーヴの隠し財宝なのか。とても稀有な話である。

223) シールーエは、ホスロウ・パルヴィーズの息子のクバード 2 世の称号である。628 年に即位したが、わずか 6 ヶ月で死去した [LN: Šīrūya]。

224) ここに登場する山名の一部は地理書に散見されるが、まとめて触れたものはない [Ibn Ḥurdāqbih, *Kitāb al-masālik*, p. 139; Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 4, p. 314]。

225) テキストでは、項目名としては山の名前が現れないが、この項の最末尾から補う。南シナ海の南沙諸島に比定されている [『中国とインドの諸情報』(家島訳注)、第 1 巻 40、144 頁]。

226) モーセ (ムーサー) が十戒を授けられた山。

227) 先行する地理書からは確認できない。

(p. 134)「鳥たちの山 (Jabal al-tuyūr)」はルームの町にある山で、山上には小さな穴の開いたドームがある<sup>228)</sup>。鳥たちには祭りがあり、祭りの日には何百万もの鳥が集い、頭をその穴に入れては外に引き出す。そして1羽が頭を中に入れ、羽を羽ばたかせ啼き声をあげると、ほかの鳥たちは逃げ出すのである。その日のことを、「棕櫚の主日 (ša'ānīn)」<sup>229)</sup>と呼んでいる。私はこの話を別の書物で読んだ。この鳥は「ブーキーン (BWQYN)」と呼ばれ、この山も「ブーキーンの山」と呼ばれている。

「タバルーナーイの山 (Jabal-i Ṭabarūnāy)」<sup>230)</sup>はヒンドの海にある山で、その周囲を3000の橋が取り囲んでおり、山の四方八方から水がそこを伝ってくる。この山の近くには3370の山があり、それらからは紅や碧のルビーが産出する。ヒンドゥスターンの驚異とはまさにこのことであり、3000もの川が1つの山から流れ出るという話はほかにはない。

#### <アイン (al-'ayn) の項>

「メノウとクサース ('aqīq wa Qusās)」<sup>231)</sup>はイエメンにある2つの山で、そこからはメノウが採れる。かけらであっても、それぞれは20マン以上の重さがある。それを割って太陽にさらし、ラクダの糞で釜を熱し、中に入れて火が「直接」当たらないようにする。焼き上がると、[指輪用の]石ができあがる。我らの預言者——彼にアッラーの祝福あれ——は、おっしやっている。「メノウの指輪をはめよ。そうすれば心配事が心から取り除かれよう」と。

#### <ファー (al-fā') の項>

「木炭の山 (Jabal al-fahm)」は黒い山である。そこから石を取り出し、薪のように燃やす。3ハルヴァール<sup>232)</sup>を1ディルハムで売る。燃え尽きてしまうと、その灰で衣服を洗う。[すると衣服は]白くなる。この話の信憑性については保留する。

「ファンスールの山 (Jabal-i Fanṣūrī)」は樟脳が採れる山であり、ヒンドの海にある<sup>233)</sup>。そこにはある生きものが暮らしているが、人は誰も行きつくことはできず、その生きものの叫び声で命あるものは「みな」死んでしまう。その地方にはある魚がいるが、この魚を獲り、水から引き上げると、即座に石になる。また、その山の周囲には (p. 135) ある部族が暮らしているが、鼻に穴を開け、鉄製の輪をはめている。この山にはジャクダンやナツメグがある。

228) 『諸都市辞典』に「鳥の山 (Jabal al-tayr)」としてほぼ同様の記述があり、エジプトでは非常によく語られる話とされる [Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 2, pp. 102–103]。ただし、段落最後の鳥の名称については触れられていない。

229) 「棕櫚の日曜日」はキリスト教の祭日で、復活祭直前の日曜日を指す。この日、イエスは過ぎ越しの祭りのためにイェルサレムに入り、沿道の人々は棕櫚を敷いてイエスを出迎えたことからこの名がついた。

230) 校訂テキスト、サーデギー本ともに TYRWNAV となっているが、『世界の諸境域』で、ヒンドの海に Ṭabarnā という鳥があるとされていることから、それにあわせて読む。Minorsky はセイロン鳥の可能性を示唆する [Ḥudūd al-'ālam, p. 19 (Minorsky comment, p. 235)]。

231) テキストは「メノウとキヤース (Qiyās)」となっているが、イエメンにあるメノウの鉱山の名として「クサース」があることから、ここではそれにあわせて読む [Ibn Faqīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p. 36; Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 4, pp. 92–93]。

232) 重さの単位。時代・地域によって大きく異なるが、14世紀半ばのイランで、1ハルヴァールは約288キログラム。

233) イブン・ファキーフや『世界の諸境域』も、樟脳を産する場所として伝える。スマトラ島西岸部の港町であり、現在の Barus の南方に位置すると考えられている [Ibn Faqīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p. 16; Ḥudūd al-'ālam, pp. 64–65 (Minorsky comment, pp. 87, 240–241)]。

<カーフ (al-qāf) の項>

「キラールの山 (Kūh-i Qīlāl)」はルームの海の中にある。[かつては] 荒廃していたが、人が住めるようにされ、フランクたちとの緩衝地帯とされた<sup>234)</sup>。もし、このキラールの山がなければ、イスラームの民はフランクによって苦しめられていたであろう。

「カブクの山 (Jabal-i Qabq)」は、アルメニアにある長く連なる山である。その長さは500ファルサングにおよび、ルームの地からハザルやアッラーンにまで続いている。そこにはさまざまな部族が住んでいる。それを「アルジュの山 (Jabal al-'Arj)」と呼んでいる<sup>235)</sup>。

「カーフの山 (Kūh-i Qāf)」は、すでに説明したように<sup>236)</sup>、世界を取り囲んでいる。

創造主は山々を大地を固定する楔とされ、宝石の鉱床とされた。

[逸話]

次のように言われている。イスカンドルは、1つは金〔の詰まった〕塊ともう1つは銀〔の詰まった〕塊を持っており、それらは彼と一緒に〔みずから〕移動していた。それは彼のなした奇蹟であった。アリストテレス師は彼に次のような手紙を書いた。「伝え聞いたところでは、あなたと一緒に金と銀の2つの塊が移動しているようだが、それは困難な事態を引き起こす。創造主がなされたように、銀と金を宝物庫におさめられよ。」

「イスカンドルは」言った。「それ(宝物庫)はどこにあるのか?」

「アリストテレスは」言った。「山々のことだ。」

イスカンドルはすべての財物を山々に隠した。

カーフの山は碧のエメラルドでできている、と言われている。500ファルサングの広さがあり、そのまわりは水が取り巻いている。太陽がこの山にさしかかると、山〔の碧〕が天に反射し、ラピスラズリ色に映る。天の色は〔もともと〕青いのではない。

<カーフ (al-kāf) の項>

「キャブダーン (Kabūdān)」はアルメニアにある山である<sup>237)</sup>。海中から突き出ている。そこにはきらきらした塩があり、亜鉛のように光沢がある。苦い水の泉があり、〔その水を〕水銀に注ぐと、石になる。また、そこでは白い石が採れ、それを鉛と一緒に溶かすと、白銀ほどに〔真っ白な〕錫

234) イスタフリーは、ムスリムが支配し、フランクとの間にある山として触れている。『世界の諸境域』でも触れられ、Minorsky は、この山をフランス南部のモール山塊に比定する説を支持する [al-Istāḥrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 71; *Hudūd al-'ālam*, pp. 22-23 (Minorsky comment, pp. 191-192)]。

235) カブクはコーカサス山脈のことを指すとされる [EP: al-Kabk; *Hudūd al-'ālam*, Minorsky comment, p. 201; Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p. 181]。一方、アルジュはメッカとメディナの間にある山である。この山がカブクの山の頂で触れているのは、両者がシリア、レバノンを経て連なっているというイブン・ファキーフの記述に拠るものであろう。カブクの山の長さを500ファルサングとする説明も一致している [Ibn Faḳīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p. 295]。

236) 本章の冒頭および本訳注(2)、412頁、注27参照。

237) イラン西北部にあるウルミエ湖の島。語源については Minorsky の解説参照 [Hudūd al-'ālam, Minorsky comment, pp. 192-193]。アブー・ドゥラフの旅行記には、「ウルミヤには又、塩湖があり……湖中に〔突き出た〕山があり、カブーザン Kabūdān と言う。……亜鉛 (tūtiyā) に似た精塩 (milh majlūw) を産する。……幾つかの泉は湖に塩分を含む酸っぱい水と塩を流し込む。その水は水銀に注がれると、直ちにそれを粉々にし、乾いた石を留める。そこには柔らかい白石があり、溶解すると鉛を漂白する。やがて鉛は錫 (qal'i) の白さと等しいまでになり銀色に近くなる」という記述がある [アブー・ドゥラフ『イラン旅行記』(イスラーム地理書・旅行記研究会訳)、13-14頁]。

ができる。

「クサイルの山 (Jabal-i Kusayr)」<sup>238)</sup> はハドラマウトにある山で、そこからは薬と乳香がもたらされる。その山とオマーンの海の間は300ファルサングである。

(p.136) <ラーム (al-lām) の項>

「ルッカームの山 (Jabal-i Lukkām)」はシャームにある山で、200ファルサングにわたってルームまで延びている<sup>239)</sup>。さらに、「感染した泉 (‘Ayn al-wabiya)」<sup>240)</sup>へ至り、そこから「バフラー (Bahrā) とタヌーフ (Tanūh) の山」に連なり、ヒムスにまで至る。そこからは「ルブナーン (レバノン) の山 (Kūh-i Lubnān)」となり、クルズムの海まで延びていく。この山には隠者たちが暮らしており、聖なる廟がある。

<ミーム (al-mīm) の項>

「ムカッタムの山 (Jabal-i Muqattam)」はミスルにある崇高な山であり、多くの山々と連なっている<sup>241)</sup>。

<逸話>

ある人がミスルによく行っていた。カアブ・アル＝アフバルが言った。「ムカッタムの土をいくらか私に送ってくれ。」

その人物は彼に袋いっぱい土を送った。[カアブは] この世を去る間際、恩寵を授かろうと、その土を彼の墓にまくよう遺言した。

[逸話]

ムカウキス王 (Malik-i Muqawqis)<sup>242)</sup> は、アムル・ブン・アル＝アースに対して求めた。「純金7万ディーナールで、ムカッタムの山を私に売ってくれ。」

アムル・ブン・アル＝アースは [カリフの] ウマル・ブン・ハッターブに手紙を書いた。ウマルは返答した。「水もなく、耕地もないような山を、どうしてこれほどまでに高い金額で買おうとするのか？」

[アムルは] 答えた。「もろもろの書物には、その山には楽園の緑地がある、と書かれています。」

238) 校訂テキストでは KMSYWT だが、サーデギー本の表記に従う。「クサイルとウワイル (Kusayr wa ‘Uwayr)」と対で挙げられることが多い [Ibn Ḥurdābih, *Kitāb al-masālik*, p. 60; Ibn Faqīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p. 11; Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 4, p. 461]。

239) シリア北部の連峰の名称。現在のトロス山脈に近い [EI<sup>2</sup>: al-Lukkām]。この項目で述べられている、ルッカーム＝バフラー＝タヌーフという山々の連なりは、イスタフリーの記述と合致する [al-Iṣṭahrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, p. 56]。『世界の諸境域』では、ダマスカスからヒムスまでを「ルブナーンの山」と呼び、ヒムスからバグラース (Bagrās) までを「バフラー (Bahrā) とタヌーフ (Tanūh) の山」と呼び、バグラースの境域からサリールの端までを「ルッカーム」と呼ぶ、とされている [Hudūd al-‘ālam, pp. 34–35]。ちなみに、そこからさらにアッラーンまで行くと、先の「カブクの山」と呼ばれると同書は伝える。

240) 写本によっては「町の泉 (‘Ayn al-madīna)」や「ラビーナの泉 (‘Ayn al-Rabīna)」ともあり、サーデギー本は「町の泉」を採るが、底本の「感染した泉」を含め、いずれも場所は不明。イスタフリーの伝えるマッスィーサ近郊の「ザルバの泉 (‘Ayn Zarba)」の誤りか [al-Iṣṭahrī, *Kitāb al-masālik al-mamālik*, pp. 56–57; Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 3, p. 136]。

241) カイロ南東にある丘。ムスリムの聖所であり、多くの由来が伝えられている [EI<sup>2</sup>: Muqattam]。北側には、シャーフイー廟をはじめ、死者の町が広がる。ここに挙げられている逸話や、ムカッタムに最初に埋葬された「ムアーフィル出身のアーミル」については、イブン・ファキーフ参照 [Ibn Faqīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p. 59]。

242) アラブ軍がエジプトを征服したときのアレクサンドリアの王 [EI<sup>2</sup>: Muqawqis]。

ウマル・ブン・ハッターブは言った。「そのような事情であるなら、[その地は] ムスリムたちにとってよりふさわしい。」

そこで「ウマルは、その山に」ムスリムたちの墓地をつくるよう命じた。

こうしてその山は墓地となったのである。

最初にそこに葬られたのは、アーミル・アル＝ムアーフィリー（‘Āmir al-‘Mu‘āfirī）であった。次いで、アムル・ブン・アル＝アース [が埋葬された]。偉大なるイマーム、ムハンマド・ブン・イドリース・アル＝シャーフィイー（Muhammad b. Idrīs al-Šāfi‘ī）<sup>243)</sup> ——アッラーが彼に満足されんことを——の墓と廟もかの地にあり、墓にはアードムにさかのぼる彼の系図が記されている。

この山はナイルの北<sup>244)</sup>にある。「ワーハートの山々（Jibāl al-Wahāt）」<sup>245)</sup>もその場所にあるが、今は荒廃し、野生の羊がいるだけである。

「マールディーン山（Jabal-i Mārdīn）」<sup>246)</sup>は、ナスイービーンの2ファルサング上流にある山である。そこにはガラスの鉱山があり、大きくて危険な蛇がたくさんいる。

#### <ヌーン（al-nūn）の頂>

「火の山（Jabal al-nār）」は、ザーバジュの島にある山で、誰もその頂ぎに登ったことはなく、(p. 137) そのまわりに近づくようとする者もない。昼は山から立ちのぼる熱い煙が、夜には赤々と燃えあがる炎が、人を飲み込もうとする。この山のふもとには2本の川が流れており、1つは「水が」熱く、1つは冷たい。両方とも美味である<sup>247)</sup>。

「塩化アンモン石の山（Jabal-i nūšādūr）」はサマルカンドにある。そこからは煙が立ちのぼっているが、鎮まると塩化アンモン石ができる。この鉱床の中に入っていく者は、湿らせたフェルトを身につけていないと焼かれてしまう。この蒸気は場所を変える。[煙が]見えなくなっても、別の場所を掘ると、煙が現れる。煙が見えないと焼かれてしまうが、見えているときには焼かれない。だが塩化アンモン石は、凝集するまで[煙が]隠れているところにこそ生じる。この山は3つの山で、「ビーム（恐怖）」と呼ばれている。[それぞれ]「第1の恐怖」「真ん中の恐怖」「第3の恐怖」である。

「ヒョウたちの山（Jabal al-numūr）」はアンダルス地方にある山で、そこにはヒョウが描かれている。石を割ると、ヒョウの絵があり、その石はヒョウによる傷薬に適する。

243) シャーフィイー学派の名祖にして法源学の創始者（767-820年）。マーリク・ブン・アナス、シャイバーニーなどのもとで法学を学び、晩年はエジプトに移住し、同地で没した。メディナのハディース重視の学風とイラクの論理的な学風とを総合したとされる。主著に法源学を扱った『論考』や、実定法の大著『母なる書』がある。[[シャーフィイー]『岩波イスラーム辞典』]。ムカッタムにある彼の墓は現存し、参詣地として賑わっている。

244) ナイル川の東の誤りか。“samāl”には「左側」という意味もあるが、ムカッタムはナイルの右岸（東側）に位置するので、いずれにせよ正しくない。

245) 「ワーハート」は「オアシス」の複数形とされる。『世界の諸境域』では山の名称として言及されるが、イスタフリーヤヤークートは、ヌビアやスーダンに連なるエジプトの西方にあるいくつかの地域のことだとする。[Hūdūd al-‘ālam, p. 36; al-Iṣṭāḥrī, Kitāb al-masālik al-mamālik, pp. 48, 52; Yāqūt, Mu‘jam al-buldān, vol. 5, pp. 341-342]。

246) マールディーンは、上メソポタミアにある都市の名 [EI<sup>2</sup>: Mārdīn]。現在のトルコ共和国南東部に位置する。

247) イブン・ファキーフと『中国とインドの諸情報』に同様の記述が見られる [Ibn Faqīh, Muḥtaṣar kitāb al-buldān, p. 13; 『中国とインドの諸情報』(家島訳注)、第1巻44頁]。

「ニースラーの山 (Jabal-i Nīlā)」<sup>248)</sup> はヒンドとハルカンドにあり、ヒンドの海の中から突き出ている。その泉は、水を空中に噴きあげている。夜にはすべての水滴が黒い石になるが、日中に噴きあがると白い石になる。

<ワーウ (al-wāw) の項>

「ワールーイの山 (Jabal-i Wārūy)」<sup>249)</sup> は 1700 もの山である。象の住処であり、象たちがそこを歩き回っている。広大な地方で、その地の王は女である。女 [王] が死ぬと、別の者を彼女の代わりに王位につける。

ムサー・ブン・アル＝ムバーラク・スィーラーフィー (Mūsā b. al-Mubārak Sīrāfī)<sup>250)</sup> は言う。「私はこの女の王国に行ったことがある。その国を見たいと思ったのだ。私は巨大なイーワーン<sup>251)</sup> に連れていかれた。そこには玉座があり、1人の女が座っていた。[彼女は]何本ものおさげ髪を垂らし、黄金の首飾りをつけ、黄金の冠を頭に載せていた。400人の侍女が彼女のうしろに立ち並んでいた。1000頭の象が彼女の象舎につながれていた。」

(p. 138) 「ワクワークの山 (Jabal-i Waqwāq)」<sup>252)</sup> は金の鉱山であり、靈魂の場所である。その領域にはあまりにも多くの金があるので、犬の首輪まで金でできている。この山の上には数えきれないほどのサルがいる。[人々は]家で [サルを] 飼う。[サルたちは] 仕事をし、薪を運び、家の掃除をする。

<ヤー (al-yā') の項>

「ホタルの山 (Jabal-i yarā'āt)」は、フタルの地にある3つの山である。それぞれの山には塔が建てられており、毎年3晩、その塔にあかりが灯される。誰もその山に登ることはできない。昼の間、それぞれの塔の上には1羽の鳥がいて、それを「ホタル (yarā'a)」と呼んでいる。翌年まで、それらがどのようにしているのか [誰も] 知らない。それを「アクワーン (AKWAN)」と呼んでいる。

「きらめく山 (Jabal-i yalma')」は炎のように輝きをはなつ岩である。だが、近づくとも見えない。これについては格言がある。いわく、「きらきら輝くものは最大の嘘つきである」。

山々の説明はこのくらいで十分であろう。信頼できる書物から得たことを私は述べた。創造主——その栄光の高められんことを——のお力のしるしである以上、驚くことは何もない。次いで、岩石の特質について一文を記そう。

248) アラビア語やペルシア語の地理書からは確認されない。

249) ザンジュの海にあるワークワーク (ワクワーク) の島にある町の名前 (Dārū?/Warū?) か [EP: Wākwāk]。

250) この人物については知られていないが、カズヴィーニーは、この人物の話として、ワークワークの島のある町で、裸で玉座に座る女王と列席する4000人の侍女の話伝える [Qazwīnī, *Ajār al-bilād*, p. 33]

251) アーチ状のドーム建築で、三方は壁に囲まれているが、一方のみ開いており、そこにはヴォールトが架けられる。モスクやマドラサなどによく使われる建築様式である。

252) イスラム初期の地理書に現れるが、由来が不詳の地で、島とも群島とも言われる。独特の言葉を話す浅黒い肌をした人々が住む、「人間の実」のなる木がある、などと伝えられる。場所の比定も、マダガスカル、スマトラ、日本など諸説ある [EP: Wākwāk]。ワクワークの犬の黄金の首飾りの話は先行する地理書に見える [Ibn Hurdāqbih, *Kitāb al-masālik*, p. 69; *Hudūd al-'ālam*, p. 60]。

## 第6章 石と鉱物の驚異について

至高なるアッラーのいわく、「本当に岩の中には、川がその間から湧き出るのがあり、また割れてその中から川（水）がほとぼしり出るものもある」〔Q2: 74〕。〔すなわちペルシア語では、神は〕次のようにおっしゃっている。「われは石を創造した。そこから水の小川が流れるように。また一部が割れて、そこから水が流れ出すように」と。つまり、戒めを受けられない不信心者の心は〔割れる〕石よりも硬いのである<sup>253)</sup>。

さて、岩石の種類について述べよう。

＜アリフ (al-alif) の項＞

「ダイヤモンド (almās)」はすべての石を割ってしまう石だが、いかなる石でも割れることはない。ただし鉛は別である<sup>254)</sup>。知るがよい。弱点を[まったく]持たないほどに強いものなど何ひとつない。ダイヤモンドの鉱床は「闇の世界」にある。その性質は、冷質かつ乾質である。第4級に属する。(p. 139) [ダイヤモンドを]口に含めば、その中に備わる特性のために、歯を粉々にしてしまう。ダイヤモンドのある場所は竜の居所だからである。

[逸話]

次のように言われている。ある穴の中にダイヤモンドがあり、その上には蛇がいた。その蛇を目にした動物はいずれも死んでしまった。イスカンドルは命じて鏡をつくらせ、その穴のそば近くに置いた。その蛇は、1本の柱の先に据えつけられた鏡をのぞき込んだ。鏡の中に自分の姿を認めるや否や、蛇は死んでしまった。イスカンドルはダイヤモンドをその穴から取り出した。世界中にある [ダイヤモンド] は、その残りである<sup>255)</sup>。

次のように言われている。ダイヤモンドをるつぼの中でヤギの血とともに熔かす。熔けると、ダイヤモンドのかけらはすべて六角形になる。

またある者は次のように言う。ヒンドウスターンには誰も登ることのできない山があり、「レモン谷 (līmū darra)」と呼ばれている。肉を弩砲に載せてそこに打ち込むと、ハゲタカが [肉] 持ち去る。ダイヤモンドのかけらはその肉にくっつき、[ハゲタカが] 肉を食べると、その後、ダイヤモンドのかけらがそこで得られる<sup>256)</sup>。

「下痢の石 (ḥajar al-ishāl)」はタバリストーンにある石である。粉々にして飲むと、下痢をおこす。

253) この一文は、直前に引用された『クルアーン』の前半部分（第2章74節）を踏まえている：「ところがその後、あなたがたの心は岩のように硬くなった。いやそれよりも硬くなった。」

254) ビールーニー著『宝石大全 (al-Jamāhir fi al-jawāhir)』に、鉛がダイヤモンドを軟化させるという記述が見える [Bīrūnī, al-Jamāhir fi al-jawāhir, Ed. Y. al-Hādī, Mīrāt-i Maktūb, Tehran, 1374s, p. 175]。

255) これとほぼ同様の話が『宝石大全』に見える [Bīrūnī, al-Jamāhir fi al-jawāhir, p. 178]。

256) ダイヤモンドの項目に挙げられているのとはほぼ同様の話が、宝石商の著した『ニザーミーの宝石の書 (Jawāhir-nāma-yi niẓāmī)』により詳しく見られる。ヒジュラ暦592年（西暦1195-96年）に書かれたとされる同書は、本書の執筆年ともきわめて近い [Muhammad b. Abī al-Barakāt Jawharī Niẓābūrī, Jawāhir-nāma-yi niẓāmī, Ed. I. Afšār, Mīrāt-i Maktūb, Tehran, 1383s, pp. 141-142]。



<パー (al-bā') の項>

「サンゴ (bussad)」には、赤、黒、白のいくつかの種類がある。冷質で、収斂性がある。粉々にして傷口に塗ると、血が止まる。目に注すと、[目を] 強くする。ブドウ酒に入れると、心を元気づけ、明るくする。海の底で木のように育ち、[海底では] 白い。綱でそれを引っ張って引き上げる。風や空気にさらされると、赤くなって石化する。金と等価で売られる。イスカンドルは言う。「サンゴを身につけている者は痛風 (niqris) が治り、癩癧が抑えられる」と。

「水晶の石 (hajar-i bulūr)」はアラブの荒地にあり、水のように [な石] である。かけらを見つけ、その被膜を取り除くと、本来の輝きが現れる。ひとかけらが 100 マン [の重さ] になることもある。ヒンドの地にもあるが、アラブのものの方が良質である。アポロニウスは次のように言っている。「月と木星が合にあたるような木曜日に水晶を手に入れた者は (p. 140)、[指輪用の] 宝石にせよ。そこ (石) には棒を手にしてハゲタカの上に座っている男の姿を描き、ハゲタカの下に『パー (پ)、スィーン (س)、アイン (ع)、アريف (ا)、ラーム (ل)』の 5 つの文字を書くように。この石を真鍮製の指輪に取り付け、少量の樟脳をこの石の下に入れて指にはめよ。[このようにする者は誰も] 人々から愛されるだろう。だが、黒い衣服を身につけたり、クルミやドングリを食してはならない。自身を清潔に保つように。」

ここではこの [水晶の] 指輪について述べたが、[指輪用の石には] さまざまなものがあり、人にもそれぞれの願望があるだろう。[読者に] 求められるならば、本書はこのようなことについても書き洩らさない。

「解毒剤の石 (hajar-i pāzahr)」にはいろいろな種類がある。なかでもその 1 つは、蛇の首の中から得られる。たとえ蛇を八つ裂きにしても、首のうしろにあるその石ころ (muhra) を取りだすまでは死なない。この石には [かなりの] 価値がある。この石の水薬は毒を血管から取り除く。帝王たちは [その薬を] 食卓に置く。もし食事の中に毒が入っていたら、その石からは汗が浮きあがる。それを「フットウ (ḥuttū)」<sup>257)</sup> と呼んでいる。一部の人々は、「フットウは竜の角であり、そこからナイフの柄がつけられる」と言っている。こちらの説のほうがより正確であろう。

ロバの首にこぶがあるならば、それを取り出すと石化する。[これを] 粉々にして、毒を盛られた人に与えると、毒が毛穴から排出される。

ホラーサーンからもたらされるクジャク石 (dahnaj)<sup>258)</sup> のように、解毒剤には多くの種類がある。

「バダフシャーンの石 (hajar-i Badaḥš)」は高価な宝石である<sup>259)</sup>。その鉱床は東方の山岳地帯にある。そこで穴を掘ると、大小のかけらが見つかる。帝王の家臣がそこを委ねられ、任されている。

257) フットウは、現在では、セイウチやイッカクなどの海獣の牙であったことがわかっているが、以前はそれが何なのか知られていなかった。フットウには毒物が近づくとき汗をかく性質があり、これを柄にした刀を持っていれば毒殺を免れることができると信じられていた。そのため、イスラーム諸国で尊重され、バグダードやカイロなどの市場で高価に商売された。また、中国では「骨咄犀」などと呼ばれ、大蛇の角であるとして珍重されたという [前嶋信次『アラビアの医術』平凡社ライブラリー、1996 年、182-184 頁]。

258) 銅鉱石の一種。緑を基調にクジャクの羽のような濃淡や陰影のある模様があり、装飾石として用いる。粉末にして酢と混ぜたものは強力な解毒剤と見なされたが、その一方で、毒に冒されていない人には害があり、ひどい炎症を引き起こすとされた。また、サソリやハチの刺し傷に塗ると痛み止めになり、ライ病にも有効であると考えられていた [EP: al-Dahnaj]。本書では「ダールの項」に現れる。

259) 具体的どの鉱石のことを指すのか不明であるが、アフガニスタン北東部のバダフシャーン地方はルビーやスピネル、ラピスラズリの産地として名高く、ここでは地名を冠した石として挙げられている。

「琥珀の石 (hajar-i bijāda)」は宝石の一種であり、赤い色をしている。バダフシャー [の石] よりも価値は低い。その性質は、熱質かつ乾質である。その鉱床は東方の山岳地帯にある。

<ター (al-tā') の項>

「トゥグズグズの石 (hajar al-tuğuzguz)」はトゥルクスタンにある<sup>260)</sup>。彼らはこの石で雨乞いをする。(p.141) 人間にはこの石が見分けられないが、獣にはわかる。

アブー・アル=アッパース・イーサー・ブン・ムハンマド・アル=マルワズィー (Abū al-'Abbās 'Īsā b. Muḥammad al-Marwazī) は次のように言っている。「私はこの石のことをマーワラーンナフルで聞いたことがある。テュルク人たちが持っており、その石で雨を降らせる、と言うのだ。私は [あり得ないと] 否定した。

その後、テュルク人たちの王バルキーク・ブン・フブーバ (Bālqīq b. Ḥubūba)<sup>261)</sup> に私は尋ねた。彼は言った。『そのとおりだ。大きな山があり、太陽はその向こう側から昇る。その地方では暑さが厳しく、人々は地下で暮らしている。そこでは野獣や猛獣は、喉の渇きと暑さに苦しんでいる。創造主はそういう獣に、荒野で石を見分ける力をお与えになった。[その獣は] 尻尾で [石を] 持ちあげ、頭を天に向けて遠吠えをする。するとすぐに雨が降るのだ。』

また、バルキークは言った。『私の祖父がそれを確かめようとした。長い年月が経ち、[祖父は] ついにその獣を見つけた。獣のあとを追いかけてゆき、立ち止まらせた。そしてその石を獣から取り上げた。[その石は] 今は我らが帝王のもとにある。[その石を] 太陽にかざすといつでも雲が立ち込め、雨が降る。』

これはよく知られた話である。

<ジーム (al-jīm) の項>

「アメジストの石 (hajar-i jamast)」は、赤と白の間の [色をした] 宝石である。その特質は次のようなものである。アメジストから酒盃をつくり、それで酒を飲めば、酩酊することはない。アメジストのかけらを酒盃に入れても同じ効果がある。枕の下に置くと、良い夢を見る<sup>262)</sup>。アメジストで指輪用の石をつくり、そこに片手には槍を、もう片方の手には盾を持ち、頭に帽子をのせた男を描く。そしてその石を金の指輪に取りつけると、いずれの戦争に出向いても、勝利が得られる。この指輪は、月と火星が合になる火曜日につくる [と良い]。この指輪を身につけている間は、死んだ犬や生きていた犬に用心するように。

「オニキスの石 (hajar-i jaz')」は硬い宝石で、白や漆黒のもの、縞の入ったもの、模様の入ったもの、

260) トゥグズグズは、テュルク語の「トグズ・オグズ (Toguz-Oghuz)」、すなわち「9のオグズ」から転訛した語であると解釈される。一般的に、天山山脈西部に位置した後期ウイグル王国を指す [Hudūd al-'ālam, Minorsky comment, pp. 263-265]。

261) 誰のことを指すのか不明だが、ここで“Ḥubūba”とあるのはおそらく、グズヤカルククの王の称号とされている“jabūya”の誤りと考えられる [LN: Jabūya]。テュルクのバルキークと雨乞い用の石の話は、ヤークートも伝えている [Yāqūt, Mu'jam al-buldān, vol. 2, pp. 24-25]。

262) アメジストは、ギリシア語で「酔わせない」という意味の amethystos に由来する語である。ギリシアでは、アメジストは酩酊を防ぐと考えられていた [R. L. Bonewits 著、青木正博訳『岩石と宝石の大図鑑』誠文堂新光社、2007年、222頁]。アラブの薬物書の中にも、薬としてのアメジストの効果に言及されている。前嶋氏によれば「懐中にすれば痛風を予防する。耳の下において眠れば悪夢をみない」とされる [前嶋信次『アラビアの医術』、231頁]。

点のあるものなど、さまざまな種類がある。エチオピア産、ファールス産、ウルワーン様式<sup>263</sup>、ハチミツ様式（‘asali’<sup>264</sup>）、漆黒のもの（‘ūdī’）、ブクラーン様式<sup>265</sup>がある。なかでもこれ（ブクラーン様式）は最上で、その石からつくられた指輪1つが100ディーナールにも値する。ウルワーン様式は大きく、(p.142) いくつもの器をつくることができる。

オニキスを女の髪の毛に結び、彼女の頭に置くと、すぐに出産する。オニキスのほとんどはイエメンとヒンドゥスターンにある。オニキスから指輪用の石をつくり、そこに、2頭の牛の上に立ち、右手に鞭を、頭には月のような冠を載せた女の姿を描く。そして、石の裏側にこれらの文字を彫り<sup>266</sup>、銀の指輪に取りつける。それを身につける者は明敏になり、その者の手からは良いことが生み出される。これらはアポロニウスの言葉である。指輪をつくるならば、月が巨蟹宮にある月曜日につくる [のがよい]。

アラブ人はオニキスを凶兆とみなしている。なぜなら、その名が「ジャズウ (جزع)」だからである。[アラビア語で同じ表記の]「ジャザウ (جزع)」は「悲嘆」の意である。一部の者たちは、「オニキスを2人の人物の間に置くと、ともに敵意が生じる」と言っている。

<ハー (al-ḥā’) の項>

[ハーの項にあてはまる] 石はたくさんある。

「ユダヤの石 (ḥajar al-yahūd)」はハシバミの実ほどの大きさで、縞の入った石である<sup>267</sup>。オリーブのように、山の上に生えている。ユダヤ教徒たちの手で採掘され、彼らはそれをすり潰す。その石からつくられる飲み薬は [わずか] 6分の1ディルハム (dāng)<sup>268</sup> で、膀胱内の石を溶かし、膀胱をきれいにする。その鉱床はトリポリの山にある。

「黄疸の石 (ḥajar al-yaraqān)」はツバメの巣で採れる石である<sup>269</sup>。黄疸のある者が [それを] 身につけると、黄疸が治る。この石を手に入れたいと望むならば、ツバメの雛に [黄色い] サフランを塗りこめばよい。[親] ツバメはそれを黄疸だと思い、飛んで行く。そして黄疸の石をもってきて、雛の前に置くのである<sup>270</sup>。

イスカンダルは次のように言う。「ツバメの胃からは2つの石が採れる。1つは白く、1つは赤い。白い石は癩癧に罹った人が身につけると、効果がある。赤い石は、錯乱 (faza’) に効果がある。」

263) 本書テキストではいずれも GZWANY となっているが、『宝石大全』のオニキスの項目に、「『ウルワーン（‘urwānī）』と呼ばれる種類があり、あらゆる色が混ざっている」とあることに基づく [Bīrūnī, *al-Jamāhir fi al-jawāhir*, p.286]。

264) 『宝石大全』では、黒く、上下に赤、その間に白の層が入ったものとされている。ピールーニーが典拠としたキンディーは、ハチミツで処理をすると溶解するオニキスについて伝えている [Bīrūnī, *al-Jamāhir fi al-jawāhir*, p.286]。

265) テキストでは BAQRAY だが、ピールーニーは、「(オニキスには) さまざまな種類がある。最上のものは『ブクラーニー (buqrānī)』として知られ、歪みのないまっすぐな線が伸びている」と伝える [Bīrūnī, *al-Jamāhir fi al-jawāhir*, p.285]。なお、ここに挙げるオニキスのそれぞれの名称と特徴については、ピールーニーの『宝石大全』および『ニザーミーの宝石の書』に詳しい説明がある [Bīrūnī, *al-Jamāhir fi al-jawāhir*, pp.284-287; Jawharī Nīṣābūrī, *Jawāhir-nāma-yi nīzāmī*, pp.205-207]。

266) どの文字のことかは記載がない。

267) ピールーニーの『医術における薬物の書』においては、小さなクルミのような形で、矢のような縞模様が入った石であり、形の良いものはパレスチナにあるとされる [Bīrūnī, *Kitāb al-ṣaydana fi al-ṭibb*, p.201]。

268) ダーング (dāng) は6分の1をあらわす単位。この場合は6分の1ディルハム。1ディルハムは約3グラム。

269) 『宝石大全』によると、キンディーは、鶯の巣でダイヤモンドを採取する話とともに、ツバメの巣で採れる「黄疸の石」について述べているというが、詳細は不明 [Bīrūnī, *al-Jamāhir fi al-jawāhir*, p.178]。

270) ほぼ同様の話が『ニザーミーの宝石の書』に見られる [Jawharī Nīṣābūrī, *Jawāhir-nāma-yi nīzāmī*, pp.243-244]。

アポロニウスは次のように言う。家禽の餌袋には、黄色くて小さな石がある。[それを]金の指輪に取りつけば、指にはめた者は人々から愛される。

ハゲタカの巣にはクルミほどの大きさの石があり、それを身につけた女は妊娠する。この石は貴重であり、王たちの宝物庫にある。

次のように言われている。鶯の卵は大きく、産卵は雌鶯にとって (p. 143) 苦しいものであり、うめき続ける。すると、雄鶯が飛んで行き、この石を採ってくる。雌鶯の前に置くと、産卵は容易になる<sup>271)</sup>。これは驚くべきことではない。琥珀が薬を引きつけ、磁石が鉄を引きよせるのであれば、石が鳥の雛を引きつけたとしても、[何ら]不思議ではあるまい。

「嘔吐の石 (hajar al-qiyi)」はミスルにある石である。手のひらで握ると嘔吐する。手から離すと治まる。

マシュリクの境域には、1つの石がある。酢の中に投じると、魚のように泳ぐ。ナツメヤシの種ほどの大きさである。

スィーラーフの海の岸辺には、丸い貝がある。酢の中に投げ入れると動き出し、酢の中を動きまわる。私はこれを実際に見た。

ミスルには、「酢の嫌われもの (bāgīd al-ḥall)」と呼ばれる石がある。酢に投じると、そこから飛び出す<sup>272)</sup>。その理由は創造主のみがご存じである。

#### <ダール (al-dāl) の項>

「クジャク石 (dahnaj)」は緑色の石である。マシュリクの山からもたらされる。その味は甘い。アンチモン (kuhl)<sup>273)</sup>の粉の中ですり潰すと、白くなる。失明させるものもあり、それはフランク産 (farangī)<sup>274)</sup>のクジャク石である。

アポロニウスは次のように言っている。クジャク石を指輪用の石にし、それにサソリの絵を描く。それを身につける女は、みな流産する。クジャク石を粉状にし、2つまみ分を乳清 (dūg)の中に入れる。[それを]蛇に噛まれた傷に塗ると、毒を吸い出してくれる。

#### <ザール (al-dāl) の項>

「金 (dahab)」は、その本質は石である。貴重な鉱物で、火に強い。決して減ることも、腐ることもない。口に含めば、口臭は爽やかになる。金のさぐり針を[目に]用いると、視力が増す。印章として、また装飾品として、金を身につけると、心臓が強くなる。少量[の金]を練り薬

271) カズヴィーニーによれば、鶯はこの石をヒンドの地からもたらし、この石があれば、出産が困難な人も容易になるという [Qazwīnī, 'Ajā'ib al-maḥlūqāt, Arabic text, p. 146, Persian text, p. 200]。また、ある人物がシナで「妊婦の足元に置くと分娩が軽くなる」石を見た、という話がある [『インドの不思議』(藤本・福原訳注)、124頁]。

272) この石は『宝石大全』でも触れられている [Bīrūnī, al-Jamāhir fī al-jawāhir, p. 353]。

273) クフル (kuhl) とは、眉毛やまつ毛を染めるために用いられた化粧品全般の総称。慣例では「アンチモン」「輝安鉱」と翻訳されるが、実際には、その原料はさまざまである [EI<sup>2</sup>: al-Kuhl]。

274) テキストでは「farsangī」であるが、サーデギー本に基づき、ここでは「farangī」と読む。ただし、『ニザーミーの宝石の書』には次のようである。「(2種類あるクジャク石の1つを) 宝石商は『フェレンディーの口/クジャク石 (dahana-yi firindī)』と呼んでいる。一般の人々は『フランクの口/クジャク石 (dahana-yi farang)』といい、フランクの町に鉱床があると思っているが、それは間違いである。それが『フェレンディー』と呼ばれる理由は、その中に、鉄のような成分が含まれているからである。銅やフェレンドは、アラビア語で剣の成分を指し、(フェレンディーは) 剣の成分に関係する、という意味である」 [Jawharī Niṣābūrī, Jawāhir-nāma-yi niẓāmī, pp. 192-193]。

(ma'jūn) の中で粉状に [して服用すると]、心臓を強くし、心の病 (waswasa) を消し去る。金の針で耳に穴を開けると、ふさがらない。金で焼印を押すと、鉄で焼印をするよりも早く、40日 で治癒する。金を粉状にして目に注すと、視力が良くなる<sup>275)</sup>。

(p.144) < 鉱床 [について] >

金の鉱床は数多くある。

イエメンの境域には、「ガマーナ (Ġamāna)」<sup>276)</sup> と呼ばれる町がある。毎朝、人々は家を掃除し、土を溶かすと、家の広さに応じて多かれ少なかれ金が手に入る。[それは] 1 ダーング (6分の1 デイルハム) ほどであったり、1 ディーナールほどであったりする。

< ある鉱床 >

ヒンドに「カラフ (Kalah)」<sup>277)</sup> と呼ばれる町がある。金の鉱床が山の上であり、夜には金の鉱脈が光り輝く。だが、昼間は太陽の光のせいで輝くことはない。そこで、夜、[鉱脈が] 輝いているときに湿った泥をその上に置いておく。日中、それを掘りおこし、[金を] 手に入れるのである。

< ある鉱床 >

ザンジバルには1つの島があり、そこではルリチシャ草 (zabān-i gāw) のように金が生えている。そこには大きな蟻がいて、人間の腹を喰いちぎる<sup>278)</sup>。危険な道が1本しかなく、前方には難所がある。その境域にはたくさんのヒョウがおり、人々はみなヒョウの毛皮を着ている。

< ある鉱床 >

トゥルクスターンには、地面から熱い水を噴き出している泉がある。[その水が] 泉の縁に達すると、凝固し赤い石になる。人々はそれを溶かして、赤い金を手に入れる。

知れ。金は、蒸気のある場所で産出する。分量の等しい硫黄と水銀が混ざり合い、熟成する。冷やされると凝固し、金になる。

< ラー (al-rā') の項 >

「鉛 (raṣāṣ)」<sup>279)</sup> は、錫 (qal') [の一種] であり、ヒンドゥスターンにあるカラフと呼ばれる町からもたらされる。鉛 (surb) はあちらこちらにある。土を溶かすと、そこから鉛が出てくる。カラフの町からは非常に良質の刀剣がもたらされるが、それは「錫の剣 (suyūf-i qal'ī)」と呼ば

275) ここで挙げられる金の特性は、12世紀に書かれたと思われる『ノウルーズの書』にも同じように見られる [Nawrūz-nāma, pp.20-22]。

276) サードギー本ではガーナ (Ġāna)。ガマーナ、ガーナともに不詳だが、イエメンにある谷に「ガーン (Ġān)」という地名が見られる [Yāqūt, Mu'jam al-buldān, vol.4, p.184]。

277) テキストでは KLT となっているが、サードギー本に従って読む。カラフはヒンドの港で、オマーンと中国との航路の中間に位置する [Yāqūt, Mu'jam al-buldān, vol.4, pp.302]。前注 81 も参照のこと。

278) 『インドの不思議』によれば、「ザンジュ地方の上の地域」にある金鉱の近くには猫ほどの大きさの巨大蟻が棲息し、金を求めて地面を掘り返す人間を襲った、という。また 306 年 (918/9 年) にはオマーンのあるアミールが、カリフ・ムクタディルにこの蟻を献上品とした。途中で蟻は死んでしまったが、防腐処理を行い、カリフやバグダードの人々はその死骸を見物することができた、という [『インドの不思議』(藤本・福原訳注)、46 頁]。

279) 当時、鉛と錫は同属の鉱物として考えられており、「鉛」の総称である raṣāṣ には qal'ī と usurb (< surb) があり、より上質なほうを「白い raṣāṣ」として「qal'ī (錫)」と呼び、「黒い raṣāṣ」は「surb (鉛)」を指すとされた [EI<sup>2</sup>: Kal'ī, Bīrūnī, al-Jamāhir fi al-jawāhir, p.415]。

れている<sup>280)</sup>。

次のように言われている。水銀は1000年経つと鉛になり、鉛は1000年経つと銀になり、銀は1000年経つと金になる。金が完全に安定すると、太陽や火によって燃えることはなく、水や土の中で減ったり腐ったりすることもなく、風に晒されて損なわれることもない。一方、銅は老化した金であり、[金が]4000年以上を経たものである、と言われる。

(p. 145) 鉛は硫黄の蒸気と黒い水銀からでき、埃と混ざり合う。そのため、燃やすと赤くなり、辰砂 (*šangarf*) のようになる<sup>281)</sup>。ところで辰砂は水銀からできている。また、鉛丹 (*suranj*) は白鉛 (*šipīd-āb*) からできており、白鉛は鉛からできている。

「大理石 (*ḥajar-i ruḥām*)」は白い石で、扱いやすく、柱や建材として用いられる。

アポロニウスは次のように言っている。大理石から指輪用の石をつくるならば、水曜日[が良い]。そこには、片手に杖を、もう片方の手には取っ手のない壺を持った男の姿を[描く]。その男には2つの翼があり、直立し、頭には角がある。彼の上には雄鶏を、彼の右側には「ラー (𐤋)」「ハー (𐤅)」「ハー (𐤅)」「ハー (𐤅)」の4文字を[刻み]、鉛の指輪に取りつける。この指輪を身につける者は、物忘れがなくなる。この指輪をしている間は、大根を食べたり、管に風を送ってはならない<sup>282)</sup>。

知れ。私は、たとえ理性がこれを受け入れなくとも、これらいくつかの指輪用の石に言及した。人物像を描くことや頭上の雄鶏には、何の意味もない。いかなる観点からも、私はそこに益を認めてはいない。しかし、[過去の]賢人たちは私よりも学があると信じているので、私は彼らの言葉を軽視するわけにはいかないのである。ゆえに、彼らが述べたり書いたりしたことを、私は[そのまま]引用する。

#### <ザー (*al-zā'*) の項>

「エメラルド (*zumurrud*)」は高価な宝石で、いくつかの種類がある。コプト産<sup>283)</sup>、メボウキ色 (*rayḥānī*)、石鱈色 (*šābūnī*)<sup>284)</sup> [などである]。大半は砕けやすい。その鉱床は、マシユリク(Masyūrik)の山々である。エメラルドのあるところは、金の鉱床でもある。エメラルドの性質は熱質かつ乾質で、あらゆる毒の解毒剤である。その飲み薬は、2つまみ分を取り、すり潰し、乳清に入れる。[それを]毒を飲んでしまった病人に与えると、[毒は]尿としてその者から出ていく。

280) インド産の錫でつくられた刀剣は「カルイー剣 (*qāl'ī*)」と呼ばれており、イスラーム世界では有名であった [*EP*: *Kal'ī, Bīrūnī, al-Jamāhir fi al-jawāhir*, pp. 416–417]。町の名前である「カラフ (カラ)」と、錫の名称である「カルウ」の音が似ていることも、産地と素材が結びつけられて広まった要因だろう。

281) 「硫黄と水銀からなる」「燃やすと辰砂のようになる」という記述から、ここで言う「鉛」とは、「黒辰砂」を指すものと思われる。黒辰砂は灰白色の金属光沢をもつ鉱物で、化学的には硫化水銀。辰砂の同質異像体であり、熱すると辰砂 (硫化水銀) に変化する [[黒辰砂]『新版地学事典』(平凡社、1996年)]。なお、本段落の冒頭には「鉱床 (*ma'dan*)」という語の表記が見られるが、それに見合う内容は記されていないため、この語はここでは省略する。

282) “*bād dar anbūba na-konad*” という表現が具体的に何を指すのかは不明だが、火おこしなどの際に管を使って風を送ることと考えた。

283) サージェー本に従う。テキストは「石油の (*naftī*)」。当時の鉱物学者は、エメラルドの鉱山は上エジプトにあるとしていた [*EP*: *Zumurrud; Bīrūnī, al-Jamāhir fi al-jawāhir*, pp. 264–265]。

284) 『ニザーミーの宝石の書』によると、メボウキの色をした「ライハーニー (*rayḥānī*)」は、色が輝き、透きとおっているエメラルドの呼び名で、高価な部類に属す。また色の薄いエメラルドを、ホラーサーンでは「サーブーニー (*šābūnī*)」と呼び、値が張らず、割ったときに底に色が出るとされる [*Jawharī Nisābūrī, Jawāhir-nāma-yi niẓāmī*, pp. 101–103]。

毒蛇がエメラルドを見ると盲目になる、という者もいる。私は、ある王が次のように言うのを聞いた。「これについては嘘偽りが言われておるぞ。わしは、この宝石を蛇の目にこすりつけたが、(p. 146) 何も起こらなかった。」

私は言った。「おそらく、[その蛇は] 毒蛇ではなかったのでしょうか?」

[王は] 言った。「毒蛇とは、どのようなものか?」

私は言った。「細い目をしております。」

彼は蛇遣い (mu‘azzim) を呼び、毒蛇を連れてこさせた。エメラルドを蛇の目にすり込むと、その眼球は溶けて、したたり落ちた。

エメラルドの鉱床は「闇の世界」にあり、イस्कンダルが持ち出した。[現在あるエメラルドは] すべて、その残りである。エメラルドはミスの「コプト (Qift)」と呼ばれる町にある、という者もいる。

「カンラン石 (jawhar-i zabarjad)」もまた、エメラルドである<sup>285)</sup>。カンラン石は、いくつかの宝石が混じり合ったものの名称だとも言われている。まことにアッラーは最もよく知りたまう。

「ガラス (jawhar-i zujāj)」は優美な宝石であり、石から採れる。最良のガラスは「ファラオのもの (fir‘awnī)」であり、ミスルからもたらされる。この宝石は扱いやすく、さまざまな色を受け入れ、染まりやすい。熱した銅をガラスの上に置き、溶かすと、スピネルのように赤くなる。錫を置いて溶かした場合には、青色になる。[この点に関しては] 錬金術の章で説明しよう。

また、ガラス (ābgina) ほどに水の中で持ちこたえる宝石はない。イस्कンダルは海の中に灯台を建てようとし、あらゆる石や宝石を水の中に置いた。5年が経ってから [すべての石を海から] 取り出し、引き上げた。ガラス以外のすべて [の石] から重量が減っていた。そこで彼は、イस्कンダリーヤの灯台の礎をガラスで造ったのである。

「水銀 (jawhar-i zaybaq)」は、「肉体 (金属) の母 (umm al-ajsād)」と呼ばれる。知れ。水銀のあるものは鉱床からもたらされ、あるものは火を介して岩から得られる。水銀 (jīwa) の煙は、それのみで人間 [の感覚] を麻痺させ、聴力や視力を奪う。致死性の毒である。蛇が水銀を見ると逃げ出す。そのにおいから逃れるのだが、死んでしまう。土の中にあつて入手しにくい金や銀に、少量の水銀を流し込むと、金や銀のすべての粒子を抽出できる<sup>286)</sup>。

知れ。創造主——至大なれ、崇高なれ——は、さまざまな蒸気を地中に創造されたが、あるものは水質、あるものは煙質である。それらが混ざり合うと、(p. 147) 色のついた物質になる。あるものは泉となり、あるものは鉱物となる。あるものは、琥珀やラピスラズリやメノウのように固形化し、あるものは、石油やタールや水銀や鉱蠟 (mūmiyā) のように液状である。その秘密は、創造主のほかには誰も知らない。

285) zumurrud は緑色のベリル (エメラルド) を、zabarjad はカンラン石の一種であるベリドットを指すが、両者はしばしば混同された。ピールーニーも2つの語は同じものを指すとしている [EP: Zumurrud; Bīrūnī, *al-Jamāhir fī al-jawāhir*, p. 262]。

286) 水銀を用いて金や銀から不純物を取り除く方法については、ピールーニーが触れている [アフマド・Y・アルハサン、ドナルド・R・ヒル著、多田博一、原隆一、斎藤美津子訳『イスラム技術の歴史』平凡社、1999年、303頁]。

同様に、象の骨をも砕くライオンの歯は、象の歯よりも硬く、ライオンの爪は、頑丈な皮をも引き裂く。それは、神のみがご存じのことである。たとえば牛の皮は、鉄製のナイフですら切り裂くことは困難であるが、ライオンはかぎ爪でこれを「たやすく」引き裂いてしまう。磁石や「酔の嫌われもの石」<sup>287)</sup>などの反応もまた、同じことである。その理由は、創造主のほかは誰も知らない。

「雄黄 (jawhar-i zarnīh)」は金のような石であり、光輝いている。錬金術で用いられる。少量を鍋の中に投じると、すべての肉が溶ける。これは、致死性の毒である。

「明礬石 (jawhar-i zāj)」はさまざまな種類がある。驚くべき鉱物であり、あるものは山から、あるものは泉からもたらされる。[その泉は] 水が凍ると明礬石になる。[明礬は] 水やブドウ酒の中に入れると「不純物を沈殿させ」澄んだ状態にし、また少量を没食子 (māzū) の水に入れると黒くなる。明礬水で卵に「絵を」描き、焼いた場合、卵の殻をむくと、白身に黒い絵があらわれる。地中で明礬が生じるのは、太陽の熱による。それが地中の成分に「強く」働きかけて熱す。そこに水が流れ込むと、凝固して明礬石になる。硬い石の場合は、太陽に熱され、水が流れ込むと、塩化アンモン石となる。明礬は致死性の毒であり、肺を焼くが、さまざまな益もある。これでもって染色する。絹は、いかなる色も決して受け入れないという特性をもつが、最初に明礬水に浸す「と染まりやすくなる」<sup>288)</sup>。

#### <スーン (al-sīn) の項>

「鋼玉 (sunbāda)」<sup>289)</sup> はダイヤモンドのように硬い石である。あるものはそのまま、あるものは加工して使う。あらゆる石を磨滅させるが、いかなる石もそれに対して働きかけることはできない。

アポロニウスは次のように言う。月か太陽が獅子宮にある日曜日に、この石から指輪用の石をつくり、そこに (p. 148) 男が立ち、誰かに挨拶をするかのように、両腕を広げ背中を屈め、片手には二又の槍を、もう一方の手には盾を持ち、足の下には竜がいる絵「を描き」、金の指輪に取りつける。[そうすれば] 人々に愛される。この指輪をはめている限り、死体のそばへ行ってはならず、赤色のものを着たり、水に浸かったりしてもならない。

鋼玉の性質は冷質かつ乾質であり、第4級で、致死性の毒である。ダイヤモンドの一種であるが「それよりも」硬い。なぜなら、ダイヤモンドは鉛で割れるが、鋼玉は割れないからである。

[他方、]「砥石 (sunbādaj)」は石である。[それを] 細かく砕き、ヒンドの粘着性のラック樹脂 (lak-i samgī)<sup>290)</sup> を溶かし、鋼玉と合わせてこねる<sup>291)</sup>。そこから砥ぎ輪をつくると、あらゆるものを砥ぐことができる。

287) この石については既出。

288) 媒洗剤すなわち色どめ剤は、染料を織物繊維に吸着させるため、ほとんどの染料に欠かせず、染色工程では純粋な明礬が常に重要であった。媒洗剤には、「イエメンの明礬 (sadd yamānī)」と呼ばれる明礬が用いられたという [アルハサン&ヒル『イスラーム技術の歴史』(多田ほか訳)、226頁]。

289) コランダム、あるいは金剛砂ともいう。研磨剤としても用いられる。

290) 小型のラック虫 (Laccifer lacca) の出す粘着性のある樹脂性の分泌液で、ムクロジ属、アカシア属の小枝に付着している。とくにインド、タイ、ビルマ、東南アジアに多い。

291) 「鋼玉」と「砥石」を訳し分けたが、基本的には同じものを指していると思われる。この箇所は文章の重複も見られ、著者が推敲を経ずして、典拠となる書物からそのまま引き写したか、あるいは文章に何らかの欠落があろう。サーデギー本にはそもそも「鋼玉」の項目がない。なお、宝石などを加工する砥ぎ輪はラック樹脂と鋼玉からつくることが知られている [Jawharī Nisābūrī, *Jawāhir-nāma-yi nizāmī*, p. 96]。



「鉛（surb）」は石から得られる鉱物である<sup>292</sup>。鉛をよく熱すると白鉛になる。白鉛をさらに熱すると鉛丹になる。鉛を湿ったところに置くと、[水分を] 吸収して膨らむ。耐火性はなく、すぐに溶けてしまう。

<シーン（al-šīn）の項>

「黒玉（šaba）」は黒い石であり、そこから印章をつくる。アポロニウスは次のように言っている。黒玉から指輪用の石をつくるならば、そこには、男が立ち、手には魚をつかみ、足の下には大トカゲがいる絵 [を描き]、その石を鉛の指輪に取りつける [と良い]。そしていくらかのギンバイカ（mürd）<sup>293</sup> を石の下に置くと、虫の心配がない。[この指輪をつけている間は、] 黒い服を着てはならず、ロバにも乗らず、蛇のそばには近寄らない。

「赤鉄鉱（šāḍana）」は「血の石（hajar al-dam）」と呼ばれる<sup>294</sup>。アポロニウスは言う。火曜日に指輪用の石をつくり、そこに、裸の男と、その右側には髪をうしろになびかせた女が立ち、男は女の方に手を置いてうしろを振り返っている絵 [を描き]、2人の足の下には「アイン（ع）」、「ハー（ح）」、「ハー（ح）」、「ハー（ح）」の文字を書く。[これを] 鉄製の指輪に取りつけ、潜水ガモ（ḡawwāš）<sup>295</sup> の舌をこの石の下に置くと、身につけている限り、愛される。この指輪を持っている間は、火に水をかけてはならず、火を消してもならない。犬に用心するように。

(p. 149) <サード（al-šād）の項>

「真珠貝（šadaf）」はバフラインとオマーンにある。オマーンは周海につながっている。[貝は] 風が吹く春になると現れ、口を開く。たとえるならハトのようである。滴を口に含み、潜っていく。7日後、日の出前に上がってきて、風や東風を受け、暖かくなると、午後の礼拝の時刻まで海底に降りる。涼しくなると、日没時まで上がっている。40日間をこのようにして過ごし、東風によって育てられる。[そうして] 貝の腹の中にある滴が固まり、真珠（murwārīd）となる。その後は [翌年まで] 浮き上がらず、海中で満足し、貝全体が真珠色を帯びる<sup>296</sup>。潜水夫が貝を採るときには、息をしないよう口や鼻を紐でふさぐため、臓腑まで窒息してしまう。浮き上がってくるときには意識がなくなっているが、すぐに貝の身を炙って食べると、回復する。真珠（lu'lu'）については、ラームの項で述べよう。

292) この項の頭に「鉛（al-rašāš）」の語が再度現れるが、「スイーンの項」で「ラー」の語が現れることは解しがたく、不要と判断した。また鉛の説明はすでになされているため、サーデギー校訂本では、この一段を、先の「鉛」の項の最後尾に付している。

293) テキストには MZD とあるが、サーデギー本に従う。別の写本には「エメラルド」とある。なお、ギンバイカ（銀梅花）はフトモモ科の低木。「マートル」とも呼ばれる。

294) 「血の石」と呼ばれる石には2種類ある。1つは赤鉄鉱（ヘマタイト）であり、粉末が赤色であるためこう呼ばれた。もう1つは玉髓の一種ヘリオトロープであり、黒地に赤色の斑点が入っていることに由来する [『岩石と宝石の大図鑑』147、229頁]。本文の šāḍana を「赤鉄鉱（酸化鉄の鉱物）」としたのは、ビールーニーが、「šāḍanj は、砥石を赤くするがゆえに『血の石』と呼ばれる」というガレノスの言を引用していることによる [Bīrūnī, *al-Jamāhir fī al-jawāhir*, p. 354]。

295) “ḡawwāš” は、「潜る人」の意。ここでは潜水して魚を捕る、首の長い水鳥の総称。イラン北部やカスピ海沿岸に多く生息する [Mu'īn, *Farhang-i fārsī: Gawwāš*]。

296) 真珠貝に関するこのような伝承は、アリストテレス著『岩石学』のアラビア語訳に端を発し、アラブ、ペルシアの文学作品において幅広く見られる [Eṭ: al-Durr]。

<ター (al-tā') の項>

「雲母(talq)」は白く、輝く石である。輝きでは銀に似て、色では真珠に近い。何層にもなっている。火に強い。火はあらゆる物質を溶かすが、雲母は別である。雲母は古い酢の中で糊(hamīr)になる。また、雪や氷で溶けだし、乳のように白くなる。火では溶けないのに、氷で溶けるとは驚きである。もし、このような性質をもつ石があるという驚くべき話を遠方の町から知らされたなら、知性ある者たちは受け容れなかったであろう。だがこれもまた[真であり]、ほかの不思議な話の裏付けとなる。

<アイン (al-'ayn) の項>

「メノウ ('aqīq)」は、イエメンの境域にある赤く輝く石である。指にはめると、悲しみが心から取り除かれる。預言者——彼にアッラーの平安と祝福あれ——は、「メノウをはめよ。さすれば祝福され、悲しみが心から出ていくであろう」とおっしゃった<sup>297)</sup>。また次のように言われている。戦場で切り落とされた片腕が発見されたとき、預言者——彼に平安あれ——は[それを]見ておっしゃった。「埋葬せよ。もしおまえがメノウをはめていたなら、切られなかったのに。」

(p.150) <ガイン (al-ḡayn) の項>

「あぶみがね (ḡarzī)」は、赤、緑、漆黒、褐色(nafī)などさまざまな種類がある。ヒジャーズの地からもたらされる。それを持つことは吉兆である。

<ファー (al-fā') の項>

「トルコ石 (firūzaj)」は宝石の1つであり、幸運を宿している。早朝、それを目にすると、気持ち晴れわたる。練り薬に入れると、毒の害を取り除く。アンチモンに入れると、視力が良くなる。賢人たちは言う。「トルコ石で指輪用の石をつくり、そこに、長いおさげ髪の女と、2人の子供が脇にいる絵を描く。この石を銀[の指輪]に据えて身につけると、魔術(jādūy)から守られる。」

「銀 (al-fīḡda)」は、金に次いで貴重な鉱物である。金の持つ特性はどれも銀にもある。だが、金には及ばない。賢人たちの言によると、アッラーこそが最もよく知りたまうのだが、銀はもともと、質量ともに硫黄に対して水銀がまさった蒸気である。それが冷えると固まり、[銀となる。]銀の鉱床は数多くあるが、最良の鉱床はマグリブの境域にあり、いつも銀が地表に見えている。

「鋼 (al-fūlād)」は、賢人たちの言によると、水銀と硫黄を含む蒸気から生じ、煙のように埃と混ざり、凝固する。鋼の鉱床は多数あるが、最良の鉱床はヒンドゥスターンとイエメンとヘラートにある。ヒンドゥスターンにはある種の鋼鉄(āhan)があり、それでナイフをつくり、動物を切りつけると、殺しはするものの、血は出ない。鋸をつくり、木に向けて放つならば、[刺さった先に]火が起る。もろもろの金属を引きつけ、火で黒くなる。火の勢いを強くすると、金と同じよう[な外観]になる。ヒンドのミフラーージュ王(Malik-i Mihrāj)<sup>298)</sup>には、この鋼鉄からつくった剣があっ

297) ムスリム著『真正集(サヒーフ)』には、「アビシニアの石を取り付けた指輪について」という項目がある(項目番号2094)。13世紀の注釈者ナワウィーは、この「アビシニアの石」をオニキスあるいはメノウであると解釈している。ただし、その石が悲しみを取り除くという記述は見られない[Muḥyī al-Dīn al-Nawawī, *Ṣaḥīḥ Muslim bi-Ṣarḥ al-Imām Muḥyī al-Dīn al-Nawawī*, Ed. Ḥ. Ma'mūn, Dār al-Ma'rifa, Beirut, 1997, vol. 7, p. 297]。

298) サンスクリット語で「大王」を意味する Mahārāja の転訛。この記述からは、具体的にどの王が想定されているのかは特定できない。

た。炎のようであった。そのような鋼は少なく、その地方からはさほどの量が産出しないため、商人たちはそれを求める。

またヒンドゥスターンでは、鉄鉱石を熔かし、長期間にわたって糞の下にねかせる。すると、(p. 151) [鉄鉱石中の] 土に由来する成分はすべて腐食し、純度の高いものが網目状 (mušabbak) に残る。それを再度熔かしたものを、「バララク (balālak)」<sup>299)</sup> と呼んでいる。

アポロニウスは次のように言う。1片の鋼と1片の銅と2片の金を熔かし、そこから指輪用の石をつくる。そこにサソリの絵を描き、その頭上に、次のようにして<sup>300)</sup> 「アッラーの御名において (بِسْمِ اللَّهِ)」と書く。この指輪を身につけている者は、[それを] サソリによる傷口に当てると治る。

知れ。鋼鉄は密度のつまった鉱物であるが、優美に見えるほどに光沢が出る。両面が凹凸状になった鏡をつくり [のぞき込むと]、凸面では顔は爪ほどに見え、離れるほどに小さくなっていき、しまいには、像は逆さまになる。一方凹面では、あたかも幅広の盾であるかのように見える。綿を凹面に置き、太陽に晒すと火がつく。

#### <カーフ (al-qāf) の項>

「胆礬 (qalqand)」と「鉱滓 (qilīmiyā)」は鉛である。金や銀を含んだその浮き滓は傷に効く。致死性の毒であり、「緑礬 (qulquntār)」も同様である<sup>301)</sup>。

#### <カーフ (al-kāf) の項>

「琥珀 (kahrubā)」は、クルミの木から採れる樹脂が固まったものである。「硫黄の長 (sayyid al-kabārit)」と呼ばれ、すぐに火がつく。手でこすって温めると、藁を引き寄せる。このように引きつける力は何によるのか、という点については、創造主のみがご存じである。

#### <逸話>

次のように言われている。イスカンダルが世界を征服したとき、ヒンドに1人の王がいた。その名をカイドといった<sup>302)</sup>。[イスカンダルは] カイドに対して戦いを挑んだ。[カイドは] ことづけを送った。「私の王国を攻められるな。[かわりに] 私はあなたに贈り物を贈ろう。[それは] どんなに飲んでも空にならず、流してしまってもしばらくすると満杯になる酒盃だ。」

イスカンダルは言った。「もしおまえが本当のことを言っているなら、おまえの領土を[攻めずに] 増やし、[おまえのところから来る] 賢人たちを私のもとで厚遇してやろう。」

(p. 152) そこで、[カイドは] 酒盃をイスカンダルに送った。その盃からどれほど水を飲んでも、再び満杯になった。そこで [イスカンダルは] 賢人の1人に尋ねた。「この盃が [空にならない] 理由を私に教えよ。」

[賢人は] 言った。「この盃は、琥珀や磁石のように [ものを] 引き寄せる物質でつくられていま

299) “balārak”とも表記される。鋼と鉄からつくられた物質の名前で、インドではこの鋼材から剣がつくられ、剣の名前ともなった [LN: Balārak]。その硬さと折れにくさにゆえに各地で重宝された。

300) 「アッラーの御名において」の語が縦型に上下反対方向から書かれる。サーデギー本の385頁の図を参照のこと。

301) 3つの単語はサーデギー本の表記に従う。“qalqand”や“qulquntār”は、ギリシア語の Chalkos に由来し、現在も Calcanthite と呼ばれる硫酸塩鉱物のことである。『宝石大全』には、「(緑色の石で) 鉄をこすり、鉄が赤くなって1週間後もそのままなら、その石は“qalqand”である」という記述が見える [Bīrūnī, *al-Jamāhir fī al-jawāhir*, p. 274]。「鉱滓 (qilīmiyā)」もまたギリシア語由来の Calamine に相当し、アラビア語やペルシア語では、金や鉛などの鉱物を熔かした際に生じる滓を指す。

302) インドの王カイドおよびイスカンダルとのやりとりについては、本訳注(1)冒頭の章の注6(208頁)を参照のこと。

す。[琥珀と磁石の] 一方は鉄を引きつけ、他方は藁を引き寄せます。この盃は空気中から蒸気を引き寄せています。どれほど微細なものもこの中に集まるのです。」

イスカンダルはこのわざに驚いた。

知れ。琥珀を身につけている者は、黄疸に罹らない。また、[流産せず] 子供を胎内に守る。[琥珀を] すり潰し、風をあて、火に投じると、燃えてよい匂いがする。熱質である。練り薬に入れると心が朗らかになり、動悸を取り除く。琥珀の中には宝石のような輝きがある。精神によい働きがある。溶かすと油のようになる。

サンダラック樹脂 (sandarūs)<sup>303</sup> は琥珀の一種であり、その鉱床は中国の境域とルース地方にある。言われているところによると、ルースには泉が1つあり、[普段は] 湧き出ているが、風がその上を吹くと凝固する。その琥珀は良質である。

「硫黄の石 (hajar-i kibrīt)」は、「肉体 (金属) の父 (abū al-ajsād)」と呼ばれる。また、水銀は「霊なるものの父 (abū al-arwāh)」という。ここでいう「肉体 (ajsād)」とは、金、銀、銅、鉄、錫のことであり、錬金術で用いられる。硫黄と水銀は2大要素である<sup>304</sup>。

硫黄の鉱床は世界中に数多くある。ラームホルムズ (Rāmhurmuz)<sup>305</sup> の境域には泉があり、夜ごとに光を発している。そこから硫黄が採れるが、別の場所に運ぶと、光らない<sup>306</sup>。[硫黄は] 鉱床の中で輝くが、燃えはしない。もともとは地中にある煙成分の蒸気であり、[地上の] 空気とつながる穴のない状態で長い時間が経つと、固まって[硫黄と] なる。極度の熱質である。湿気を帯びたものに硫黄の蒸気が触れると、湿気は取り払われ、蒸気とともに上に引き上げられる。その湿気が色を帯びていると、色は失われる。このようにして、硫黄の蒸気は色をも奪い去る。

ダマーヴァンドの山の頂には硫黄泉がいくつかある。山頂は (p.153) 100 ジャリーブ<sup>307</sup> の広さがある。それぞれの穴のまわりには、金のような硫黄がある。それらの穴からは蒸気が立ちのぼっている。[その蒸気が] 堆積すると、硫黄 (gūgird) になる。

#### ＜ラーム (al-lām) の項＞

「真珠 (lu'lu')」は幸運をもたらし、益ある宝石である。アンチモンに入れると、視力を良くする。練り薬に砕いて入れると、心を強くし楽しくする。あるものは黄色く、あるものは黒く、あるものは白い。黄色や黒になる理由は、真珠貝が炎暑 [の季節] に外に出てきて、腐敗した蒸気に触れてしまうためである<sup>308</sup>。真珠の性質は冷質かつ湿質であり、第2級に属す。心臓の血を澄んだ状態にする。真珠 (murwārid) は核であり、火で燃える。良い香りは真珠を傷める。世界中で、キーシュとオマーン [に属すパフライン] の海以外には、[真珠の産] 地はない。真珠貝を粉状にして死者

303) ヒノキ科サンダラック (*Tetraclis articulata*, 和名マオウヒバ) の分泌液から得られる天然樹脂。淡黄色あるいは褐色で、ワニスや香に用いる。『中国とインドの諸情報』では、インドにおいて、殉死の際に「松脂油 (サンダラックの樹脂) をその燃えさしの上に注ぐ。松脂油は火を放つと、まるで石油のようにパッと燃え広がる」と伝えている [『中国とインドの諸情報』(家島訳注)、第2巻 67頁]。

304) 錬金術における物質生成原理の1つに、硫黄の蒸気と水銀の蒸気の混合物が熟成することによって金や銀などの鉱物が生じるというものがある [EI<sup>2</sup>: Kimiyā; al-Kibrīt; Zi'bak]。

305) イラン西部のフーズスターン州の町。マニが暗殺された場所として知られる。

306) サードギー本に従って読む。校訂テキストは、“be-derafṣad”であり、「別の場所に運んでも、光る」となる。

307) 1 ジャリーブはおよそ 1,592 平方メートルに相当する面積単位。

308) 先の「真珠貝」の項目によると、本来、真珠は春の風によって育てられるものである。

の上に撒くと、腐敗しない。

〔ヒジュラ暦〕500年（西暦1106-07年）には、真珠貝がオマーンの海から逃げ、真珠が高価になった。母貝に降りかかった災難のためである。〔真珠貝は〕クルズムの海に行ってしまった。しかし、クルズムでは、底が深く多くのワニがいるために、潜水夫が潜ることができない。真珠貝がオマーンの海から逃げた原因は創造主のみがご存じである。その後、〔真珠貝は〕戻ってきた。

オマーンの潜水夫は2個の壺を足に結んで海底に潜る。海底には光があり、真珠貝が動いているのが見えるので、〔潜水夫はそれを〕取って〔壺に〕入れる。

〔スピネルの石 (ḥajar-i la'ī)<sup>309)</sup>は硬く、耐火性のある宝石である。

光を放つスピネルがあり、〔それは〕サランディープにある。サランディープの通貨はスピネルであり、金は、〔我々の〕ディルハム銀貨のように、重視されていない。光輝くスピネルは「水の牛」がもたらす。〔「水の牛」は〕夜、それ〔を灯り〕に草を食む。人は待ち伏せ、赤い泥土を〔スピネル〕めがけて投げつけ、奪い取る<sup>310)</sup>。

スピネルの特性には、口に含むと喉の渴きを鎮める、というものがある。ロフーン山から採れる。

〔ラピスラズリの石 (ḥajar-i lāzward)〕は、マシュリク<sup>311)</sup>の山々から採れる宝石である。〔マシュリクには〕2つの山があり、1つを (p.154)「バダフシャーン」といい、そこからはバダフシャーン産〔ルビー〕(badahš)が採れる。もう1つは「ジルム (Jirm)」<sup>311)</sup>と呼ばれ、ラピスラズリが採れる。ラピスラズリを火に投じると、水のようになる。別の宝石を熔かし、熔けたあとに乾燥させ、そこにラピスラズリを投じると、柔らかくなる。ラピスラズリは金を引き寄せる。ラピスラズリには決まって金の筋があるが、それは石や土から引きつけたためである。熱質かつ乾質であり、心臓に効く。非常な恐怖を免れたばかりの人や窮地に陥った人に〔ラピスラズリを〕いくらか与えると、心を強くし、恐れを心から取り除く。

#### <ミーム (al-mīm) の項>

〔磁石 (maḡnāṭīs)〕は鉄鉱石 (sang-i āhan) を引き寄せる。1マンの量があるときの磁石の働きは、力を内に秘め、銅製の盆の覆いがあるうとも、鉄を引き寄せるほどである。すり潰して傷口に塗ると、毒を引き寄せ、鏃を抜き出す。

〔磁石の〕鉱床は海底にある。船には鉄の釘が用いられない。なぜなら、〔鉄の釘を使うと〕磁石が〔海中へ〕引き込み、船を破壊するからである。磁石をニンニクの液に浸けると、引き寄せなくなる。断食中の人のつばや血液でも同じである。磁石を手にとると、痛風が治まり、女は子宝を授かる。性質は研磨材質である。鉄屑を飲み込んでしまった人に、磁石2つまみ分の飲み薬を与えると、〔鉄屑は〕血管から外に出される。

309) ここではルビー (yāqūt) と区別して「スピネル」と訳すが、yāqūt と la'ī はともにルビー（もしくは赤色の宝石）を指す語としてよく混同されてきた。近年の研究によると、鉱物学の古い術語としては、yāqūt はコランダム（酸化アルミニウム）を指す一般名称で、赤の yāqūt がルビー、黄色の yāqūt がトパーズ、青の yāqūt がサファイア、白の yāqūt が白サファイアを指す。la'ī は、明らかに yāqūt より劣るもので、現代の鉱物学でいうところのスピネルに相当する。色はさまざま（赤、バラ色、紫、青、緑など）だが、赤いものが断然高く評価された。ただし、韻文や文学作品においてははなずれとも区別されず、ルビーのイメージで使われている。[Živa Vesel, "Sur la terminologie des gemmes: yāqūt et la'ī chez les auteurs persans," *Studia Iranica* 14 (1985), pp. 147-155].

310) 同様の話が本書第6部（テキスト359-360頁）にも見られるが、そちらのほうが詳しい。

311) バダフシャーン地方の町の名 [Yāqūt, *Mu'jam al-buldān*, vol. 2, p. 129]. ヒンドゥークシユ山脈の最高峰を擁する現在の Jurm にあたるか。

ヒンドの人々は磁石でもって驚くべきことをする。[たとえば] 磁石で家をつくり、鉄の偶像をその中に運び込む。磁石がそれを四方八方から引き寄せるため、[偶像は] 宙に浮いたままとなる。また言われているところによると、1人のヒンド人が偶像を磁石から彫ってつくった。月経中の女の血をそれに塗りつけ、雲に指し向けたところ、すぐに大きな雲と激しい風が起った。[その像を] 温かい水で洗い流すと風は鎮まった。

磁石で指輪用の石をつくり、[そこに] 2枚の翼を有し、右手に鞭<sup>312)</sup>を、(p.155) 左手には笞を持ち、足の下には1つの輪がある娘の絵を[描き]、鉛[の指輪]に取りつける。[それを] 身につける者は、記憶力が増す。

ミスルには1つの山があり、ナイフや剣を鞘から抜くと、山はその者から[それらを] 奪い取り、返さない。引き寄せることに関する磁石の作用は驚くべきことだが、[磁石の例は、ものを] 引き寄せる[性質をもつ] ほかの鉱物にとっての証拠となろう。

[逸話]

次のように言われている。ヒンドゥスターンの王は大きなスピネルをミスルのアズィーズ(‘Azīz)<sup>313)</sup>に送り、「我らの宝物庫にはこのような宝石がいくつもある」と誇示した。ミスルのアズィーズはナイルの川岸にある宮殿に住んでいたが、使者からそのスピネルを奪い、ナイルの水に投げ込んだ。ヒンドの使者は動転して泣きわめき、言った。「世界中でこれほどの宝石はありません。どうして川に投げ捨てたのですか!」

アズィーズは宝物庫係を呼んで、言った。「行って、あの金の魚を持ってこい。」

[宝物庫係は] 金の魚を持ってきて、アズィーズの前に置いた。ミスルの王はヒンドの使者に言った。「スピネルをとってきてやろうか?」

[使者は] 言った。「はい。」

王がその魚を水に入れると、[魚は] すぐにスピネルを尾でつかんで現れた。アズィーズは魚から[宝石を] 取ると、宝物庫に送り届けた。

ヒンドの使者は言った。「私はこのスピネルに驚いていましたが、今やあなたの魚により驚いています。」

この[話の] 意図は、宝石を引き寄せるような魚がつくられていた、ということにある。

<逸話>

次のように言われている。スルターン・サンジャル(Sultān Sanjar)<sup>314)</sup>はマフムード軍(ガズナ

312) DRRH という表記で、サーデギー氏は“dirra”(鞭)との母音表記を付している。この場合、娘は両手に鞭をもつことになる(左手の笞は“iāziyāna”と表記)。あるいは“durra”と読み、「真珠」と解することも可能であろうが、磁石と真珠と鉛はあまり結びつかないと考え、ここでは「鞭」の訳語をあてる。

313) 『クルアーン』において、ユースフを奴隷として買ったエジプトの有力者の称号。この称号は、のちにユースフ自身にも用いられている [Q12: 30, 51, 78, 88; *EP*: ‘Azīz Miṣr]。

314) Adud al-Dawla Abū al-Harīṭ Sanjar b. Malik Ṣāh (1097-1157 年はイラン東部を支配、1118 年以降は大セルジュークのスルターン)。少年時代にホラーサーンの統治を委ねられ、兄であるスルターン・ムハンマド(在位1105-1118年)の死後は、大セルジュークのスルターンとして国内西方領土の後継問題に対する干渉だけでなく、東方境域に存在したホラズム・シャー朝、カラ・ハン朝、ガズナ朝、カラ・ヒタイ朝にも積極的に軍事活動を行った。しかし1153年、ホラーサーンで起こったオグズ族の反乱鎮圧に失敗し、3年間捕虜となり、脱走後まもなく死亡した。彼の死後、セルジューク朝東部でのスルターンの権威は失墜した [*EP*: Sandjar]。本書の著者が献詞したトゥグリル3世は、スルターン・ムハンマドのひ孫にあたる。

朝軍（*laškar-i Maḥmūdiyān*）<sup>315</sup>を破り、ガズナ（*Gaznīn*）<sup>316</sup>で略奪の限りを尽くしたとき、スルターン・マフムード（*Sultān Maḥmūd*）<sup>317</sup>の宝物庫から、錠の掛かった3つの金の箱を手に入れた。[箱は]サンジャルの前に運ばれ、開けられた。そのうちの1つには黄金の水差し（*qarāba*）が入っており、別の箱には銀の水差しが、残る1つには太鼓（*ṭabl*）が入っていた。サンジャルは笑って言った。「マフムードとはおかしな奴よ。」

[そして]この2つの水差しを両方とも壊し、太鼓を持ち帰った。太鼓を叩いた者はみな放屁した。人々はしばらくそれを笑っていたが、[やがて]太鼓も壊された。

ガズナの王「マフムード」には（p.156）そば近くに仕える1人の友人がいた。彼は経験豊かで、この上ない思慮と知性を備えていた。サンジャルは、彼を自身の従者に加えることを望んだが、彼は承諾しなかった。[サンジャルは]命じて、彼を無理やり連れてこさせた。サンジャルは言った。「なぜマフムードに仕えることはできて、私に仕えることはできないのか？」

彼は言った。「どうして私がおまえに仕えようか。おまえは、世界にひとつとして同じようなものが存在しない3つの呪物（*ṭilism*）を壊したというのに。」

[サンジャルは]言った。「どういうことだ？」

彼は言った。「水差しについては、そこから飲み干した者は、たちどころに[病から]回復したのだ。1つは麻痺（*fālij*）や顔面麻痺（*laqwa*）や癩癩（*šarʿ*）のような冷質の病に効果があり、もう1つは、発熱（*ṭab*）、結核（*sil*）、消耗熱（*diqq*）、疥癬（*jarab*）といった熱質の病に効果があった。そして太鼓は、[筋肉の収縮による]腹の痙痛（*qawlanj*）に苦しむ者が叩くと、その痛みはすぐに和らいだ。200ファルサングもの彼方、ヒンドゥスターンからも人々がやって来て、その水差しから飲み薬を飲み、回復したのだ。マフムードはそれらを金の箱にしまっていた。王権がおまえに移り、おまえはそれらを壊してしまった。私は「マフムードの」友ではあったが、どうしておまえの友になれようか？」

この話は、鉱物には「ものを」引きつける性質がある、ということを示すために述べた。その理由は神のみがご存じである。

「白鉄錠（*ḥajar-i marqasīnā*）」は、「光の石（*ḥajar al-rawšanāyī*）」と呼ばれる。目に塗ると、視力が増す<sup>318</sup>。[ただし]よくすり潰して用いる場合であり、さもなければ効果がない。癩癩をもつ人の首にあてると、発作が起きない。この石から指輪用の石をつくり、そこに「ツバメ魚」を描く。石の下方にはサソリの絵を描く。ツバメの羽を石の下に置き、銀[の指輪]に据えつけると、爬虫類がまったく寄りつかなくなり、体液[の過剰な働き]を抑える。

315) ここでのマフムードとは、ガズナ朝第3代スルターン *Abū al-Qāsim Maḥmūd b. Sabkutigin*（在位 998–1030年）のこと。サンジャルがガズナ朝軍を破り、ガズナを略奪したのはマフムードの時代ではなく、のちの *Arslān Šāh* (*Malik Arslān*) の時代の出来事（1117年）である [EP: *Sandjar; Ghaznawids; Maḥmūd b. Sabkutigin*]。よってここでの「*Maḥmūdiyān*」（マフムード家の者たち）は「マフムードの王朝」を意味すると考え、通例に従い「ガズナ朝」と訳す。

316) カブルの南西に位置する都市。アラビア語史料では *Gazna*、ペルシア語史料では *Gaznīn* と記述される。ガズナ朝の祖先アルプテギンがガズナを征服して以降、同朝の王都として繁栄した。特に11世紀のマフムード、マスウードの時代には、苛烈な徴税対象となったホラーサーンへの巡察行とインドへの略奪遠征という、同朝の政策上きわめて重要な2方向への移動の結節点として機能した [EP: *Ghazna*; 稲葉穰「ガズナ朝の王都ガズナについて」『東方学報』66、1994年、200–252頁]。

317) 前注315参照。度重なるインド遠征を行い、ヒンドゥー教寺院を破壊し、イスラームの擁護者として名声を得るとともに、多数の略奪品を得た。ガズナ朝の最盛期を築いた君主 [「ガズナ朝」『新イスラーム事典』]。

318) ペルシア語で「視力が増す」にあたる表現は、直訳すると「光を与える（*rawšanāyī dehad*）」である。

塩化アンモン石 (qātūn) の形をした、色のついた石がある<sup>319)</sup>。そこに、先端にリングのついた枝を右手に持つ若者の絵を描き、石の裏には「アイン (ع)」の文字を刻む。[これを] 身につけている者は [人々から] 大切にされ、不思議な夢を見る。

私は、これら [石] の印章をアポロニウスの言葉から引用した。結果はどうか、ということは、創造主がご存じである。

「鉱蠟 (mūmiyā)」の鉱床は山の洞窟にある。アッラジャー (Arrajān)<sup>320)</sup> には山からしみ出す泉があり、1滴 (p.157) 1滴がアラク酒のように白い。この洞窟には鉄の扉がかけられ、翌年までそのままおかれる。[次の年になると、] 長たちが集まり、裸の男が [洞窟の中を] 降りて行き、堆積している分だけガラス瓶に入れて集める。その飲み薬は1つまみ分で [効果が] あり、効能は次のとおりである。骨が折れてしまった人が飲むと、即座に傷口に達し、すぐに [痛みが] 治まる。折れたものを接合する。

「密陀僧 (jawhar-i murdāsang)」は銀の浮き滓である<sup>321)</sup>。致死性の毒であり、少量を釜の中に入れると、パンはすべて腐ってしまう。

「サング (jawhar-i marjān)」は、「カーマ (kāma)」「ブッサド (bussad)」とも呼ばれる。フランクの海とルームの海にある。植物であり、海の底に生え、木のようになる。乾燥すると赤くなり、石化する<sup>322)</sup>。

「塩 (milḥ)」の鉱床。[塩は] 貴重な鉱物である。腐敗の原因を取り除き、スパイスや液体を保護する。肉もそれと一緒に腐らないほどである。消化を促進する。コヘスターンには4ファルサング四方の塩田がある。諸地方の水がそこに集まるが、春になると水が流れ込まず、すべてがそこで塩になる。[人々は] それを運び出す。

#### <ヌーン (al-nūn) の項>

「塩化アンモン石 (nūsādur)」は、熱い蒸気が凝固したものである。硫黄とは異なり、水を冷やし、火を消す。塩化アンモン石を水の中に入れると、夏でも氷が得られる。

「銅 (jawhar-i nuḥās)」は重要な鉱物で、地中で生成される。まったく混じり気のない水銀と硫黄の蒸気が完全に熟成したものである。だが、火で熔けてしまう。熔けた銅を傷にあてると、肉を再生する。アンチモンに入れると輝きが増す。飲むと、死にいたる。酢の中に入れると緑になり、緑青 (zangār) となる。銅の鉱床はカーブルの町にある。その煙から硫酸塩が得られる。硫酸塩はい

319) サーデギー本に従い、「qātūn」と読む。テキストではこの段落は、白鉄鉱の項目につけられているが、別の石の説明と解した。石の名称は挙げられておらず、「色のついた石 (sangī-yī mulawwan)」がその名称か、あるいは次に出てくる「鉱蠟」の可能性もある。

320) Kūraとも称される。ファールス地方の西端、フーゼスターンとの境界に位置する地域を指す。その地域の主要都市の名でもあり、近くにはターブ川が流れる。この町近郊の谷の洞窟には鉱蠟の採れる泉があるという [Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, pp.268–269]。

321) 『宝石大全』では、「銅と混ざった銀を抽出する際に [用いる]、るつぼの中の鉛から取れる」とされる [Bīrūnī, *al-Jamāhir fi al-jawāhir*, p.421]。一酸化鉛のことだが、色によって金密陀、銀密陀と呼ばれる。

322) この部分は、ピールニーが伝えるキンディーの記述にはほぼ一致する [Bīrūnī, *al-Jamāhir fi al-jawāhir*, p.305]。本書の「パーの項目」中、「ブッサド (bussad)」として既出。



ずれも銅から得られるが、ヒンドの硫酸塩のみは錫から得られる。

アポロニウスは言う。純粹な銅から指輪用の石をつくるならば、そこに (p. 158) ライオンの絵を描き、[アラビア語で「ライオン」を意味する]「アサド (أسد)」の名を記し、月と星を1つ描く。[その間] 絵師は言葉を発してはならない。[これを] 身につける者は、腹痛の心配がない。

#### <ワーウ (al-wāw) の項>

「バラの石 (ḥajar al-ward)」は黒い石である。この上に、右手に竜をつかみ、左手にふるいを持って立つ男の絵を描く。石の下には、「ア Rif (ر)」 「ワーウ (و)」 「パー (پ)」 「ラー (ل)」 の文字を刻み、鉛の指輪に据えつける。[これを] 身につける者には内面的な知識が明らかとなり、デーヴから逃れられる。この石は試金石である。

牛の心臓には神経の骨があり、それを取り出すと、石のようになる。そこにライオンを描く。その上に裸の男が座り、ライオンのたてがみをつかんでいる。ライオンの尾は、首輪のように男の上半身に巻きつき、尾の先には犬の頭のように牙が見えている。[これを] 金の指輪に据えつけると、身につけた者は [人々に] 受け入れられる。この印章で3つの蠟に型押しし、それぞれを墓場に隠し、1週間後に持ち出す。[これを] 癩癩をもつ人にあてると、3ヶ月後に健康になる。

#### <ヤー (al-yāʾ) の項>

「ルビー (yāqūt)」は、赤や黄色や青の宝石である<sup>323</sup>。赤いものは、すべての中で最も良い。また、ほかのどの石よりも重く、火に対して耐性がある。練り薬に入れると、非常に楽しくなり、心が元気づけられる。口の中に入れてだけでも楽しくなるほどである。特性は、この石のもつ輝きから [生じる]。あらゆる鉱物は火に熔け、壊れてしまうが、ザクロ色のルビー (yāqūt-i rummānī) のみは別である。性質は、熱質かつ乾質であり、第4級である。身につける者は、疫病を免れる。ルビーは、金や鉛よりも重い。その鉱床は、サランディーブのロフーンの山にある<sup>324</sup>。[この地は] アーダム——彼に平安あれ——が [樂園から] 降り立った場所であり、海の中にある。ルビーを身につける者は、体中の血液がきれいになり、熱による病 (ḥumūm)、卒中 (sakta)、癩癩の心配がない。

この章は、すべて賢人たちの言葉にもとづいて述べてきた。さまざまな書物で私自身が知り得たことを引用した。(p. 159) 至高にして神聖なる創造主こそが、その状態や、ありとあらゆるものごとの状態を最もよく知っておられる。

さて、岩についての一文を記そう。至高なる造物主の恩寵によって。

## 第7章 石碑とその他の岩について

知れ。岩は世界中にたくさんある。[そのなかでも] 驚くべき岩や、何らかの文字が記されている岩について、この章で述べていこう。石や山の話になったときに有益であるように。

323) laʾl (スピネル) との違いについては前注 309 参照。ルビーは今ではコランダムのうち赤色のものを指すが、本書での yāqūt はトパーズ (黄色コランダム) やサファイヤ (青色コランダム) も含む。

324) キンディーの説として有名 [Bīrūnī, *al-Jamāhir fi al-jawāhir*, pp. 118–119]。

< [イェルサレムの] 岩 >

まずは、「聖なる家（イェルサレム）の岩」である。[これは] 貴い岩である。次のように言われている。アダムが天から地上のヒンドゥスターンにやって来たとき、現世の苦痛と厭世観に見舞われた。彼は、楽園の息吹やそよ風を思い出し、さめざめと泣いた。そして跪拝し、聖なる家の岩の上に額をつけた。創造主は、それを世界中の人々の跪拝の場所とし、12万4千人の預言者たちのキブラとした。この岩は、聖なる家のモスクの中にある。巨大な台座が造られたが、[これは] 預言者ダーウード——彼に平安あれ——が造ったものである。長さ300アラシユ、幅150アラシユで、その高さは6アラシユ、台座の基部から岩まで6アラシユである。1アラシユごとに1段あり、岩はこの台座の上に置かれている。

次のように伝えられている。復活の日、イスラフィール——彼に平安あれ——はこの岩に立ち、ラッパを吹く。それは2つの角がある角笛で、1本はその上部に、1本は下部 [についている]。[イスラフィールがラッパを] 吹くと、魂が肉体に戻る。最後の審判 [が行われるの] は、この場所である。

< イスカンダリーヤの岩 >

それは次のようなものである。双角の所有者（イスカンダル）が「闇の世界」を目指し、その中に入り、向こう側に達したとき、1人の天使に出会った。[天使は] 立ち、目を天に向け、ラッパを口にくわえていた。そして言った。「おお、人の子よ。闇の世界までをも目指すとは、おまえには光の世界は十分ではなかったのか？」

[天使は] 彼に1つの石を与え、言った。「おまえにはこの石が役に立つ。」

そこで双角の所有者は、(p.160) 石の重さを知るためにその石を引っ張っていった。その石に対して100倍もの石を用意したが、それらすべてを足すよりも重かった。ヒズルが言った。「おお、イスカンダルよ。ひと掴みの土をこの岩と比べてみるがよい。」

ひと掴みの土をその岩と比べたところ、[土のほうが] 重かった。[イスカンダルは] 言った。「これにはどのような英知があるのか？」

[ヒズルは] 言った。「あなたは東から西まで [世界中を] 巡ったのに、満足しなかった。[だが] 土があなたの頭に載せられれば、あなたは満足するだろう、ということをおまえに示しているのだ。」

双角の所有者はその後、奔走することを減らし、信仰に励んだ。やがてこの世を去った。

< ムーサー——彼に平安あれ——の岩 >

それは貴い石であり、人の頭ほどの大きさである。イスラエルの民は [ムーサーに] 水を求めた。[ムーサーは] 困惑した。至高なるアッラーは、「杖でこの岩を打て」と啓示を下した。打つと12の泉がそこから湧き出した。それは [ちょうど] 彼の氏族の数だった。

次のように言われている。ムーサー——彼に平安あれ——は慎み深い男だったので、誰も彼の体を見たことがなかった。イスラエルの民は言った。「まさかムーサーは睾丸が大きすぎて、そのためにいつも服を着ているのだろうか。」

ある日、[ムーサーは] 沐浴をしていた。服を脱ぎ、この岩の上に置いたが、岩は転がって行ってしまった。ムーサーは裸でその[岩の]あとを追いかけた。そうして部族の人々の前に現れた。人々は彼を見て、ムーサーにはそのような欠陥はないと知った。至高なるアッラーのいわく、「だがアッ

ラーはかれらの言った中傷から、かれを清められた」[Q33: 69]。その後、[ムーサーは] 何度か杖でその岩を叩いたが、そのたびに叩いたところから泉が湧き出した。

< [イスカンダリーヤにある] 岩 >

イスカンダリーヤで、地中から1つの岩が見つかった。それにはギリシア語 (rūmī) で次のように書かれていた。「善行をなせ。そしてそれを忘れよ。悪行をなしたならば、それを忘れるなかれ。」

ある本に同じようなことが書かれている。「おお、アーダムの子よ。良きことをなしても、それを心に留めるな。だが悪事をなしたときは、それを忘れてはならない。」

このとおりに行動する人はみな、必ずや安息を得られるだろう。

< 逸話 >

アウザーイー (Awzā'ī)<sup>325</sup> は、次のように言う。イスカンダリーヤの町の門で、1つの岩が見つかった。そこには次のように書かれていた。「人間が創造された。生まれた当初は無知であった。その後、時が流れ、人には猶予が与えられた。人は信仰を (p. 161) おろそかにするようになった。何かを好む者は誰しも [より] 多くを欲する。[欲したものが] 与えられると、[今度は] それを惜しむ。善人を好みつつも善行をなさず、悪人を嫌いながら悪行をなす。罪による死を嫌うが、罪から手を引かない。人間の目的はすべて、食べることと眠ることにある。」

別の面には、次のように書かれていた。「現世のいわく、『おお、貪欲な者よ、私のもとでどれほど苦しむのか。誰も私から喜びを得なかったというのに。私の欠点を知る者は、私のそばに寄りつかない。』」

[さらに] 別の面には、次のように書かれていた。「私と仲良くする者はみな、来世よりも私を好んだ。そのような者は不幸である」、すなわち [ペルシア語では]、「私と出会い、来世よりも [私を] 選んだ者はみな、不運な人である。」

< 逸話 >

フダイル [・ブン]・イヤード (Fuḍayl-i 'Iyād)<sup>326</sup> は次のように言っている。洪水が1つの石をミスルまで運んだ。そこには次のように書かれていた。「悲しきことよ。おお、ミスルよ。おまえの荒廃はなんと早まり、おまえの威光はなんと弱ったものか。王が黒くて不具ならば、おまえから立ち去るほうがよい」、すなわち [ペルシア語では]、「おお、ミスルよ。なんと早く荒廃していくのか。おまえの王権が、黒く、鼻の折れた王にいたるなら、おまえのところに留まるよりも、おまえから逃げ出すほうがよい。」

< [アルヴァンドの] 岩 >

アルヴァンドの山には大きな岩があり、そこに、四角形に削られた2つのくぼみがある。そこには珍しい書体で書かれた碑文がある。これは「神々の書 (nibišta-yi ḥudāyān)」と呼ばれている<sup>327</sup>。

325) Abū 'Amr 'Abd al-Rahmān b. 'Amr. 初期イスラーム法学のシリア学派の代表的人物。おそらくダマスクスに生まれ、774年にバイルートで没した [EI<sup>2</sup>: al-Awzā'ī]。

326) 初期のスーフィー。サマルカンドで生まれてクーファで学び、アッバース朝カリフ、ハールーン・アル＝ラシードに禁欲主義の教を説いた。メッカに移住し、803年に同地で死去した [EI<sup>2</sup>: al-Fuḍayl b. 'Iyād]。

327) ハマダーン近郊にあるアケメネス朝期の「宝の書 (ギャンジュ・ナーメ)」碑文 (現在でも「神の書 (ḥudāy-nāma)」とも呼ばれる) のこと。楔形文字の3ヶ国語 (アッカド語、古代ペルシア語、エラム語) で書かれている。

イスカンドルがハマダーン<sup>328)</sup>を通り、この岩を見たが、なんと読むのかわからなかった。いくつかの集団から何人かを招集したが、誰もわからなかった。そこで、1人の老人が連れてこられた。[老人は]この文字を知っており、言った。「次のように書かれています。『**真実とは、至高なるアッラーの天秤であり、公正がそのまわりを回る**<sup>329)</sup>。虚偽とは、シャイターンの秤であり、そのまわりを不正が回る。ゆえに、**真実を語れ**。たとえ、髪の毛1本ほどであろうとも。なぜならそれはアッラーの光である。汝らの中にある**真実を語れ**。真実は真実を生み出す。汝らの中にある**虚偽は語るな**。虚偽は虚偽を生み出す。前者の**果実は薬**であり、後者の**果実は病**である。云々。[さらに、]私は嘘をついた。創造主は私をこの岩の下に閉じ込めた。人々への戒めとならんがために。』」

もの言わぬこの岩から、(p.162)この雄弁な英知を得るがよい。私はこの岩を見た。いくつかの行は上から下に、いくつかは逆さまに記されていた。釘の箇所は、帝王の年代か、あるいは宝の在り処か大事件を示している。

#### < [スライマーンの] 岩 >

かつて、1つの岩が発見された。そこには次のように記される言葉で[文字が]書かれていた。「**イスタフルより朝に出兵し、イーワーンで昼寝をし、夕方にヨルダンへと行く。誰が我々と我々の父祖に対する恩寵をあなたに求めるのか。**」

明々白々だが、イスタフルからハマダーンまで2時間で到着することは、風以外には不可能である。[ゆえに]これは、スライマーン——彼に平安あれ——のことであろう。次のような話がある<sup>330)</sup>。

スライマーンはこのアーチに至り、その上に1羽のハゲタカがいるのを見た。[スライマーンは]彼に尋ねた。「このアーチは誰が造ったのか?」

[ハゲタカは]言った。「私の父や祖父から聞いたところでは、このアーチの建設者が誰であったのかは誰も知りません。」

このアーチは2つあり、1つは郊外の城塞に、もう1つはシリア人街区(Āl-i sūrī)の小路にある。これがその[岩の]説明である。

#### < 逸話 >

ジャリール・ブン・アブドゥッラー(Jarīr b. ‘Abd Allāh)<sup>331)</sup>は言う。「私はファールスにいたとき、1つの町を征服した。[人々は]我々に、ある洞窟への道を教え、[洞窟の中に]財貨があると言った。我々はそこへ行き、多くの武器を得た。その後、部屋を見つけた。その中には大きな岩があり、黄金の玉座が載っていた。そこには、これまで見たこともないくらいに醜い人物がいた。その装飾品は錆つき、実に恐ろしげな光景であった。その岩には文字が書かれていたが、誰も読めなかった。それには手をつけずに置いてきた。だが我々は、それを見ることでいくつかの教訓を得たのである。」

まことにアッラーは最もよく道理を知りたまう。

328) サーデギー本に従う。校訂テキストではMHBAZ。

329) テキストにはtadūruとあるが、yadūruと読む。次の一文も同様。

330) イブン・ファキーフは、ハマダーン郊外にある遺跡を訪れたスライマーンが、そこにいるハゲタカと会話をするという同じ逸話を残している [Ibn Faqīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, p.219]。

331) バジャール族出身の伝承者、詩人。イラク征服に参加していた。671/2年あるいは673/4年没 [al-Ṣafadī, *Kitāb al-wāfi*, vol.6k, pp.75-76]。